



神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

イエスに繋がるものを心に留めて生きる

新年あけましておめでとうございます。神の母聖マリアの守るべき大祝日から 2021 年が始まります。マリアの人としての偉大さをあらためて心に刻み、今年一年の模範としましょう。田平小教区の皆さんにはこの場を借りて新年の挨拶に代えさせていただきます。

田平教会は幸いに、新年もミサを祝って始めることができました。佐世保市内、長崎市内ではすでに、クリスマスからミサが停止している教会があり、新型コロナウイルスの影響を思い知らされています。今日のミサでは説教のあとには新成人の祝福式もあり、喜び合える一日となったことを心から神に感謝したいと思います。

思い返すと 30 年以上前、私も新成人として祝ってもらいました。故郷での成人式を終えると、小学校の同級生が学校の体育館に招かれました。一通り祝ってもらってから、卒業時に埋めたタイムカプセルを、わいわい言いながら掘り起こしました。それぞれ思いの込められたものでしたが、私が埋めたものはあまり見たくないものでした。

多くの同級生は、「二十歳になった自分に送る品物」をタイムカプセルに収めました。私は「二度と見たくない物」を埋めました。それは父親から買ってもらった野球のグローブでした。私は運動音痴だったので、聖書の物語にある「一タラントン預かって、埋めてしまった」あの僕のように、自分から遠ざけたくて埋めたのです。いざ二十歳になって掘り起こす時、「考え方が間違っていたなあ」と痛感しました。

さて福音朗読でマリアは出来事を思い巡らしました。イエスが責任ある大人になり、たとえば会堂で聖書を読む年齢になった時、幼子だった時のことをマリアも人々も思い出すわけです。マリアは出来事に納得します。中田神父が暗い過去として封印した記憶とは違い、マリアが思い巡らした出来事はあとで思い返して納得する出来事・先で楽しみとなる出来事になったのでした。

私たちは人生の節目で記憶に刻む出来事を迎えます。何を記憶に刻むかは大切です。私のタイムカプセルは反面教師です。新成人を迎える方は「あとで思い返すのが楽しみ」そんな出来事をこれから重ねてください。マリアは幼子が生まれた時、「思い巡らす価値がある」そう思って出来事を納めました。その結果、救いの完成をマリアは見届けます。

場合によっては、一つを手に入れるために、一つを手放さなければならないかも知れません。その時のお手本はマリアです。マリアはイエスに繋がる出来事を残し、イエスに結びつかない出来事を手放しました。一つ手に入れるけれども、何かを捨てなければならない。その時はためらわずにイエスと結びつかないものを手放しましょう。これから権利と義務を手にして歩む新成人への、先輩からの言葉になればと思います。



主の公現 (マタイ 2:1-12)

ひれ伏して幼子を拝んだ

主の公現の祝日を迎えました。朗読箇所最後の部分を切り口に考えてみたいと思います。「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」(2・11)

占星術の学者達は、「ひれ伏して幼子を拝んだ」とあります。占星術の学者が私たちに教えたのは、ひれ伏して拝んだ幼子イエスが、「王であるキリスト(黄金)」であり、「祭司であるキリスト(乳香)」「預言者であるキリスト(没薬)」の姿を備えていることでした。はるばる来て、「王・祭司・預言者」であるキリストに礼拝をささげに来た。何かを思い出しませんか？

私には、2018年に日本においてになった教皇様の姿が重なります。バチカンからはるばる旅をして、イエス・キリストを礼拝しました。あの日の典礼暦が何だったか覚えているでしょうか？「王であるキリスト」の祭日でした。教皇様はきっと、「王であるキリスト」を礼拝しに来たのだと思います。

占星術の学者たちはもう一つのことを教えています。遠くからやって来た学者たちが、近くにいたユダヤの人々、またヘロデ王よりもお生まれになった方がどなたであるかをよく知っていた、ということです。

日本でも、同じことが当てはまると思います。クリスマスをもっと多くの日本人が祝っています。こんなに身近に祝って、親しんでいるのに、多くの日本人の中に幼子イエスはいません。もう一歩踏み込んで、クリスマスを祝う多くの日本人の中に幼子イエスを意識させるためには、私たちが占星術の学者の役割を確実に果たさなければならないと思います。

二つの方法で、役割を果たしましょう。一つは、救い主の礼拝をその場限りにならないということです。私たちの住む日本で、クリスマスはだれもが知っている「日常」になりましたが、いまだにその場限りの出来事で終わっています。最近日本で「イースター」という言葉さえ「日常」になりつつあります。こんなにキリスト教の行事が溶け込んできているのに、そこから本来のキリスト教信仰に結びつかないのは、「その場限りの出来事」で終わっているからです。

私たちはそうであってはいけません。お生まれになった救い主は、ずっと私たちと共にいてくださるのです。「クリスマスが終わったから、しばらくミサは休みだ」私たちの教会との関係がこうであっては、誰が新たにキリスト教の信仰にたどり着けるでしょうか。誰も、たどり着けません。毎週、できる人は毎日、お生まれになった救い主のもとを訪ねて、「共にいてくださるキリスト」「王であるキリスト」を人々に示していきましょう。

もう一つは、救い主を迎えた生き方を二の次三の次にしないということです。日本人の多くの人々は、クリスマスよりも大事なことがある

と考えて生きています。クリスマスが、二の次三の次だからです。「どうやったらクリスマスを優先できるか」と考えていないのです。そうではなく、常に「どうやったらクリスマスを優先できるか」「どうやったら主の復活を優先できるか」「救い主イエスとの繋がりをどうやったら優先して生きていけるか」考えるということです。

占星術の学者たちは、最後にユダヤの国を出るにあたり、「『ヘロデのところへ帰るな』と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った」(2・12)となっています。彼らは使節団としての国と国のしきたりよりも、神の導きを優先する道を選んだのです。

いただいた信仰の恵みをその場限りにしない。どうすれば神との絆を優先できるかを考える。この二つを忘れないで生きるなら、私たちはこの日本にあっていつも占星術の学者です。イエスとの絆を常に温め続ける学者は、この日本にいて十分最先端の学者でいることができます。

主の洗礼(マルコ 1:7-11)



主の洗礼 (マルコ 1:7-11)

イエスは聖霊による洗礼を始めるために来られた

主の洗礼を迎えました。今年はこの日まで、クリスマス飾りを置きました。9時ミサの後に、馬小屋を片付けてもらって、典礼の雰囲気も少しの間年間主日が続き、2月中旬からは四旬節に移行することになります。ただ、大変寒くなったので、天気次第です。

まず心に留めて欲しいのは、私たちは「主の洗礼」のミサを祝いましたが、新型コロナウイルスの感染が急速に拡大した長崎市内は、今週と来週の公開主日ミサが中止となりました。私の気持ちとしては、ミサに参加できない皆さんのために、みなさんとささげる今週来週のミサをYouTubeにアップして、お役に立ちたいと思っています。ご理解とご協力をお願いします。

今週の出来事を考えるために、洗礼者ヨハネの次の言葉を鍵に、考えてみたいと思います。「わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。」(1・8)ヨハネが授けていた悔い改めの洗礼と質的にまったく新しい洗礼、「聖霊による洗礼」がイエスによってもたらされるのです。

しかしここで二つの疑問が残ります。一つは、イエスによってまったく新しい洗礼がもたらされるのであれば、イエスがヨハネから洗礼を受けることがどうしても説明できません。毎年、「主の洗礼」の祝日が来るたびに考えるのですが、どうしても消化できず、もやもやとしていました。

もう一つの疑問は、洗礼者ヨハネは、イエスに洗礼を授ける前も授けた後も、「イエスから洗礼を受けた」と書かれていない点です。イエスが洗礼を授けている報告を受けて、「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」(ヨハネ 3・30)と公言していますから、静かに舞台の中心を譲ったのでしょうか。イエスの洗礼を重要なものとして人々に示したのに、なぜ洗礼者ヨハネは洗礼を受けに行かなかったのでしょうか。

私は、すべての説明が洗礼者ヨハネから受けたイエスの洗礼にあると理解しました。古くから、イエスが洗礼を受けたのは、イエスがヨルダン川の水に触れることで、水を清められたのだと解釈されてきました。洗礼は、水を用いて行われます。洗礼者ヨハネ以後は、ヨルダン川の水だけでなく、世界中の水が用いられます。そこでイエスが洗礼を受けることで、イエスが清められたのではなく、イエスが世界中の水を清めた。そのためにイエスの洗礼は意味があったと理解したわけです。

ただし、これだけでは洗礼者ヨハネがイエスから洗礼を受けなかったことが説明できません。そこで私は、もう一步踏み込んで考えました。イエスは、「洗礼を清めるために」洗礼を受けたのではないのでしょうか。

ご存知ないかもしれませんが、教会は洗礼の三つの形を現在認めています。通常は「水による洗礼」を受けるのですが、他にも「血による洗礼」と「望みの洗礼」を認めています。「血による洗礼」とは、イエ

スを信じる人が、まだ洗礼を受けていなかったけれども、イエスへの信仰を表したことで命を奪われたとします。迫害の時代はあり得ることです。すると教会は、「この人は殉教によって、『血による洗礼』を受けたのだ」と理解しているのです。

また、同じようにイエスを信じ、イエスへの信仰を十分に持っていたけれども、残念ながら「水による洗礼」を受ける前に世を去ったとしましょう。このような人についても教会は「この人は『望みの洗礼』を受けたと考えられる」そう理解したのです。

イエスが、洗礼者ヨハネから洗礼を受けました。その後、洗礼者ヨハネはどのような最期を遂げたのでしょうか。彼はイエスへの信仰を持ちつつ、ヘロデの権力で奪った妻ヘロディアの憎しみを買い、殉教したのでした。彼は「水による洗礼」を受けませんでした。が、「血による洗礼」を確かに受けたのでした。

またイエスがこの世におられた時代に、イエスを信じる人がすべて「水による洗礼」を受けたわけではありません。イエスへの信仰を持ったまま、この世を去った人々も当然いるでしょう。この人たちは「望みの洗礼」を受けたと理解できるかも知れません。ですから、イエスが洗礼者ヨハネから悔い改めの洗礼を受けた時、これから始まる「聖霊による洗礼」のすべて、「水による洗礼」「血による洗礼」「望みの洗礼」を、清められたのではないのでしょうか。

考えてみるとヨハネは、いつかヘロデの憎しみを買い、イエスのために殉教することを覚悟していたかも知れません。ですからあえて「水による洗礼」のお世話にならなかったのかも知れません。これは誰にも証明できないことですが、想像は膨らみます。

洗礼者ヨハネの「悔い改めの洗礼」は、徹底して「後から来られる方、イエス・キリスト」に人々を向けさせるものでした。私たちはすでに「水による洗礼」を通してイエス・キリストに結ばれています。さらにこれから一年、ミサに続けて参加して、イエスとの繋がりを深めていきましょう。

ミサに参加できる私たちは、今残念ながらミサに参加できない長崎三地区の皆さんに、勇気と励ましを与えることができます。ミサに参加できている間は、どうやったらこのミサの時間を確保できるか考えましょう。そうすることで、受けた洗礼の恵みを大切にす人となることができます。



年間第2主日 (ヨハネ 1:35-42)

イエスのもとに泊まる人になる

今週と来週二週間、感染拡大の影響で公開ミサが中止となりました。ふだんの説教と違い、皆さんの手元に届けるため、手短かに話したいと思います。配られた説教の原稿を、去年の緊急事態の時期を乗り越えた時のように、役立てて下さい。また、余裕のある人は YouTube (ユーチューブ) から Kouji Nakada を探して下さいと、1月10日、17日、24日のミサの様子を見ることができます。よかったら登録して下さい。

洗礼者ヨハネの二人の弟子がイエスに「どこに泊まっておられるのですか」(38節)と尋ねると、イエスは「来なさい。そうすれば分かる」(39節)とだけ答えました。ここからの描写を今あらためて読むと、おかしな点があります。次のように書かれています。「そこで、彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。」(39節)

「どこにイエスが泊まっておられるかを見た。」この描写、これまでずっと目が留まりませんでした。豪華な宮殿に住んでいることを想像していたのでしょうか。あるいは贅沢な生活を想像して、確かめに行ったのでしょうか。ただ単に、どこにイエスが泊まっておられるか知りたかったのでしょうか。

これは「泊まる」という言葉を掘り下げることで解決します。「泊まる」には「教えや信仰など、ある状態にとどまる」という意味もあるそうです。すると弟子たちが見たのは「イエスが父なる神に深く一致し、神との親しさにとどまっている姿を見た」となります。そして、彼らがイエスのもとに泊まったということも「父なる神との親しい交わりに招き入れられ、時を過ごした」そういうことを意味するのです。

父なる神との親しい交わりを体験することを、「イエスのもとに泊まった」と表すのは興味深いことです。私たちは1月17日からまたも公式ミサの中止に追い込まれました。これは起こっていることだけを見れば悲しいことですが、見方を変えれば、すばらしい機会を得たとも言えるかも知れません。なぜなら、「そしてその日は、イエスのもとに泊まった」朗読箇所書かれている通りの体験に招かれているからです。

考えてみて下さい。教会聖堂での時間と、自宅での時間、どちらが長いでしょうか。自宅での時間がはるかに長いはず。教会聖堂は、いつか自宅に帰る時間が来ます。「そしてその日は、イエスのもとに泊まった」この体験ができるのは教会聖堂でしょうか、自宅でしょうか。

私たちは、公式のミサの時間を奪われました。しかし神は、体験の機会も与えて下さいました。各自が持っている聖書を読んだり、聖書と典礼を用いたりして、「イエスのもとに泊まる」体験をする機会が与えられました。まずは今週と来週、イエスをお迎えし、イエスのもとに泊まりましょう。お迎えしたイエスは私たちを宣教へと派遣して下さいと違ひありません。



神のことばの主日（年間第3）（マルコ 1:14-20）

イエスが「あなたに話したいことがある」と言っています

先週に引き続き、今週も公開の主日ミサが中止になっています。フランシスコ教皇様は何かを察知しておられたかのように、今週年間第3主日の呼び方を「神のことばの主日」と命名されました。

ミサの「聖体の食卓」に参加できない中で、「みことばの食卓」がとて重要になってきます。みことばに養われるならば、それは霊的な聖体拝領をすることでもあります。しっかりと今週の朗読箇所を耳を傾けましょう。

イエスがガリラヤで宣教を始めましたが、そもそも人はどんなときに話を聞いてくれるのでしょうか。二つ考えてみました。一つは、借りてきた言葉ではなくて、自分の中から出てくる言葉で話している時です。

イエスの言葉は、誰かに学んだものではなく、イエスご自身の言葉、誰にも教えられていない「新しい言葉」でした。聞いた人々が「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く」（マルコ 1・27）と驚いた「新しさ」がありました。

もう一つは、「私に話してくれている」と感じる言葉です。どんな人でも自分に関係ないと思えば話を聞き流してしまいます。けれども自分に関係があると思えば、少々難しい話でも理解しようと耳を傾けるのです。宣教するイエスのことばには、これら両方の特徴が備わっていました。誰かの話を借りることなく、それでいて一人ひとりに語りかけている話し方でした。

イエスのこうした語りかけが、ガリラヤの漁師たちの心に響きました。いわゆる「偉い人」の話であれば、気にもかけなかったかも知れません。ですがシモンとアンデレ、ヤコブとヨハネは、生活が一変するかも知れない呼びかけにじっくり耳を傾け、人生を賭けてイエスに従ったのです。

私はかつて、リュウマチでずっと寝たきりだった奥さんを見送ったご主人とご遺族に、通夜でこんな話をしたことがありました。「奥さんは十分十字架を担いました。ご自分のためだけではなく、多くの人々の救いの分まで、担っていました。それができたのは、イエス様といつも一緒に十字架を担っていたからです。寝たきりだったのに、中田神父などよりよほど、信仰を証しして生涯を終えたのです。」

幸いにこのあいさつはご遺族に届きました。借り物の言葉ではなく自分の言葉で語る。一人ひとりに話す。これらがどんなに大切かを知った時でした。それ以後、ずっと、通夜と葬儀で守っているやり方です。

私たちは今、ミサのない日曜日を過ごし、「みことばの食卓」に着いています。与えられた朗読箇所から、「新しい語りかけ」「自分のためになされている語りかけ」を見つけ、大切に温めましょう。必ず、イエスは私たちを養うみことばを、今日も用意しておられます。



年間第 4 主日 (マルコ 1:21-28)

イエス・キリストの名に信頼して語る

年間第 4 主日、「汚れた霊に取りつかれた男をいやす」物語が福音朗読に選ばれました。ことばが命令となり、命令が出来事となります。イエスはこの出来事で何を示そうとしておられるのでしょうか。

いわゆる「悪魔払い」のような儀式は、どんな時代、どんな地方でも知られていたと思います。ただそれらは儀式としてのものであって、イエスのわざは怪しい儀式によらず、「黙れ。この人から出て行け」と叱るだけでした。

私はこれまで、単に「汚れた霊が出て行った」という外面的なこと、表面的なことしか見ていませんでしたが、もっと考えると、いやされたこの男性は「解放された」のではないか。そのことに気づきました。

最近「生活の質を上げる取り組み」がいろいろな場面で注目されるようになりました。例えば単に長く生きるだけでなく、「より人間らしく生きる」そのための取り組みが重視されます。医療でも痛みを取り除きながら治療するとか、外見が損なわれないような手術とかです。どのように生きるか。どのように人間らしい生活を取り戻すか。この点に社会も注目し始めました。

痛みと付き合いながら生きている人がいます。私は痛みと縁がないので、ほとんど気持ちが分かりません。けれども、痛みから逃げられない人の中には、「いっそのこと腕を切り落としてほしい」とか「足を切り落としてほしい」と考えるまで追い詰められる人もいます。

その人に、痛みのない生活が与えられたら、きっと「救われた」「解放された」と思うことでしょう。そして、痛みを取り除いてくれた人を「私を解放してくれた人」「救ってくれた人」と考えるでしょう。

物語にも、イエスによって解放された人が登場します。このように神の国の支配がすべての人に及ぶ時、人は苦しみ悩みから解放されるのです。この人は表面的な自由ではなくて、生きていることのすべてを神に感謝できる、そんな心の底からの解放を、イエスに与えてもらったのです。きっとこの人は、イエスを「救い主」と理解したことでしょう。

イエスは汚れた霊を「叱る」だけで、汚れた霊の支配から解放しました。かつて私は、似たような場面を父から聞いたことがあります。家庭訪問を二人一組とする宗教団体の人が実家の父を訪ねてきたそうです。いよいよ二人が、父を説き伏せようとしたその時、父はこの二人を「うせろ」と一喝しました。二人は尻尾を巻いて逃げていったそうです。

この話、当時は面白い話としてだけ聞いたのですが、今考えると二人一組で回るこの人たちが父の言葉によって新興宗教の束縛から解放され、まことの救いに導かれるきっかけになればといいなと思いました。

私たち人間の言葉は拙いものです。しかし、イエス・キリストの名によって語る言葉は、汚れた霊を追い返す可能性があります。イエス・キリストの名によって「黙れ」と言う。その機会が与えられたら、ためらわずに語りたいたいと思います。



年間第5主日 (マルコ 1:29-39)

生活のどの場所にも、イエスを迎えることができる

説教を準備した時点では、本日の「年間第5主日」で主日の公式ミサ中止は終了となっている予定ですが、実際はどうなっているのでしょうか。期待を込めて、今週で公式ミサの中止は終わるという前提で話してみたいと思います。

今週与えられた朗読箇所は、「イエスのカファルナウムでの一日」と言えるような活動です。その中に「会堂」での活動があり、「家」での活動があり、「戸口」での活動があります。この三つは次のことを意味しているでしょう。「会堂」は人間の宗教生活の場であり、「家」は個人的な生活の場であり、「戸口」は公の生活の場を代表しています。ですから、「イエスのカファルナウムでの一日」は、人間生活のすべての場から人間を苦しめる悪の力を追い出した一日だと言えるでしょう。

イエスは、人を悪から救うためにこの世に遣わされたのですから、この一日はイエスの生涯全体を凝縮した一日となりました。イエスを招き入れた場所では、それぞれの場所で神の救いの働きが実現していきます。これは私たちに、一つのことを教えているのです。それは「私たちも、神の救いの働きにあずかるために、それぞれの場所でイエスをお迎えすべきだ」ということです。

福音朗読で紹介された場所は三つです。「宗教生活の場」「個人的な生活の場」「公の生活の場」でした。このどれもが、イエスをお迎えすると、神の救いのわざが実現する場となり得るのです。具体的に考えると、今週まで公式ミサが中止になっていましたので、「宗教生活の場」はどこにあるかと言うと、家庭祭壇のある場所です。家庭祭壇はあるけれども祈りはない。そういう生活から立ち帰って、家庭祭壇の前で祈る時間を取り戻します。すると神の救いの働きがここから始まります。

同じように、個人的な生活の場にも、イエスをお迎えしましょう。個人的な生活は誰にも左右されたくないと思うでしょう。もちろんイエスをお迎えしても、個人的な生活を左右されることはないのです。もし、個人的な生活に、イエスが入ってきて欲しくないと考えていたら、そのような過ごし方とは決別しましょう。神の救いのわざが実を結ぶ個人的な時間のほうが、そうでない時間よりも当然重要です。

最後は、公の生活の場にイエスを迎えることです。職場に、摩擦を生じない形で、自分の信仰を織り交ぜてすばらしい結果を出した人を紹介しましょう。かつて日本ハムの監督を務めた外国人に「トレイ・ヒルマン」という人がいました。彼の口癖を覚えている人もいるでしょう。「シンジラレナ〜イ！」彼は熱心なプロテスタント信者でした。「信じる」というたった一つの言葉を野球の職場に取り入れて、神のわざが公の場で実を結ぶよう、率先して働いたのです。

私たちも、生活のすべての場でイエスを迎え、すべての場所に神の救いのわざが実を結ぶお手伝いをしましょう。私たちが手伝う時、イエスはいつも私たちの手を使って大きな働きをしてくださいます。



年間第6主日 (マルコ 1:40-45)

初歩の段階で有頂天にならず、イエスに付き従う

1月17日から中止されていたミサが、およそ一ヶ月ぶりで再開されました。平日のミサも止めていたので、修道院を含め多くの方々に影響が出ました。再開された今週のミサの説教は、福音朗読からの学びと併せて、仮にミサが中止されても、信仰を養い、維持する工夫を学んで帰りたいと思います。

今回の中止期間に、私は聖週間の典礼の説教のことを考えていました。出来上がったわけではありませんが、たくさんの時間を与えていただいたので、どうにかしてそれを活かしたいと思ったのです。聖週間になった時に、皆さんが家庭にいても信仰を養う雰囲気を満たした一週間を味わえるように、材料を提供したいと思っています。

およそ一ヶ月、心配の種もいくつかありましたが、結果的には杞憂に終わりました。たとえば、電話応対で振り回されるのではないかと考えていましたが、一ヶ月で四回電話を取ったでしょうか。ほとんど電話もかかりませんでした。それよりも心配していたのは、葬儀が入るのではないかとという心配でした。皆さんが健康に十分気を付けてくださったおかげで、何も起こりませんでした。むしろ、洗礼式の依頼が入って、新しい神の子供が誕生したのでした。

ミサの中止期間に入った最初は、「何も起こりませんように」と考えていました。けれども日を重ねていくうちに、「この中止期間に、何かの実りが生じますように」と願うようになったのです。願えば、神様は必ず答えてくださる。本当にそのことを実感しました。長い迫害の時代を耐え、宣教師がいない中で信仰を次の世代に伝えていった先祖達も、きっと同じことを体験によって理解したのだと思います。願いは、必ず聞き入れられるのです。

さて今週の福音朗読は「重い皮膚病を患っている人をいやす」という物語です。イエスがこの人を深く憐れむ様子が印象的です。最後にこのいやされた人は「だれにも、何も話さないように」(1・44)というイエスの注意を守らず、人々に言い広めます。イエスが「この人は言いふらすだろうな」と、最初に見抜けなかったとはとても思えません。

彼の願いは真剣そのものでしたが、いやされたあとさらにイエスの指示にとどまれる人ではありませんでした。イエスの深い憐れみは、「第一段階には聞き従えるけれども、第二段階には従って来られない人」への、深い憐れみなのだと思います。

私たちも同じことです。第一段階、第二段階までは従って行けても、第三段階、第四段階になると自分に甘くなり、イエスの意向に従えないのです。たとえば中田神父も、「何も起こりませんように」という考えから「何かが起こりますように」という考えまではたどり着きましたが、「何かを起こしに行きましょう」とまでは考えなかったのです。

念のため、なぜイエスが「だれにも、何も話さないように気をつけ

なさい」と厳しく注意されたのか考えておきましょう。それはイエスの十字架による救いの道を理解できなければ、奇跡的ないやしが一歩歩く恐れがあったからです。

十字架の上で亡くなることでイエスが救いのわざを完成させる。これが第四段階のイエスの救いのわざだとすると、奇跡はそれよりずっと前の段階、第一段階なのです。第一段階だけで分かったつもりになってイエスのことを言い広めてもらっては困るのです。

新型コロナウイルスの影響下にあって、約一年が過ぎました。新型コロナウイルスと出会う前が、私たちの信仰生活の第一段階だったとしましょう。今コロナ禍にあって、懸命に信仰生活のあり方を探しています。これが第二段階です。すでにある人たちは、第二段階で信仰生活の模索をあきらめたかも知れません。

けれども間もなく、ワクチン接種や治療法すら見つかったりして、新型コロナの恐怖を脱出するでしょう。それからが第三段階で、もっと先の段階も待っています。どこまでも、どんな試練をくぐってでも、イエスに付き従う。それだけの覚悟がなければ、奇跡的ないやしも、あえて語る必要は無いわけです。

奇跡的ないやしを見せるイエスにはついて行けるが、十字架を担うイエスにはついて行けないのでしょうか。間もなく四旬節で、イエスの受難を黙想する季節です。私たちの信仰は、奇跡的ないやしに有頂天にならないし、どんな災難で揺り動かされても前を向いてイエスに付き従う。その確信を得るために、コロナの時代を過ごしましょう。この試練が与えられたものであれば、試練には必ず、次の段階に上がるための意味があるのです。

四旬節第1主日(マルコ 1:12-15)



四旬節第 1 主日 (マルコ 1:12-15)

生き方の根本的な転換をイエスは求める

21日、田平教会の中学生5人と大人1人が、堅信の秘跡を受けます。大司教様が説教でていねいに説明してくださると思いますが、主任神父様も、堅信を受ける皆さんに、心構えを話しておきたいと思います。

まず、堅信の秘跡は司教様が授けると学びました。長崎教区には2人の司教様、ヨセフ高見三明大司教様とペトロ中村倫明補佐司教様が与えられています。堅信を授けてくださるのは高見三明大司教様です。

皆さんは、主任司祭の顔だったら、目を閉じても思い浮かべることができるでしょう。頭ピカピカ、最近ひげを伸ばして、説教のときに笑えない話をする神父様です。それだけ記憶に残っているからです。

では、高見三明大司教様の顔は、目を閉じても思い浮かべることができるのでしょうか？名前は聞いたことがあるけれども、顔が思い出せないかも知れません。けれども堅信を受けるのですから、顔をしっかりと見て、目に焼き付けて帰ってきてください。堅信式が終わったら、もう近くで顔を見ることはないかも知れませんが、それでも忘れない。それくらいしっかり目に焼き付けて帰ってきてほしいのです。

中田神父様は中学1年生の時に、神学院で堅信式を受けました。司祭になることを目指す生徒を育てるのが神学院です。堅信を授けてくださったのは、里脇枢機卿様でした。「司教様」と呼びませんが、枢機卿様の多くは司教様です。里脇大司教様が枢機卿様になってすぐでした。

今でも、里脇枢機卿様をはっきり覚えています。枢機卿様の地位になると、緋色の服装が正式な服装になります。中学生に制服があるように、黒のワンピースの形をした「スータン」が制服です。司教様は黒のスータンに赤の帯と、頭に赤いかぶり物をするのが正装です。枢機卿様は、全身緋色のスータンに赤い帯、頭にも赤いかぶり物が正装です。

私たち神学生が玄関で枢機卿様を待っていると、黒の高級車から、颯爽と枢機卿様が降りてこられました。なんと全身緋色のスータンに、赤い帯、赤い帽子、黒の革靴の下にチラッと見えた靴下も真っ赤でした。中田神学生は最初に何と思ったのでしょうか？真っ黒の高級車から、真っ赤な服の「お方」が出てきたのです。中田神学生は「うわ、相当な不良だわ」と思ったのです。赤い服に赤い靴下。神学生の服装の決まりから考えたら、それはもう最高の不良の格好ですよ。中学校でも、でしょ？

第一印象はそうでしたが、堅信式のミサは厳かな雰囲気で行われました。堅信の秘跡を受ける人が一人ずつ、枢機卿様の前に立ちます。枢機卿様は慣れた手つきで、堅信のために用意された聖人の名前を呼びながら堅信の秘跡を授けます。私たちの学年の堅信名は、福音を書いた聖人「ルカ」となっていて、「ルカ。父の賜物である聖霊のしるしを受けなさい」「アーメン」「主の平和」「主の平和」とやり取りします。

いよいよ私の順番がやって来ました。枢機卿様の顔は私の30センチ前です。私が見たもの。それは枢機卿様の鼻の下でした。私の記憶では

鼻の下が 10 センチくらいあって、鼻にかかった声で私に呼びかけたのです。「るか。ちちのたまものであるせいれいのしるしをうけなさい。」

私は必死にこらえて、「アーメン」と答えました。「しゅのへいわ」のあともようやく「主の平和」と答えました。申し訳ないけれど、枢機卿様の大切なお話は覚えていません。鼻の下が 10 センチあったこと、聖香油を塗ってもらったこと。これだけが、私の堅信式の思い出です。

それでも、聖霊の七つの賜物があの時堅信を受けた同級生に働き、知恵と理解・判断と勇気・神を知る恵み・神を愛する恵み・神を敬う心がどんどん育って行って、当時いた 17 人の同級生のうち、4 人が司祭になりました。そのうちの 3 人が、今も宣教の第一線で働いているのです。

今週の福音朗読は、イエス様がサタンから誘惑を受け、誘惑をはねのけて、ガリラヤで宣教活動を始める様子です。イエス様の声の一つだけ朗読の中にありましたね。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(1・15)。

イエス様が語った声をよく考えましょう。最初にこう言っています。「時は満ち、神の国は近づいた。」そしてそのあとに「悔い改めて福音を信じなさい」とあります。イエス様はこの順番で呼びかけて、「神様が先に、贈り物として、神の国の姿を見せてくれたのです。だからあなたたちは、神様のほうに向き直りなさい」と促しているのです。

堅信の秘跡で、聖霊の七つの賜物が与えられます。神様は先に恵みを注いで、私たちにこれから向き直る方向を示してくれるのです。もちろん堅信を受けるために勉強はしました。お祈りも今まで以上にしました。けれども勉強とお祈りの量に比べたら、聖霊の七つの賜物の大きさは比べものになりません。

堅信の恵みの凄さを中田神父様が気づいたのは、堅信を受けてから 14 年も経ってからです。聖霊の恵みが、神学校生活を続け、教会に通い続ける私を育ててくれて、ついに神様を知り、神様を愛し、神様を敬うために生きる司祭してくださいました。司祭に叙階された時に、こんなにすごい恵みを中学 1 年でもらったんだと、神様に深く感謝したのです。

堅信の秘跡を受けた途端に、もう教会に行くのは終わりだと、勝手に中断してしまう人がいます。その人は、自分の力で堅信の秘跡の恵みを受けたから、教会に行く必要は無いと考えているのでしょうか。本当に自分の力で恵みを受けたのでしょうか？

いいえ、そうではありません。お父さんお母さんに、おじいちゃんおばあちゃんに聞いてご覧なさい。誰も、自分の力で堅信の恵みを受けたと言わないと思います。そして、聖霊の恵みのほうが、私の努力よりはるかに大きいことを知っているから、続けて教会に来ているのです。

堅信の秘跡を受けて、神様の招きにはっきりと向き直りましょう。恵みはいつも、先に与えられます。私たちが神様の示す道に喜んで向かうことができるように、「聖霊来てください」と、聖霊の賜物を願うことにしましょう。



四旬節第2主日 (マルコ 9:2-10)

栄光の姿を途中で見て、死と復活まで共に歩む

四旬節第2主日は「イエスの姿が変わる」場面です。どうやら毎年この場面をA年だとマタイ福音書、B年(今年)だとマルコ福音書、C年だとルカ福音書から学ぶことになっているようです。私も今ごろ理解しました。

三人の弟子を連れて、イエスは高い山に登りました。当時は他のいかなる方法もなかったわけですから、山に登るためにはイエスと一緒に、イエスが登られたように登らなければなりません。今でしたらたとえば富士山に登るのに、五合目までは乗り物に乗ってたどり着けます。下りる時もそうです。緊急の場合は、ヘリコプターもあるでしょう。

しかし聖書の時代にそんなものは存在しませんから、イエスと一緒に登ることに何の疑問もなかったでしょう。すると、山を下りる時にイエスから「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」(9・9)と弟子たちが命じられたのは意味深いでしょう。イエスと共に、復活のその日まで歩き通したあとでなければ、弟子たちには語れないこともあるということです。

「イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。」(9・2-3)誰もたどり着けない姿、誰も近づけない境地。そういうものをここで思いました。人間で言えば、「神がかっている」という状態かも知れません。

昔のことを思い出します。川添神父様と中田神父は、私の伯父さんの船で長崎から五島沖まで出かけて船釣りを何度かしました。重さ1キロくらいのイトヨリを釣らせてくれる秘密の場所でしたが、私が大きなイトヨリを釣って有頂天になっていると、川添神父様は大きな甘鯛を釣り上げるのです。イトヨリと甘鯛では、値段が全然違います。甘鯛のほうが数倍高いと思います。その甘鯛を、易々と釣り上げ、私には「お前のところには甘鯛は居ないようだな」などど冷やかすのです。

どうしても理由が知りたくて、司祭館に戻ってから聞いたのです。「どうして主任神父様は甘鯛を釣り上げて、私にはイトヨリばかりかかるのですか？」するとこういう答えが返ってきました。「おれはイトヨリが喰いつきそうになったら外して、甘鯛にだけ喰わせてるからさ。」これには返す言葉もありませんでした。

今は川添神父様は天国でしょう。私にはまだ時間があります。川添神父様の境地にまでたどり着いたら、誰かにうそぶいてみたいものです。「狙いの魚以外の時は針から外して、狙いの魚の時だけ喰わせているのさ」と。誰にもたどり着けない境地を身近な例えにしてみました。

イエスは、一瞬だけ、誰にもたどり着けない境地を見せてくださいました。ただ、イエスの輝く姿は、高い山に登ってお示しになった姿です。ペトロが提案したような、その場に仮小屋を作ってとどめておくことはふさわしくありません。「登山は下山するまでが登山」なのです。

弟子たちはイエスと一緒に登り始めました。頂上で、輝く姿を見ました。しかしその姿は、まだイエスが成し遂げるわざの途中に過ぎないので。これから山を下りて、人々の中に戻られます。そこにはイエスのいのちを狙っている人々がいます。それでもイエスはすべてを成し遂げ、人の生涯の中での谷底、死者の中から復活するのです。

一般の登山でも、山に登り始めてから、下山して完了するまで、様々なことが起こり得ます。イエスと歩き始めた登山は、なおさらそうです。イエスが登った場所と同時に、イエスが下りた場所にもお供する。その時私たちは、「今見たことをだれにも話してはいけない」とのみことばを理解するでしょう。

何か、身近な方法で、イエスと共に歩き、イエスが登った場所に登り、下りた場所にお供する方法はないでしょうか。私は、「十字架の道行」をおすすめします。十字架の道行を通して、人々の嘲りの中でイエスと共に歩き、十字架に挙げられたゴルゴタの丘まで登ります。埋葬されたイエスを眺めて、私たちの心はイエスが下りたところまで下りていきます。そしてイエスの復活を仰ぎ、語るべきことばを授けられるのです。

最後に、来週は四人の子供達が初聖体を迎えます。洗礼を受けて、イエス様の子供として育ってきました。いよいよ、イエス様がいちばん近くいてくださるのです。これから、聖体に養われて、イエス様とずっと歩きます。楽しいことも、辛いことも、イエス様と一緒に歩くようになります。ぜひ子供達にも、ロザリオや十字架の道行を通して、イエス様の歩く道をいっしょに歩く人になってほしいです。

イエスは高い山に登り、誰も近づけない境地を垣間見せてくださいました。頂上だけでなく、谷底である人間の死まで、イエスと共に歩む。そうして私たちは、イエスと歩き始めた登山を完了し、復活の栄光に招かれるのです。



四旬節第3主日 (ヨハネ 2:13-25)

初聖体を受けて、さらに御聖体を授けさせる人に

「初聖体」の日を迎えました。昨日は初めての「ゆるしの秘跡」を神父様のところでしました。皆さんは園長先生と練習していたと思いますが、園長先生は罪を赦すことはできないので、神父様のところでゆるしの秘跡を受けて初めて、ゆるしのお恵みがイエス様から届きます。

今日の初聖体も、「キリストのおんからだ」「アーメン」と、何度も園長先生と練習したでしょう。聖体拝領も、神父様から御聖体をいただいて初めて、御聖体のお恵みが皆さんに届きます。

練習は、園長先生が導いてくれました。練習のほうは、神父様ではできないと思います。もし練習中に皆さんのお行儀が悪かったら、神父様の注意がきつ過ぎて本番で受けたくなるかも知れません。練習のためには園長先生が必要ですし、本番のためには神父様が必要です。

さて、試験をしましょう。お恵みの大きさに比べたら、今から尋ねることは小さな試験（動作）です。今日御聖体をいただきます。御聖体とは、何ですか？もう一つ。聖体拝領の前に、主の祈りを唱えますね。自分で唱えることができますか？（時間を与える）

これで十分準備をしてきたことが分かりました。神父様のお話で最後の仕上げをしましょう。神父様が今日朗読したのはヨハネ福音書2章の「神殿から商人を追い出す」物語でした。イエス様は神殿のいちばん広い場所で、牛や羊や鳩を売っている人と、両替の仕事をしている人を厳しく叱りました。

「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」(2・16)まるで、初聖体の練習のときに「聖堂の中でお行儀の悪いお友だちは初聖体の練習はできません。出て行きなさい」と叱られているようですね。イエス様はめずらしく厳しく叱ったのです。

なぜ、イエス様はあれほど厳しくしたのでしょいか。それは、父なる神様がおられる神殿をずっときれいにしておきたい、清く保ちたいと願う燃えるような熱意からでした。イエス様は大切な場所を、大切に守りたかったのです。

初聖体を受ける皆さん、これから皆さんの心はイエス様が来てくださるお家になります。大切なイエス様が来て、そこで皆さんをお恵みでいっぱいにしてくださいます。保育園では、使った物はきちんとお片付けをするでしょう。また皆さんのお家でも、誰かがやって来る時にはお片付けをするはず。もしその人が大切な人なら、特別にきれいに掃除して待つはず。

今日まで皆さんは心をきれいにして、いちばん大切なイエス様をお迎えする準備をしてきました。ですから今日、もちろん心はきれいです。今日はお片付けができていて、イエス様が心にやって来てゴミ一つ無いでしょう。ですが、次の日曜日はどうでしょうか？

もっと先はどうですか？次の日曜日だけでなく、卒園して小学校に

入学してからも、あなたの心はイエス様をお迎えできるきれいな心が続いているのでしょうか？いつの間にか、自分だけの楽しみで心がいっぱいになって、イエス様が座る場所が無くなってしまわないでしょうか。そうならないように神父様がこれからも確かめたいと思っています。

田平教会の日曜日のミサは6時と9時です。皆さんがお家の人から「ほら教会に行くよ。準備しなさい」と言われた時、「今日は行かない。これからプリキュアを観るから」「これから仮面ライダーを観るから」と言ってお家の人を言いつけに背くなら、あなたの心には「誘惑する悪い者」が住み着いていて、イエス様をお迎えするのを邪魔していることになります。

毎日曜日、イエス様をお迎えするために、きれいな心を持ち続けてほしいです。心にいつもイエス様の場所を作っている人は、イエス様からたくさんお恵みと喜びをもらうことができます。日曜日だけでなく、月曜日も火曜日も毎日、イエス様のための場所を作ってくれるなら、女の子のお友だちだったら将来園長先生になれるでしょう。男の子のお友だちだったら将来神父様になれるでしょう。そうすると初聖体を受ける人から、初聖体をさせてあげる人になるのです。

御聖体のお恵みは今日だけで終わりではありません。これからも、生きての間ずっと続きます。ほとんどのお友だちは、大きくなって御聖体を受ける人で終わるでしょう。ただし一つだけ違う道もあります。それは御聖体を受ける人から、御聖体を受けさせる人になる道です。

神様にしかできないことですが、御聖体を受けさせる人が、男の子と女の子で現れてくれたらいいなと思います。御聖体を受ける人だけしかいなかったら、いつか御聖体を受けることはできなくなります。

使徒言行録の中で聖パウロがこう言っています。「主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」（使 20・35）それでは、「初聖体の決意表明と信仰宣言」に移りましょう。



四旬節第4主日 (ヨハネ 3:14-21)

独り子を信じるという道が与えられた

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」(3・16) 復活の主日まであと三週間となりましたが、今週四旬節第4主日が復活の主日までの鍵となりそうです。

朗読された箇所はヨハネ福音書の3章、「ニコデモとの対話」という物語です。第3章ですから、イエスの御生涯のクライマックスではなく、割と早い場面でのやり取りです。イエスが語りかける相手はファリサイ派に属するニコデモです。朗読箇所よりもあとになりますが、ニコデモはイエスから「イスラエルの教師」と呼ばれていることから、かなり突っ込んだ話がなされていると分かります。

イエスはここでは多く語りますが、御受難に近づいてくるとほとんど語らなくなります。十字架の上では、ついに何も語らなくなります。これからの三週間で、「多く語っているイエス」と「何も語らないイエス」、どちらも「神がお与えになった独り子」であることを理解する。この長く困難な道を歩く必要があります。

3月11日は東日本大震災が発生してから10年を迎える日でした。多くの命が奪われました。多くの人の生活基盤も失われました。また、新型コロナウイルスの脅威にさらされて、すでに1年が経っています。ここでも多くの命と多くの人の生活基盤が失われました。

幸いに、ほとんどの人が懸命に前を向いて歩いています。どれだけ基盤となるものを失われても、どこかに「決して失われないもの」があって、それをよりどころにしてここまで歩いてきました。計り知れない恐怖が二つ襲いましたが、それでもなお取り去られない基盤があることを体験によって学んだのです。

人によってはそれを「震災に負けない」「コロナに負けない」と表現するかも知れません。キリスト者であればもっと別の表現ができるでしょう。それは「独り子を信じる」という生き方、あるいは「道」です。

個人的なことですが、3月12日は55歳の誕生日でした。去年の誕生日に、新型コロナウイルスの影響でおよそ2ヶ月ミサが中止になるとは夢にも思いませんでした。司祭の生活の基盤はミサですから、私も生活の基盤を奪われたわけです。

それでも、ミサを休むわけにはいきませんので、個人的にミサを続けながら次のように考えました「ミサの奉納金がなくても、ミサをささげることが司祭の生活の基盤である。」痛みを伴って初めて理解できたのでした。

ミサの依頼があれば、「〇〇さんの依頼で、〇〇〇〇の為」という意向を持ってミサをします。公式のミサが中止になって、私は何の為に、ミサをささげるべきか。毎日考えました。私にできること、私が祈るべきことを考えさせられる期間でした。

そこで最後に得たことは、「イエス・キリストを信じる道」「独り

子を信じる道」は、どんな困難の中でも決して奪われることがないということでした。人によっては同じことを「震災に負けない」「コロナに負けない」と表すかも知れませんが、私は「独り子を信じる人は負けない」と言い表せると思うのです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(3・16) これまでの生活基盤は、ある時すべて奪い取られることがあると、経験によって知りました。それでも前を向いて歩いている人は、きっとこれまでの基盤とは根本から違う何かを、新しい基盤にして歩き始めているのです。

中田神父はそれこそ「独り子を信じるという生活基盤なのですよ」と伝えたいのです。多くの人が知らずに、新しい生活基盤に立って前に進んでいます。人はそれを「震災に負けない」「コロナに負けない」という言葉で理解しようとしています。知らずに頑張っている人に、「実はそれが、『独り子を信じるという道』なのです」と知らせたいのです。

想像を超える困難を経て、私たちは「元の生活には戻れないのだ」と、はっきり理解しました。失ったものも、壊されたものも、もう戻っては来ない。だから、別の道を選んでほしい。「独り子を信じる」という新しい道を選んでほしいのです。

私たちキリスト者にとって、この四旬節は神の望みにしっかり向き直る季節です。過去の生活基盤にしがみつくのではなく、「独り子を信じる」という生活基盤の大切さを噛みしめる時期です。ミサがなかった時、各自が違う形で「独り子を信じる」生き方を探したことでしょう。その体験は貴重な体験です。

できれば、生き方を通して、周りの人に、どんな困難に遭遇しても決して奪われない基盤を知らせることのできる人に育っていきましょう。「震災に負けない」「コロナに負けない」この思いをキリスト者である私はこう理解している。そんな証ができるように、ミサの中で恵みを願っていきましょう。



四旬節第5主日 (ヨハネ 12:20-33)

何も弁明せず、一粒の麦は地に落ちて死ぬ

本日、午後1時から浦上教会で司祭の叙階式が行われ、三人の受階者が司祭に叙階されます。三人司祭が与えられるのは久しぶりです。神様に感謝しましょう。そして、日頃から祈りと神学生養成援助でお支えくださった皆様に感謝致します。

三人新司祭が誕生すれば、当然三ヶ所の任地に派遣されることとなります。その他の人事異動も含めて、集まった司祭たちで賑やかになるでしょう。異動の対象になっていない私は、盛り上がっている輪の中に入って、誰がどこに異動なのか、集めて持ち帰りたいと思います。

先週、小教区の黙想会が行われましたが、その数日後に紐差教会巡回の黙想会に、ゆるしの秘跡の手伝いに行ってきました。黙想指導をしておられたのは、紐差小教区出身で、長らく宮崎のミッションスクールの校長を務めたことのある「山頭原太郎神父様」でした。何と御年96歳。

声はしっかりしておりましたが、耳は遠くなり、説教をするために祭壇に上がるにも、一旦座った椅子から立つのにも濱口主任神父様の介助が必要な状態でした。ですから信者さんの告白を聴くのはとても無理ということで、私が手伝いに行ったわけです。

紐差教会の巡回教会は二つありまして、一つは木ヶ津教会、もう一つは大佐志教会です。皆さんの方がよくご存知でしょう。そして木ヶ津教会と言えば、聖堂内にかつて永井隆が描いた「十字架の道行」が飾られています。思ったよりも小さな絵でしたが、小さなかわいらしい聖堂を飾るには十分でした。

午前の部で木ヶ津教会のお手伝いに行きましたが、「そう言えば、桜も有名だったなあ」と思い出しまして、お手伝いを終わって食事までの空き時間に桜を見に行くことにしました。スータン姿で、歩いて出かけました。田平教会の北側の通路くらいの、狭い道を歩いていると、後ろから軽トラックがそろーっと付いてきます。

私が邪魔しているかも知れないと思い、畑に上がって道を譲ったら、おばあさんが軽トラから声をかけてきました。「神父様～。神父様は山頭神父様ですか～？」私はショックを隠しきれませんでした。気を取り直して「田平教会の神父よ。木ヶ津の黙想会の告解の手伝い。」

するとそのおばあさん達はこう続けます。「あー、平戸口教会ですか。ご苦労さんです。」ショックでした。そのおばあさん達にとって、「田平教会」とは、「平戸口教会」のことのようです。それでも自分を奮い立たせて「いやいや。平戸口教会じゃなくてレンガの教会のほうよ」と返すと、「それじゃ宝亀教会ですか？」と言うのです。私は田平教会のすべてを否定されて、泣きたい気持ちでした。

話を切り替えようと思い、こう言いました。「お母さん。この道を行ったら桜があるかな？」すると「慈眼桜のことですね。私たちも今か

ら行くところですよ。」それで私が「そうか。ありがとう」と言ったら、その軽トラックは去ってしまいました。せっかくなら荷台に載せろよ！

生涯残る面白い出会いでした。虚を捨てて、心を開いて話に耳を傾けたら、会話した言葉の何倍もの収穫があったからです。「田平教会」と聞いたおばあさんが「平戸口教会」と疑いもなく考えたこと。ではこのおばあさん達にとって、田平教会は何という名前の教会で呼ぶのだろうか？深く考えさせられました。

その他にも、たくさんの収穫がありました。そこで、「何だと？黙想会の説教をしていたじいさん神父様と勘違いするとは失礼にも程がある！」と切り捨てたら、何も収穫は得られなかったでしょう。イエスがすべての人を救うために、「はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」(12・22)と言われたのが、この年齢になって痛いほど分かります。

さて、慈眼桜を見に行く時に会ったおばあさん達は、あの時のことを振り返って思い巡らしたのでしょうか？「『田平から来たよ』と言っていたけれども、平戸口教会じゃなくて瀬戸山教会のことだったのではないだろうか？すると『レンガの教会』と言っていたのも宝亀教会ではなくて当然瀬戸山教会だ。何ということでしょう！」そこまでたどり着いたのでしょうか？

おそらく、何も気付かないままだと思います。それでも、私が多くのことに気付いたので、恵み多いひとときになりました。そのように、イエスがたとえに用いられた「一粒の麦」は、何も語らず、弁明もせず、御父からこの地上に種蒔かれて、死ぬのです。

舞台を整えてから死ぬではありません。十字架という、残酷な形で死ぬのです。しかし、死ねば多くの実を結ぶのです。それは私たちがあとで思い巡らして豊かにするからではなく、御子の死が無残な死であっても御父が栄光を与えてくださるのです。

すでにその時は迫っています。イエスは黙って、死に向かわれます。弁明もなく、一粒の麦になられるのです。私たちにできることは限られていますが、いつか私たちが一粒の麦の立場になる時、イエスの姿に見倣いたいものです。弁明の機会が無くてもうろたえず、自分を差し出しましょう。もし一度でもそのような機会が与えられれば、私たちはイエスのたとえを生きることが出来ます。



受難の主日(枝の主日)(マルコ 15:1-39)

言葉を尽くしてイエスの沈黙を説明するなら

受難の主日、イエスのご死去までの出来事を駆け足で辿ります。聖木曜日、聖金曜日の典礼に参加できない方は、特に今日の典礼を通して、私たちのために血の一滴まで流し尽くされたイエスの犠牲・奉献を思いましょう。そこから、この一週間私にできることは何か、考えてから生活に戻ることにはしましょう。

田平小教区の皆さんは、先週の連絡会で、復活の主日・日中までの説教を配布してもらえるようお願いしました。すでに目を通されている方もいるかも知れません。本日の朗読で、イエスが語られたのは最初と最後だけです。しかも、一切弁明をしないのです。

私たちの主は、なぜこうまで沈黙を守られたのか。イエスの沈黙の中に、復活への希望を見いだす。イエスの沈黙の中に、私たちも場所を見つけ出す。そんな十字架の道行が、私たちにも必要になってきます。

時折、物言わぬ沈黙が尊い価値を持つことがあります。東日本大震災から10年を迎えた3月11日に、特集番組のいくつかを見ました。その中に、すでに退職した似顔絵捜査官のドキュメンタリーがありました。この人の手にかかれば、それまで手がかりがなく暗礁に乗り上げていた事件が一気に解決する、そんな似顔絵を描く人物でした。

この元捜査官が震災の身元不明者を遺族にお返しする切り札として呼ばれたのです。痛みの激しい遺体や、完全に白骨化した頭から、本人の特徴を引き出して似顔絵を描きます。似顔絵が決め手になってたくさんの身元不明者を遺族に引き渡すことができました。今も、最後の一人まで遺族に引き渡そうと、一度描いた似顔絵も描き直して捜査に協力しています。そんな番組でした。

ご遺体は、何も語りませんが、元似顔絵捜査官だった人は、そのご遺体の声なき声を拾って、似顔絵に反映させていました。何も語らないはずの骨から、当時の姿を引き出す。そこに実際には声はなくても、正確に伝わる何かがあるのだと実感しました。「沈黙に聴く」ということでしょう。

イエスの十字架上の場面は、言葉で言い尽くせない神の計画の集大成です。それを言葉であれこれ説明する必要があったなら、イエスはいくらかでも説明を尽くしたでしょう。しかしイエスが選ばれたのは沈黙でした。人間的に考えれば、何も語らなければ誤解され、思いをねじ曲げられる恐れもあるのに、イエスは何も語らず、ご自身を十字架の上でさげました。

それは御父への信頼があったからです。「御父は、沈黙のうちに十字架上の救いのわざを正しく理解させてくださる。心配する必要は無い。」御父への絶対の信頼があったから、イエスは沈黙のうちにすべてを成し遂げたのです。

沈黙が私たちに教えていることは何でしょうか。それは私たちがイ

エスのように御父への信頼のうちに生きることです。私たちも、御父への信頼のうちに生きるなら、たくさんの言葉よりも沈黙のほうが価値を持ってきます。言葉で弁明したくなるところを、沈黙の中に留まることができます。御父が、私の沈黙の正しさを証明してくれるからです。

イエスは十字架の上から言葉で弁明しませんでした。御父が沈黙の正しさを証明してくれると信じました。そしてイエスは復活し、ご自身の正しさを証明してくださったのです。

イエスは私たちにも招いています。沈黙の中に、場所を見いだすこと。沈黙の中に、答えを見いだすこと。人間のどのような弁明よりも、神がそばにいて守ってくださる沈黙のほうが、はるかに力強く、信頼できるものです。イエスはそのことを十字架の上で証明されました。私たちは同じことを、それぞれの人生の上で証明するのです。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-5)



聖木曜日 (ヨハネ 13:1-5)

どこまで互いに足を洗い合うことができるのか

聖木曜日、今年は新型コロナウイルスの影響を考慮して洗足式を中止しました。この最後の晩餐に行われたことは、主イエスの受難を前にして、生きて伝えることのできる最後の遺言です。互いに足を洗い合うこと、ご自分を食べ物として、弟子たちに与え尽くすこと、この両方に、生きて残すべき教えがすべて込められていたのです。

まず、最後の晩餐で残してくださった聖体の秘跡について考えましょう。主は私たちのために、聖体の秘跡と、そのための儀式を残していただきました。主が与えることのできるものの中で、最も尊いものを残していただきました。

いちばん大切なものを残す時、方法はいろいろ考えられたでしょう。その中で「人の命」に繋がる「食べ物」の形をイエスは選ばれました。しかも単純な食べ物ではなく、「イエスご自身」を食べ物として与えようとしたのです。

この説教を考える時に、ふと思い出したのは使徒言行録に記されている「ペトロ、ヤッファで幻を見る」という場面でした。ペトロがヤッファの町に近づいたころ、祈るために屋上に上がっていると我を忘れたようになり、幻を見ます。そこで神と対話する場面は以下の通りです。

「(ペトロは我を忘れたようになり) 天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。そして、『ペトロよ、身を起し、屠って食べなさい』と言う声がした。しかし、ペトロは言った。『主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません。』すると、また声が聞こえてきた。『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。』こういうことが三度あり、その入れ物は急に天に引き上げられた。」(使 10・10-16)

イエスは最後の晩餐でご自身を食べ物としてお与えになりました。「取って食べなさい」と言われました。ただ、イエスご自身を食べるということは、いつも楽しいことばかり、口に甘いことばかりではないと思うのです。

できれば食べるのを避けたい。逃げようとする弱さを乗り越えて、イエス・キリストを食べて生き続ける。そのような生き方、証の生活を私たちは遺言として与えられたわけです。主が与えてくださった食べ物を、「主よとんでもないことです。これは食べられません」と拒まず、糧としていく。いつかそのような日が来ると考える時に、責任を伴う遺言であったことが分かります。

次に、イエスが弟子たちの足を洗う場面を考えてみましょう。「聖体の秘跡」が「儀式の形で与えられた愛の掟」だとすると、互いに足を洗い合うことは「儀式にとらわれない、その場で求められる愛の掟」と言えるでしょう。イエスが最後の晩さんで残してくださったのは、儀式

を伴う愛と、儀式を伴わない愛。どちらでもイエスの愛を残してくださいだったので。

イエスが弟子たち全員の足を洗ったのであれば、イスカリオテのユダの足も洗ったことになります。イエスはユダの心の中をご存知です。すでに裏切る考えが植え付けられていました。人間的に見れば、「何でこの人のために身をかがめなければならないのだ」と思っても不思議ではありません。

弟子たちにとっても、ユダが信用できないという思いがあったでしょう。12章6節では「彼は盗人であって、金入れを預かっているながら、その中身をごまかしていたからである」となっています。なぜこんな奴のために、先生が身をかがめなければならないのだ」という思いだったでしょう。

人にはお互い相性がありますから、理解できない人には心を開けません。また、人からガッカリさせられたことをいつまでも引きずって、その人のために身をかがめ、足を洗い合うことが受け入れられない場合もあります。イエスはきっと、将来そうしたことが起こることも織り込み済みで、「最後の晩さんの聖体の秘跡」をお定めになったのです。

ここに集まっている私たちは、最後の晩さんの中で与えられたものを、イエスからすべて受け取らなければなりません。「儀式の中での愛は受け取るけれども、儀式を伴わない愛はできない」とか、その反対も、イエスの遺言の片方だけで終わってしまうことになります。

「これを取って食べなさい」「これを受けて飲みなさい」イエスの招きに、十分に応えられるように、このミサの中で恵みを願ってまいりましょう。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)



聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

イエスはなぜ沈黙のうちに死ぬのか

主の御受難を、ヨハネ福音書の朗読で迎えました。今年の典礼暦はB年ですから、黙想するためには受難の主日に朗読されたマルコ福音書第15章を用いたいと思います。

受難の主日で指摘したように、マルコ福音書の受難の朗読で、イエスは最初と最後の言葉だけしか記録されていません。沈黙の中に、救い主の私たちへの愛を見なければなりません。次第にすべてを奪われていく中に、救い主の私たちへの愛を見なければなりません。

葦の棒で頭を叩かれ、ひどい言葉で侮辱され、衣服を剥がされ、罪状書きが貼られた十字架にはりつけにされ、ののしられる。それらの姿の中に、救い主の私たちへの愛を見なければなりません。どうすればあれほどの惨めさの中に、神の愛を見ることができるのでしょうか。それはただ一つ、「沈黙によってのみ」見ることができるのだと思います。

昨年末、大分教区の教区長浜口末男司教様が亡くなりました。大神学生時代に上五島の大曾教会に浜口神父様がおられてたいへんお世話になったので、葬儀ミサに出席したかったのですが新型コロナウイルスの影響で叶いませんでした。たいへん慕われていた司教様でしたのでだれもが出席したかったはずです。

葬儀ミサに出席できなかつたので、平戸地区の司祭たちは同じ日、同じ時間に追悼ミサをささげました。そのミサの中で平戸地区長の山村神父様が次のような思い出を語ってくれました。「私山村神父がいちど命の危険にあった時、たいへん怖い思いをしたとその時のことを当時の浜口神父様に話したことがありました。すると浜口神父様は表情を変えずにこう諭してくださいました。」

「『山村神父様の覚悟はその程度か？司祭はすべて、司祭になった瞬間から、イエスのためにいつ命をささげてもよい。この覚悟ができていないといけない。』私山村神父は、浜口神父様の言葉を聞いて、深く心を打たれたのです。晩年浜口司教様のご自身の病気を誰にも一切知らせず、沈黙の中で最後まで命を燃やし尽くしたことも、かつての体験と重ねて納得できたのです」と話してくれました。浜口司教様は、教区民すべてのために、ご自身による沈黙のおささげで遺言を託されたのです。

このあと行われる十字架の礼拝で、布を剥いでいくしぐさがあります。すべてが失われる姿を現しています。今日、聖櫃には御聖体が収められていません。この祈りの家を聖なるものとしている御聖体も取り去られているのです。あらゆるものが取り去られて、何も残っていないのでしょうか。

そうではありません。私たちを救おうとされるイエスの愛は、決して奪われないのです。すべてを奪われているのは、沈黙によってイエスの愛を見るためです。この静けさの中に私たちもしばし身を置いて、沈黙の中で神の愛を確かめることにしましょう。



復活徹夜祭 (マルコ 16:1-7)

あなたは何に死んで、復活の神秘を掘り下げますか

主の復活おめでとうございます。B年マルコ福音書を頼りに、今年の復活の喜びまでの道を辿ってきました。四旬節第4主日あたりからしきりに触れてきたことですが、「沈黙を守るイエス」からも、栄光の姿を読み取る信者に成長する必要があります。

今年の学びを得るきっかけとして「教会の祈り」に目を向けたいと思います。司祭や奉献生活者が日頃から唱えているものに「教会の祈り(または時課の典礼)」というものがあります。日本語に翻訳されていますが、実は海外のもの比べると不完全です。日本語版は、一年中の季節を一冊で済ませようとした簡略版ですが、外国語版、たとえば英語版は四冊に分かれていて、待降節・年間主日①・四旬節と復活節・年間主日②となっています。

この半年、試みに海外の物を使っております。もちろん外国語ですからお祈りが完璧に理解できているわけではありませんが、日本語版では到底気付かなかった部分が見えます。英語版の教会の祈りで一つ取り上げると、「四旬節と復活節とは、離れがたく一つに結ばれている。いわば表裏一体なのだ」ということです。

教会の祈りの特徴は詩編をふんだんに唱えることです。毎日、朝の祈り・昼の祈り・晩の祈り・寝る前の祈りと唱え、更に読書の祈りも加わります。これらの祈りにふんだんに詩編が用いられているのです。

手元にあるこの「四旬節・復活節用」の、「読書の祈り」第一朗読を唱えながら、「へえ。こうなってるんだ」という気付きがありました。詩編を唱える前に先唱があるのですが、四旬節中に使う先唱と、復活節中に使う先唱とでは、「アレルヤ」が付くかつかないか、それだけしか違いがないのです。

日本語の教会の祈りですが、同じ「読書の祈り」の第一朗読に添えられている先唱は、例外を除いて残念ながら一年中同じ箇所を唱えています。四旬節と復活節が表裏一体であるということを手伝わせる作りにはなっていません。今後、本来の姿、つまり四冊セットの完全版ができることを心から願っています。

さて教会の祈りの完全版が私に気付かせてくれたことは、「四旬節と復活節とは、離れがたく一つに結ばれている。表裏一体だ」ということでした。四旬節に唱えていた「読書の祈り第一朗読」に添えられている先唱に「アレルヤ」を付け加えるだけで、そのまま復活節の「読書の祈り第一朗読」に変身する。これは何を意味しているのだろうか。その答えを探し求めながら、四旬節の期間祈りを唱えていたのです。

そしてようやく、この原稿を用意する直前に答えらしきものが見えました。それが、先ほどから言っている「四旬節と復活節は、表裏一体なのかな」という思いでした。もう少し踏み込んで言うと、イエスの受難と復活は表裏一体だと、完全版の教会の祈りを唱えていて気付いたの

です。

もしこの仮定が的を射ているなら、私たちの日々の苦しみにも光が差します。誰でも何かしら体の不調があり、また病気を抱え、障害を抱えています。いっさい体の不調がない完璧な肉体をもつ人などまずいないでしょう。完璧な肉体をもつ人が仮にいたとしても、その人はきっと、僅かな体の不調を持つ人さえ理解できないかも知れません。

私は見た目には健康そうにしていますが、四種類の薬を服用しています。尿酸値を下げる薬、血中コレステロールを低下させる薬、更には血圧を下げる薬も服用しています。「薬を日頃から持ち歩く生活になったらもうおしまいだ」と、若い頃は本気で思っていました。

けれども今、薬を持ち歩く生活が日常になってみるとよく分かるのです。薬を服用している人の気持ちなど、何も気にしていなかった。自分が同じ立場になって、かつては「薬を何錠も飲む人の人生はもう終わっている」と思っていたけれど、そうではない。「その人生は終わっている」と決めてかかっていた生き方にいったん自分を置いて、初めて見える世界があるということです。

今なら、薬を飲み始めたという人に、こう言ってあげるでしょう。「ようこそ。」自分が、受け入れられないと言っていた状態に一旦死んでみて、人は初めて復活するのです。

イエスが先に、死と復活が切り離せないもの、表裏一体だと証明してくださいました。私たちもこれまで思い描いていた自分に死ぬことで、復活の栄光にあずかる者となれます。

どれだけ働いても疲れなかった人が急に倒れて入院し、退院して初めて仕事の量を考える人になる。一度死を味わったことで、その先の復活を体験できたのです。

神の使いも言っています。「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』と。」(12・6) いろいろな思い込みに死ななければ、私たちはイエスが招く場所にたどり着けないのです。

復活の喜びをしみじみと味わうために、私たちは何かの形で死を味わうべきだと思います。故意に命を危険にさらす必要はありませんが、思い込みや偏見は、一度死ぬべき最上位のものです。今年も、復活の喜びを深く掘り下げる材料を探しましょう。私たちが更に一つ、何かに死ぬならば、そこで味わう苦痛や惨めさや沈黙を通して、復活の神秘をより深く学ぶことになるのです。



復活の主日(日中)(ヨハネ 20:1-9)

沈黙の中に声を聞いた人に、復活の主は答えてくださる

あらためて主の御復活おめでとうございます。病人訪問で、「御復活と聖霊降臨は雨が降るんですよ」と話していた方がいました。説教を書いている時点では予報は雨でしたが、果たしてどうなっているのでしょうか。

先日聖香油のミサに参加した帰り、私は「復活の出来事」を身近に感じる体験をしました。大司教館のFで始まる名前の神父様から、「中田神父様、あんた隠し事のなかね？最近おたくの頭を見る度に、『生えてきたなあ』って思うとよ。まさか、『ニューモ』ね？」

これには参りました。「ニューモ」は使っていません。「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」(ルカ 15・24) この聖書の言葉を体験させてくれたF神父様には、私が使い始めた「コスモス」で売られているシャンプーを送りたいと思います。

今年は沈黙の中にメッセージを読み取ろうとしています。朗読では「マグダラのマリア」だけが声を上げます。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」(20・2)

もちろん、主イエスは墓から取り去られたものではありません。墓においてになりませんが、状況を理解する方法は二つあるでしょう。

一つは、マグダラのマリアをもう一度墓に連れて行って、現場検証をすることです。彼女からあらためて話を聞き、彼女の証言から本当に起きていることを突き止める方法です。

もう一つは、マグダラのマリアの証言が表面的なものかも知れないので、弟子たちが独自に墓を調べて、証言の向こうにある出来事を突き止める方法です。実際弟子たちは、マグダラのマリアの証言にあまりとらわれず、その向こうにある真実を捉えようと墓に向かったのです。

それはつまり、言葉が伝えてくれたことにとらわれず、沈黙を保っている空の墓に、耳を傾けに行ったということです。沈黙を保っている墓に、弟子たちが真実を捉えるヒントがある。一つも漏らさないようにと神経を集中して、ついに真実を捉えたのです。「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。」(20・8)

沈黙の中で答えを探す経験は、誰もが通る道です。私は現役主任司祭を肺炎で失ったことがありました。私たちだけを残して、いったいどうすれば良いのですか？沈黙の中に答えを探さなければなりません。

こんな私たちを、イエスは導いてくださいます。「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」(20・9) 今でしたら、イエスのみことばが入ってきます。沈黙の中で、神は必ず答えを示してくださると。

私たちが信頼して耳を澄ませば、答えを聞かせてくださる。復活した主は、今も人間的な思い込みの声を外に出した沈黙の場所で、空の墓で答えてくださり、希望と慰めを与えてくださるのです。

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:19-31)



神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

見ないのに、見た人と同じくらい証しができますか

イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」(20・29) 今年あらためてイエスがトマスにかけた言葉を読み味わって、聖書のみことばは何度読み返しても新しさがあると感じました。

数日前、老人ホームにミサに行きました。ミサの参加者は、当然のことですが先唱のお手伝いをしている職員を除いて全員高齢者です。高齢者と聞くと、動作が遅いと考えるかも知れませんが、祈りに関しては案外早口です。早口と言うより、早すぎます。

この日のミサは復活の八日間という期間だったので、平日でありながら「栄光の賛歌」があります。私が「天のいと高きところには神に栄光」と唱えると、皆さん一斉に競争です。「地には善意の人に平和あれ。われら主をほめ、主をたたえ、主を拝み、主をあがめ、主の大いなる栄光のゆえに感謝したてまつる。」まるで100m競争です。高齢者が、早口で唱えているのを見ていたら、今にも息が切れて死んでしまうのではないかと心配します。

私の正直な感想は「本当は、ゆっくり唱えられないのだろうか」というものです。動作はゆっくりで、じれったいのに、祈りは誰とも歩調を合わせず早口で唱える。これは実は、「ゆっくり唱えることができないのだ」と、私は見抜いています。

つまりこういうことです。「栄光の賛歌」をゆっくり唱えるためには、頭の中に祈りの文字がくっきり浮かんでいなければなりません。それをなぞるように、あるいは筆で書き写すようにゆっくり唱えることは、多くの高齢者には難しいのです。むしろ、誰よりもゆっくり唱えることのできる人、もっと言うと恐ろしくゆっくり唱えることのできる人のほうが、祈りを深く理解していると思います。

ここで、イエスがトマスにかけた先の言葉が浮かびます。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」トマスは心を閉ざして、他の弟子たちの話に耳を傾けることができなくなっていました。他の弟子たちが「私たちは主を見た」と言った時、素直に喜べなかったのです。

心を開いて、主が復活してくださったことを喜んでいたら、トマスはもっと偉大になれたでしょう。マルコ福音書が書き残した通りです。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」(マルコ 9・35) 広い心で、起こっている出来事を迎え入れることができたなら、「わたしの主、わたしの神よ」(20・28) という答えも、もっと輝いたことでしょう。

ここで一つ、まとめを作しましょう。祈りをよく覚えている人は、すらすら唱えることができます。しかし、それでもあえて、恐ろしいほど祈りをゆっくり唱えることのできる人のほうが、深く祈りを理解して

いる人なのです。だからと言ってミサのときに「栄光の賛歌」を恐ろしくゆっくり唱える必要はありませんが、それができるだろうか？という事は、ご自分で確かめてみると良いと思います。

「地には善意の人に平和あれ。われら主をほめ、主をたたえ、主を拝み、主をあがめ、主の大いなる栄光のゆえに感謝したてまつる。」こんなスピードで、完璧に唱えきることができるでしょうか？皆さんはその境地までたどり着いているでしょうか。

「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」見ないのに、まるで見てきたかのように、すみずみまで描き切る。イエスのみことばをこの耳で聞いていないのに、まるで聞いたかのように語る。トマスだけでなく、他の弟子たちも、自分が見たこと聞いたことを次の世代に宣教し、語り継ぎます。

そして何世代か入れ替われば、直接見聞きした人は誰も居なくなります。それでも、「見ないのに信じる人は、幸いである」そんな弟子に育っていく人たちがいて、今の教会が成り立っているのです。

私たちの中で、教皇聖ヨハネ・パウロ二世と、教皇フランシスコを直接見た人は結構いるはずですが、けれども何十年かすれば、両教皇を直接見た人は居なくなります。教皇様が司式してくださったミサに参加した時のあの一体感を、私たちは次の世代にちゃんと伝えることができるでしょうか？受け取ってくれる相手が、次の何十年間、来日した教皇様を生き生きと伝えられるかどうか。これはまさに私たちにかかっているのです。

たとえば「信仰宣言」を、どんなに遅い速度でも唱えることができる。それくらい体に覚え込ませてください。そうすれば、どんなに教会から遠ざかっている人にでも、あなたの信仰は伝わるでしょう。その時あなたは、真の意味で「見ないのに信じる人は、幸いである」とイエスから喜んでもらえる人になれるのです。



復活節第3主日 (ルカ 24:35-48)

私たちが「ここに何か食べ物があるか」と言ってみる

「彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、『ここに何か食べ物があるか』と言われた。」(24・41) イエスが食べ物を願ったことが、今年は特に目に留まりました。いろいろと気づきがありましたので、皆さんと分かち合いたいと思います。

イエスの呼びかけをもっとくだけた言い方にすると「何かない？」ということでしょう。忘れられない思い出があります。当時赴任していた教会はすべての教会学校小学生を集めても五人くらいしかいない時代でした。その中に兄弟がいました。

お兄ちゃんは落ち着きのある子でしたが、弟は反対に何をしでかすか分からない子でした。二人とも自転車で教会に来るのですが、弟は自転車をそのまま放り投げ、教会までの階段を駆け上がります。お兄ちゃんが弟の自転車を立て掛けて弟を追いかけます。

弟が先に、司祭館にたどり着きます。この弟が司祭館の玄関を開けるなり、何と申すのでしょうか。「ただいま！」と言うんです。考えられますか？当時の賄いが「いらっしゃい」と迎えると、一目散に食堂に行きます。そのあとが傑作です。「賄いさん！何かなか？」

この弟は、「何かない？」と言いながら、司祭館の冷蔵庫をあさくって、めぼしい食べ物やお菓子に勝手に手を出します。賄いさんは孫のような子供達に親切ですが、主任司祭はたまったものじゃありません。こいつらのおかげで接待交際費をそうとう使いました。

「こいつらは自分を誰だと思っているのだろうか？」当時はそんな風に考えていました。ここに居るのが当然だと思っているから、「ただいま」と言うし、「何か食べ物ないかな」と言っているのでしょう。確かに当時は、この騒がしい弟と、弟にいつも驚かされる兄がいるのが司祭館の日常でした。

復活したイエスも、呆気にとられている弟子たちに同じ言葉をかけました。「ここに何か食べ物があるか」(24・41)。イエスにとって、弟子たちと共にいること、弟子たちと共に同じ食べ物を食べることは、ごく普通の出来事、いつもの光景だったわけです。

復活したイエスが、ごく普通に弟子たちの前で振る舞われるのを見た時、弟子たちは自然と恐れから解放されました。「喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっている」(同上) 彼らが、ようやく落ち着きを取り戻したのです。

実際は、十字架上での最後の場面に多くの弟子が立ち会っていません。逃げ出したのです。それでも逃げ出した弟子たちを責めることなく、いつも通り振る舞う復活した主を見て、力不足の弟子たちをいつも包んでくださっていたかつてのことを思い出したのです。

イエス・キリストは今も私たちのそばにいてくださる。弱い自分たちを何事もなかったかのように温かく受け入れてくださっている。その

姿を見て、弟子たちはイエスの復活を頭でなく心で理解したのです。心で理解していなければ、出来事は書物に残らなかったことでしょう。

「賄いさん！何かなか？」という子供達を見て、当時は「お前の冷蔵庫じゃなからうもん」と思っていました。しかしこの子たちは、私に復活したイエス様を見せてくださっていたのかも知れません。80段以上ある階段を走ってきて、司祭館と教会の敷地に飛び込んでくるのを当たり前のこととしている。よその子でそんなことが起こりうるでしょうか？復活したイエスが共におられる子供でなければ、決して起こらないと思います。

さて私たちは、「ここに何か食べ物があるか」という言葉をどう受けとめるでしょうか。今この場で、同じ声が聞こえるでしょうか。もし復活したイエスが「ここに何か食べ物があるか」と問いかけるとしたら、私たちはどう答えるのでしょうか？私たちに、復活した主に食べさせてあげる物を用意できるのでしょうか？

現代は、少し違うと思います。「ここに何か食べ物があるか」と問いかける主ご自身が、食べ物となってくださいます。つまり、「ここに何か食べ物があるか」と呼びかけるイエスご自身が「皆、これを取って食べなさい」と招いてくださるのです。

イエスご自身が食べ物となるのはなぜでしょうか。私たちの生活の「日常」となるためです。冷蔵庫を開ければ食べ物がある。それは私たちの日常です。イエスはご自身が食べ物となって、教会に集まり、ミサを共にささげ、聖体拝領する姿が私たちの「日常」となるために、心を砕いてくださるのです。私たちはイエスから「ここに何か食べ物があるか」と問われたなら、「はい。ここに食べ物があります」と、聖堂に集まり、祭壇を指差す信者でありたいものです。

ただ、もう少しすると、この田平教会聖堂は、耐震補強工事のために閉じられてしまいます。遠い先の話ではありません。それでも私たちは、「ここに何か食べ物があるか」というイエスの問いかけに答える準備をしておかなければなりません。耐震工事の期間中はおそらく信徒会館でしょう。そして工事が完了した暁には、またこの場所を使えるようになるでしょう。

イエスは最後に宣教の使命も託します。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる」（24・46-48）。

宣教と言うと、とても重く感じるかも知れません。ただ、これを一言で言うこともできます。出かけて行って、「ここに何か食べ物があるか」と言うのです。そして復活したイエスと同じく、「私が、あなたがたの食べ物となってあげましょう」と言って、教会へと導くのです。私たちはそのために、今日御聖体をいただくのです。



復活節第4主日 (ヨハネ 10:11-18)

あなたは自分の「カバン」をどこに置きますか

復活節第4主日を迎えました。4月の最後の日曜日でもあるので、「世界召命祈願日」とも重なります。福音朗読を、召命のテーマと結びつけて、話したいと思います。

もう一つ、4月25日は「聖マルコ福音記者」の祝日です。日曜日だったので、祝日表から消えています。けれども今年の典礼暦がB年で、マルコ福音書を中心に朗読することを考えれば、何も聖マルコ福音記者の祝日が消えなくても良いのに、と思います。

福音朗読に戻りましょう。最後の部分が物語全体の鍵だと思います。「だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」(10・18)

皆さんは、「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる」という部分が引っかけられないでしょうか。「捨てる」という表現は、あまり良い響きではありません。まるで命を投げ出すような感じに聞こえますが、本当にイエスは、そんなつもりだったのでしょうか？ここには、翻訳の壁があると思います。

私たちは聖書を日本語訳で読みます。するとどうしても、日本語からしか意味をくみ取れません。新約聖書が本来書かれたのはギリシャ語ですから、本来書かれた言葉にできるだけ近い翻訳をするのが理想です。それぞれの国が、その努力をしています。たとえば英語では、この部分を次のように翻訳しています。”I have authority to lay it down, and I have authority to take it again.”

何となく分かってもらえたでしょう。”to lay it down”は、「横に置く」とか「横たえる」という意味です。日本語で訳された「捨てる」とは聞こえ方がずいぶん違います。「わたしは命を置く権限を持っているし、命を取り戻す権限も持っている」日本で「捨てる」と翻訳した事情は分かりませんが、響きはずいぶん違います。

そこで、「命を置く」という理解で朗読を読み直してみましょう。すると、イエスが羊のために取った行動は、仕方なく取った行動ではないことがよく分かります。羊を救うために、喜んで命を置いたのです。

ではどこに、イエスはご自分の命を置いたのでしょうか。それは御父のご計画・御父のお望みに、置いたということです。「御父のご計画に命を捨てた」のではなく、「御父のご計画に命を置いた」のです。

イエスがご自分の命を置いた御父のご計画は、「狭い門から入りなさい」(マタイ7・13)とたとえられたような狭い道かも知れません。しかし、羊飼いとして確実に人々を導く道でした。反対に「滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い」(同7・13)とあるように、広々とした道に命を置いて、必ずしもそれが正解とは限らないのです。

今週は世界召命祈願日です。いくつかの修道会から、「紹介をしてください」とお願いされて、冊子を置いています。宣伝はそれだけではありません。すでに私たちの先輩達がいくつかの修道会に入り、司祭や修道者になっています。もちろん、教区司祭も田平教会は大勢います。この先輩方がそのまま、それぞれの召命の「生き証人」です。

今週の福音朗読と重ねて、召命を考えてみましょう。司祭や修道者への道が召命のすべてではありませんが、非常に分かりやすいのでここに焦点を当ててみましょう。司祭や修道者の召命を生きた人は、イエスが言われた「わたしは羊のために命を捨てる」という生き方の人です。

この場合も、「命を捨てる」という表現はふさわしくないでしょう。この世の生き方に「命を捨てる」生き方などないからです。「わたしは羊のために命を置く」それも「御父のお望みに命を置く」そういう生き方が司祭や修道者の召命なのだと思います。

「命を置く」これでも説明が足りないかも知れません。すべての人の召命に神様が呼びかける相手は、特に「青少年」だからです。青少年のために、もっと思い切っにかみ砕いてみましょう。青少年の皆さんが「置く」もので、何を思い出すでしょうか。神父様は青少年の時を振り返って、「カバン」を思い出しました。

さて、青少年の皆さんはカバンをどこに置きますか？カバンをお家に置いたまま学校には行きません。反対に学校に置いたままお家に帰ることもしません。カバンはどこに置くのでしょうか？カバンは、いつも、自分の目標の上に置くと思います。保育園の先生になりたいとか、歌手になりたいとか、目標を決めて、カバンを背負って頑張ると思います。

そこでお願いです。そのうちの何人か、「神様の導き」「神様の見守り」にカバンを置いて、勉強や部活をしてください。神様は、いつも皆さんを導いてくれます。その導きの上にカバンを置いて毎日の勉強や部活や習いごとをしてくれたら、ある人を神様の特別な働きに誘ってくれるはずです。

先週だったか、平日の侍者が足りなくなっていて困っていますとお話ししました。呼びかけに返事がありました。感謝します。神様の導きにカバンを置いてくれる人には、神様も特別な呼びかけをしてくれます。どうか、勇気を出して返事をしてください。

教会でミサをしている神父様に興味を持っている人もいるでしょう。もしかしたら、「神父様の仕事だったら、ぼくにもできそうだな」と思っているかも知れません。ぜひその人は、あなたのカバンを神様の導きに預けてみてください。きっと、特別な働きを与えてくれると思います。

あなたが大切にしているバッグやカバンを、あなたはどこに置きますか？あなたの目標に置きますか？あなたの夢に置きますか？神様の導きにあなたがそれを置くなら、想像を超える、真似のできない働きに、神様があなたを使ってください。



復活節第5主日 (ヨハネ 15:1-8)

命に責任を持って下さる方と繋がる

「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。」(15・4) 繋がりが希薄な現代社会にあって、確実な繋がりを与えるイエスの呼びかけに、耳を傾けましょう。

今週の福音朗読箇所には、ほろ苦い思い出があります。私が助祭だった1991年に、召命の集いで説教の大役を仰せつかりました。それも「上五島地区」と、福岡の「大神学院」と二度もです。上五島では文化センターのホールに大勢の子供が集まった中での説教でした。大神学院では、すり鉢の形になった第二グラウンドにたくさんの子供が集まり、野外ミサの説教でした。朗読箇所は今週の朗読箇所「イエスはまことのぶどうの木」でした。

かなり早くから福音朗読の箇所が示されていたので、わたしは入念に準備をし、子供達に身振り手振りで話しかけ、説教台を飛び出して熱演したわけです。自分としては、後にも先にもない、生涯最高の説教をしたつもりでした。

ところが、先輩司祭達からは不評を買ひまして、上五島地区で司式した丸尾武雄地区長神父様からは「けしからん」とお叱りを受けました。大神学院でも、司式された松永司教様や、大先輩の福岡の神父様方から「あんなものは説教じゃない」とケチョンケチョンにけなされました。ですから、小教区を越えた大きな会場での説教デビューは、さんざんだったわけです。

それでも、一つの感触はつかんでいました。あの日の説教では、わたしは子供達と一緒に、ワクワクしながら説教をしたし、子供達も話の中にすっかり入り込んだという体験です。私が、「繋がっている」と心の底から感じた瞬間でした。

実に多くの方が、繋がりを求めています。新型コロナウイルスが猛威を振るう中で、直接のふれあいが断たれています。するとスマホを使ってまったく見知らぬ人とさえ繋がりを得ようとしています。よりどころが欲しくて、安為に繋がってくれる他人に近づき、自分の身を危険にさらすことさえあります。

そんな中でもイエスは、二千年前と変わらず呼びかけるのです。「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。」イエスは他のどの人とも違う繋がりを与えてくれます。多くの人々が繋がってくれたことに対価を求めますが、イエスは私たちに豊かにするために、実を結ばせるために繋がってくださり、決して対価を求めないのです。

それは身近なたとえでは親子の繋がりがかも知れません。親が子を育てて、立派に育った子供に「育ててやったから何かをくれ」と言わない

のと同じです。親は子が成長するためだけに繋がってくださり、対価を求めないからです。イエスも、私たちが豊かに実を結ぶように、いつも繋がってくださいます。

イエスと私たちの繋がりは、突き詰めると生きていられるかどうかの繋がりで、例えるなら、新型コロナウイルスの重症患者が酸素マスクを必要としている状態です。酸素を取り込む力が弱っているために、酸素マスクがなければ命に関わります。イエスと私たちの繋がりが、まさにこの重症患者と酸素マスクの関係です。もちろん酸素マスクを拒否することも出来るでしょう。けれどもその行為は、命に関わるのです。

イエスと私たちの繋がりは、本当は命に関わる問題なのに、実際にはあまり気にしていません。自分では酸素を取り込めなくなっているのに、酸素マスクを使おうとしません。自分では血液中の老廃物や水分を排泄できなくなっているのに、人工透析を避けています。命を繋ぐことが最優先なのに、イエスとの繋がりを遠回しにしています。なぜでしょうか？

恐らく、イエスと繋がって何かを手に入れたことがないからです。永遠の命に関わるからと説明しても、人間は弱いのですぐ分かる体験をどうしても欲しがります。そういう人には、やはりすぐに手に入る何かを示したほうが良いでしょう。私は病者の塗油で、少なくとも四回、死の淵から帰ってきた人を紹介できます。

一人は、人工呼吸器に繋がれた人でした。口にホースが差し込まれ、鼻にもチューブが入っていました。家族は悔いが残らないようにと病者の塗油を授ける覚悟だったでしょう。私自身も、「ちょっと今回は助からないかも知れないなあ」と、内心思いつつ病者の塗油を授けたのです。授けている司祭も奇跡を期待してなかったのに、その人は数ヶ月して退院し、半年後には新車を買って、祝別をお願いに来たのです。

他にも並べる必要があるでしょうか。あと三人紹介出来ますが、もう十分でしょう。イエスに繋がって生きるとは、命に関わることなのです。「わたしにつながっていなさい」と呼びかける主は、命に責任を持つことが出来るのです。命に責任を持って下さる方と繋がる。私がいよいよ豊かに実を結ぶように、そのことだけを願っておられるイエスと繋がる人を、イエスは「わたしの弟子」と呼んでくださいます。



復活節第6主日 (ヨハネ 15:9-17)

イエスに友とされた者として生きる

「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。」 (15・14) イエスは弟子たちを「友」と呼んでくださいました。友のために命を捨てるどころまで、イエスの招きに答えたからです。

私たち全員に同じことは求められていないかも知れませんが、次のことは求められています。「わたしの愛にとどまりなさい」 (15・9) ほかにも「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」 (15・12) イエスのこの掟を具体的に描いてみましょう。

友達になれる人というのは、自分と同じ価値観を持っている人です。自分と似たような境遇の人にも親しみを覚え、友人のうちに数えることもあります。その上さらに、キリスト者はミサで初めて会った人、もう二度と会わないかも知れない人にも、心を開き、あいさつができます。

日曜日のミサに、違う場所で参加したとしましょう。たとえば平戸地区は9月には焼罪(やいざ)殉教祭のミサが行われますが、殉教公園でミサに参加している人は、ふだんあまり見ない人かも知れません。

けれども、大司教様のミサに参加して、「お互いに平和のあいさつを交わしましょう」と呼びかけられると、さっきまで見たこともなかった人と笑顔で平和のあいさつをするに違いありません。それが可能なのは、同じ信仰を持っているからです。

このように、わたしたちは共通の価値観を持っている人のことを、「友」として見ることができます。イエスはすでに持っている私たちの体験に訴えかけて、「友」という言葉でイエスと私たちとの関係も説明してくださったのです。

ところで、イエスは弟子たちのことを「友」とお呼びになりましたが、「友」と呼ぶからには弟子たちに期待していることも何かしらあるのではないのでしょうか。わたしたちが「友」に期待するようなことを、イエスもまた弟子たちに期待するのは当然ではないのでしょうか。

わたしたちは友人にどんなことを期待しているのでしょうか。困ったときに助けてくれることとか、同じ目標を目指して、お互いに励まし合うとか、過ちを犯したときに率直に間違いを指摘してもらうなどのことを期待するでしょう。「それでも友達か」と言われるようなことを慎むことも含まれるかも知れません。

イエスは弟子たちに、「あなたがたはわたしの友である」と言いました。まずイエスが、弟子たちの友となってくださいました。弟子たちの働きに力を貸し、弟子たちが行き詰まっているときには知恵を貸し、喜ばしいことがあれば一緒に喜び、悲しい出来事があればその悲しみを半分に分け合って、友として十分に支えてくださったのです。

そこから、弟子たちは自分たちのなすべき事を学んだのでした。イエスを信じ、イエスの命じる掟を守る人々に友として接し、イエスがしてくださったように、新しくキリスト者となった人々の支えとなっていたのです。

そこで、わたしたちもイエスの呼びかけに向き合う必要があります。「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。」

互いに愛し合いなさいというイエスの掟を守るなら、わたしたちはイエスの友となれるのです。

友は、相手を思いやります。わたしたちがミサに参加しているこの時間、同じく友であるあの人は、コロナ禍の中であって残念ながらミサに来ることができないかも知れません。その人のことをミサの中で思い出してあげましょう。

食事をしている時間、友でありながらある国の家族は今日の食べ物に事欠いているかも知れません。その人のために、小さなおささげをしましょう。すでに長崎教区では、「一菜募金（いっさいぼきん）」と言って、食事の一品分をおささげする運動が定着しています。

同じ司祭の身分にあるあの人、同じ修道者の身分にあるあの人、同じ信徒であるあの人が、もしかしたら心を閉ざし暗闇の中にいるかも知れません。その人のことを思い出したなら、祈ってあげるとか、電話やメールで連絡取るとか、訪ねてみるとか、いろんな方法で「あなたのそばにいるよ」と知らせあげましょう。忘れられていないのだと知れば、その人はいつか心を開いて悩みを打ち明けてくれるかも知れません。

これらはすべて、友であるイエスが先にわたしたちのためにしてくれたことであり、わたしたちにも期待されていることです。キリスト者は同じ一つの信仰で友となれます。他の友とは異なり、イエスを信じているという共通の土台に立って、物事を考えることができるのです。この世の友よりも、寛大に愛を示すことが出来るのです。

最後に一人、私たちの大切な恩人、大切な友を紹介しましょう。今から140年前、平戸地区のために派遣されたマタラ神父様です。マタラ神父様は、およそ40年、平戸地区の基礎を築くために働いてくださいました。初代の紐差教会、上神崎の教会、宝亀教会、お告げの前身となる愛苦会設立、平戸教会、山田教会、そして最後に、田平教会の建設にも尽くしてくれた恩人です。イエスの友として、「わたしの愛にとどまりなさい」という招きに固くとどまり、私たち平戸地区の信者達、田平の信者達を愛してくださったから、これだけのことができたのです。そして故国の土を踏むことなく、田平教会献堂の3年後に天に帰りました。

わたしたちは、イエスに友としていただいたことを決して忘れてはいけません。決して忘れないしるしは、わたしたちが誰かの友となることです。イエスの友とされたから、身近なあの人に力を貸します。イエスの友とされたから、ずいぶん遠ざかっているあの人に、心の窓を開いておきます。わたしたちが動き出す力の源は、先にイエスによって友としていただいたこと、ここにあるのではないのでしょうか。

今週は、世界広報の日でもあります。私たち一人ひとりが、互いに愛し合うというイエスの掟の広報担当者です。イエスに友とされた者であることを知らせる広報官です。一つでも二つでも、イエスの愛に報いる働きができますように、今日のミサの中で恵みを願いましょう。



主の昇天 (マルコ 16:15-20)

あなたが声を出すその一瞬前に、使命を思い出そう

「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」
(16・15) 弟子たちはイエスの指示を忠実に果たしました。「弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した。」(16・20) 忠実にイエスの指示を果たすことで、私たちもイエスの弟子として役割を担いましょう。

長崎県は、現在新型コロナウイルス感染症の警戒態勢が、最大警戒の「5」に引き上げられました。この状態では、人が集まることさえはばかれます。けれどもミサはキリスト信者の「命に関わる部分」ですので、最大限続けたいです。そこでミサを続ける苦肉の策として、残念ではありますが聖歌を歌わずにミサを続けたいと思います。

今週は主の昇天で、答唱詩編は「主はのぼられた」という「ここでしか歌わない聖歌」の予定でしたし、来週は聖霊降臨で「聖霊の続唱」を歌うのを楽しみにしていましたが、今年は歌う代わりに唱えたいと思います。ただ YouTube にアップするミサ動画ではお告げのマリア修道会本部の協力を得て、聖歌を聞くことが出来ます。チャンネル登録をよろしくお願いします。

県全体の警戒が最大警戒となったことで、聖堂に集まって唱える聖母月のロザリオを、中止せざるを得ませんでした。家族でロザリオを唱える習慣があるなら、ぜひ家庭で続けて唱え、新型コロナウイルス感染症の世界中での終息を願ってロザリオを唱えるように呼びかけている教皇フランシスコと共に歩んでほしいと思います。

さて問題は、「家族でロザリオを唱える習慣がない家庭」です。ロザリオを唱えないのだから、教皇フランシスコと共に歩むことができないと、最初から諦めてよいのでしょうか。もちろん、決してそうではないと思います。ロザリオは無理でも、何か形を変えて、教皇様の意向を汲んだ生活をすべきだと思います。

そもそも、自分の生活の中に、祈りがあっただろうか。ここから考えてみましょう。朝の祈りか、夕の祈りを唱えているなら、生活の中に祈りがある人ですから、朝夕の祈りを始める時に「教皇様と共に歩みます。世界中の新型コロナウイルス感染症が終息しますように」と心で唱えてから祈ってください。

祈祷書を開いて祈ることはしなくても、かろうじて祈る時がある。そういう人もいるでしょう。評議会、連絡会、日曜日のミサ、こうした場面でも、「教皇様と共に歩みます。世界中の新型コロナウイルス感染症が終息しますように」と前置きして始めることは可能です。

かろうじて祈る人は、もう少し祈りましょう。会社に出勤する時、自宅を出るその瞬間に、「教皇様と共に歩みます」この意向を思い出してください。あるいは会社を退勤する、その瞬間に思い出すなら、もう少し祈りが生活の中に取り込まれますね。

家庭にある人は、台所に立つこともあるでしょう。台所に立つ最初の場面で、また片付けを終え、台所を離れるその場面で、「教皇様と共に歩みます」この意向を思い出すと、もっと祈りが生活の中に取り込まれます。ほかにも、それぞれの人が工夫して、生活に祈りを取り込むことは十分可能です。食事のあとさき、趣味の時間を始める時終える時などです。

もっと踏み込んで、言いましょう。あなたが声を出す瞬間、その一瞬前に、「教皇様と共に歩みます。世界中の新型コロナウイルス感染症が終息しますように」と言ってください。ご年輩の皆さんは、椅子に座り、椅子から立ち上がる時に「よいしょ」と言うでしょう。その一瞬前に、思い出すのです。「教皇様と共に歩みます！」一日何回「よいしょ」と言いますか？そのたびに、新型コロナウイルス感染症の終息のためにできることがあるのです。

冒頭の、イエスが弟子たちに命じられたことを思い出しましょう。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」(16・15)「全世界」とは、国を超えて、地域を越えてというだけでなく、私たちが身を置くありとあらゆる場面です。あなたが「よいしょ」と言って座る場所は、見ず知らずの人と出会う、大切な場所かも知れません。見ず知らずのその人と、新型コロナウイルス感染症の終息を願う会話をするために、「よいしょ」と座るその一瞬前に、「教皇様と歩みを共にします」と念じておけば、必ず福音を伝える機会になるでしょう。

これだけ言うと、恐らく皆さんは来週まで一週間「『よいしょ』って言うのをやめよう」と後ろ向きの考えをするかも知れません。けれどもご心配なく。高齢者の皆さんが「よいしょ」と言わないのは無理です。だから必ず、あなたにも、あなたにも、教皇様と共に歩むチャンスが、福音宣教するチャンスが、巡ってくるのです。

弟子たちはイエスの指示を忠実に果たしました。「弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した。」(16・20) 私たちはどうしますか？決めるのは自分です。イエスが約束してくださる「助け主である聖霊」に信頼して歩み出すか、歩みを止めるかです。現在 84 歳の教皇様と共に、新型コロナウイルス感染症の終息のために力を貸しますか、貸しませんか？小さなお手伝いでも、いつか世界を変える力になり得ます。



聖霊降臨の主日 (ヨハネ 15:26-27;16:12-15)

聖霊来てくださいと絶えず願うなら、私たちは聖霊の神殿となる

「しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。」(16・13) 聖霊降臨の主日を迎えました。イエスは聖霊のことを「真理の霊」と紹介してくださいました。聖書と典礼6頁にも、「真理であるイエスのことを弟子たちに現し、悟らせる霊、という意味」と説明されています。私たちも真理の霊である聖霊を身近に感じ、照らしと導きを願いましょう。

過ぎた一週間は聖霊の働きを身近に感じました。私の場合は「弁護士」あるいは「助け主」という印象の働き方でした。2つ紹介します。1つは、ユニットバスのお手洗いに座っていた時です。出入りする扉の縁の鍵穴に、10cm くらいのムカデがいたのです。目と鼻の先です。

私は飛び上がりそうになりましたが、自分を落ち着かせてトイレトペーパーを丸めて握り、はたいて床に落とし、外に追い出しました。知らずにムカデに噛みつかれていたら、アナフィラキシーか何か分かりませんが、アナフロシキショックでミサが出来なくて、皆さんに迷惑をかけるところでした。

もう一つは、長崎教区のホームページです。毎週「主日の福音」という項目を中田神父が更新しているのですが、ホームページの安全性が危険にさらされているのではないかと、教区広報委員会にお知らせしました。連絡を受けた委員から、「早急に検討します」と連絡が来ました。今になって考えれば、教区ホームページがサイバー攻撃を受けてアナフロシキショックで気絶していてもおかしくない状態でした。

2つの事件、共に「弁護士」「助け主」と言える聖霊の働きで、私個人と、長崎教区の危機を脱することが出来たのではないかと考えております。中田神父にとっては、聖霊の働き、導きは日常の一コマです。これは神がそばにいてくださることの、明白なしるしだと思っています。

ただ、信者の皆さんにとっては聖霊の働きは明白ではないかも知れません。「真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。」イエスがこれほど約束してくださっているのに、聖霊を身近に感じられないかも知れません。

そこで、この一週間は「聖霊の続唱」を参考にして過ごしてはいかがでしょうか。「聖霊来てください」という祈りから始まっていますが、聖霊は「真理であるイエスのことを悟らせる霊」なので、「聖霊来てください。イエス様は私の生活にどのように関わってくださるのか教えてください」とこうした願いを込めて、聖霊の続唱を唱えたと、悟らせてくださると思います。

毎日の忙しさの中で、教会に通っている子供が、教会を通して学校とは違う成長を見せてくれるかも知れません。その時あなたは、聖霊を通して「真理であるイエスが私たちとどのように関わってくださるか」を知ることになるでしょう。

また、ある人は「イエス様は私に何をしてくださいますか？聖霊来て、私に教えてください」と尋ねたい人もいらっしゃるでしょう。中田神父はイエスが生活全般を配慮してくださっていると確信しています。イエス様が配慮してくださっているから今があるのだと気付いた時が、あなたにとっての聖霊降臨・聖霊体験なのです。

昔、「始業の祈り」というのがありました。「聖霊、来たり給え、信者の心に充ち給え。」今でも唱える人がいると思いますが、この祈りで聖霊の照らし導きを求める一週間とするのもよいでしょう。長崎教区を見渡すと、30以上の小教区がミサを中止しています。私たちが聖霊来てくださいと願いながらミサにあずかり、説教を聞いていることは、特別な意味を持っています。私たちのミサは、ミサを中止している小教区のためのミサでもあるからです。

「聖霊来てください。」この願いは、絶えず繰り返すと、いつか私自身を聖霊の神殿にするでしょう。聖霊がいつも私の中に住まいを見つけると、私はいつも主イエスと共にいることにもなります。中田神父にとって、今年「聖霊来てください」と願って与えられたまったく新しい気付きでした。

ともかく、この一週間で真理であるイエスについて何か気付きを頂くために、聖霊来てくださいと願いましょう。聖霊は、私たちが言葉で表せない部分を照らして、これまで私たちに対するイエスの配慮があったのだと気付かせてくださいます。「聖霊来てください」と、心から願う一週間といたしましょう。

三位一体の主日(マタイ 28:16-20)



三位一体の主日 (マタイ 28:16-20)

日常こそ、三位一体の神の豊かさに触れる場所

三位一体の主日を迎えました。毎年繰り返していますが、一連のお祝い日を順番通りに覚えて欲しいと思います。「主の昇天」「聖霊降臨」「三位一体」「キリストの聖体」「イエスのみ心」この五つです。「イエスのみ心」だけは日曜日と重ならないですが、毎週続くお祝い日の季節として、五月六月は思い出してください。

去年から今年にかけて、緊急事態宣言などで公式のミサがなくなって個人的にミサをささげている期間に、頭に浮かんで消えることがありました。それはミサの式文の中で、「人の名前に結びつく箇所が結構あるなあ」ということです。名前が出てくる人はうらやましいです。

分かりやすい例から並べてみましょう。「恵み」という単語は、皆さんも「なるほど」と思うでしょう。今日この場所に「めぐみ」という人がいらっしゃるのではないのでしょうか。他にも分かりやすい単語としては、「愛」とか、「光」などがあります。

さらに注意深く眺めると、他にも人の名前を連想させる単語があります。「使徒信条」には「信じます」も含め「しんじ」が四回登場します。パンとカリスを供える場面では、「実り」が出てきますし、第二奉獻文の冒頭は、「まことに」ですから、「まこと」の名前を連想しましょう。他にも、今週は三位一体の主日で、叙唱には「わたしたちは父と子と聖霊の栄光を等しくたたえ」とあり、「ひとし」が登場します。「ひとし」君、せめて三位一体の主日のミサには来てほしいですね。

あと一つ紹介しますが、答えは説教では言いません。ミサの後半部分で、言い間違えたふりをしてその言葉を繰り返したいと思います。当てはまる名前の方は、「全集中」でその瞬間を待っていてください。もしその時点で私が忘れていたらごめんなさい。その場合は思い出した日、本人があずかっている時にあらためて披露します。

ここ数年、三位一体の主日には「御父」「御子」「聖霊」いずれかの特徴を取り上げていましたが、今年は福音朗読の組み立てに注目して話したいと思います。この歳になって朗読箇所の組み立てに気付くわけですからつくづく鈍い頭だと思いますが、先週の聖霊降臨でイエスは慰め多い言葉を語っておられます。

「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。」(ヨハネ 16・12-13) 私のように鈍い者は、長い年月かけて一つずつ悟るのだと思います。

あらためて福音朗読を読み返すと、イエスは「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」(マタイ 28・18)と話し始め、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(28・20)で話し終わっています。話し始めの「一切の権能を授かっている」ここですぐ分かるのは、「権能を授けてくださった御父がおられるよ」と含みを持たせて

いるということですが。

次に、話し終わりの部分「いつもあなたがたと共にいる」が成り立つには、当然聖霊の働きが必要です。今週の朗読には「弟子たちを派遣する」という小見出しが聖書本文に付けられています。弟子たちの派遣は、三位一体のあふれ出る豊かさがあることで初めて可能だということなのです。

その、三位一体の神は何を指示しておられるのでしょうか。言うまでもなく、イエスの話し始めと話し終わりに挟まれた部分が、弟子たちへの指示です。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」(28・19-20)

私はこう考えます。三位一体の神を理解するためには、三位一体の神の豊かさに触れなければなりません。それは学問研究によって行われるよりも、実践によって行われます。イエスの話し始めと話し終わりに挟まれた弟子たちへの指示を実行することで、キリスト者は例外なく三位一体の神の豊かさに触れる、三位一体の神を理解し始めるのです。

すべての人をイエスの弟子にすること。父と子と聖霊の名によって洗礼を授けること。命じておいたことを守るように教えること。この三つが、三位一体の神の豊かさに触れる「鍵」です。三つすべてを持ち合わせているに越したことはありませんが、その一つでも私たちは三位一体の神の豊かさに触れ、理解し始める鍵となるでしょう。

私の出会った人が、イエス・キリストと、キリスト者に関心を示すようになった。もちろんすべての人が良い反応とは限りません。「どうして教会はそんなに面倒なのか?」「どうして毎週教会に行く必要があるのか?」良い反応ではなくても、知ろうとしている人が私を通して現れました。ていねいに説明すれば、理解してくれるかも知れません。

中には日常の関わりを通して、洗礼を受ける人が現れるかも知れません。それは配偶者であったり、自分の両親かも知れません。長い時間がかかったとしても、父と子と聖霊の名によって洗礼を受ける人が与えられた時、私たちは三位一体の神の豊かさに触れているのです。

キリスト者としての生き方を教えること。もしかしたらこれがいちばん難しいのかも知れません。五月の連休で、教会敷地全体を観光の方に立ち入り禁止としていました。明らかに看板を立てているのに、道路に車を停めて柵を跨いで中に入り、教会堂を背に記念写真を撮ってサッと帰って行きます。「ちょっと柵を越えただけだ」「誰にも注意されなかった」たぶんこれが、日本人の平均的な感覚なのでしょう。この人たちに「禁止の看板があるのに柵を越えるのは、神様の前に正しいでしょうか?」と考えさせるのは至難の業だと思います。けれども諦めなければ、それによって三位一体の神の豊かさに触れることが出来るのです。

三位一体の神に触れる場面は、学問的な場所以上に、日々の行いの中にあります。ごく日常の場所に、三位一体の神の豊かさに触れるチャンスがある。持ち帰ってこの一週間何が出来るか思い巡らしてください。日常的な生活は、中田神父よりも信者の皆さんが余程知り抜いています。



キリストの聖体 (マルコ 14:12-16,22-26)

そこにわたしたちのために準備をしておきなさい

「すると、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準備をしておきなさい。」(14・15)キリストの聖体の祭日を迎えました。私たちが囲んでいる祭壇で用意される聖体の秘跡を、冒頭に引用した言葉をヒントに学ぶことにしましょう。

佐世保市にハウステンボスというレジャー施設があります。田平教会に転勤してからはとんとご無沙汰してはいますが、以前は年に三回、気分転換に出かけていました。それには理由があって、年間パスポートを維持していたからです。年に三回利用すれば、しっかり元が取れていました。ある年から、割に合わなくなったので年間パスポートを更新せず、それっきり行かなくなりました。

利用していた頃、施設内のちょっとお高いレストランで食事をするところがありました。皆さんご存知か分かりませんが、「上柿本勝シェフ」監修の料理が出るレストランでした。ふだん食べる食事代の三倍くらいするのでしょうか。まあそれでも、サービスも含めて値段に見合っていたと思います。

たぶん、そのレストランであっても、実際に上柿本シェフが腕を振るっているのはまれでしょう。ですから私が食べた料理は、十分教育されたお弟子さんたちが調理場に立って腕を振っていたのだと思います。もし、「本日は総料理長が直々に腕を振っていました」なんてことがあったら、それこそ幸運な話です。

さて、私たちが囲んでいる祭壇は、誰がどのような料理を振る舞ってくださるのでしょうか。司祭が料理を振る舞うのでしょうか？いいえ、違います。私たちに振る舞われているのはイエス・キリストの御体と御血ですから、私のような者が料理することは不可能です。

誰も、イエス・キリストの御体と御血を取り分けて、「取って食べなさい」と言うことはできないのです。ここではイエス・キリストが確かに食事を用意してくださり、「みな、これを取って食べなさい」「みな、これを受けて飲みなさい」と招いてくださるのです。

司祭はあえて言えば、今週の福音朗読に登場する「水がめを運んでいる男」かも知れません。あるいはカナの婚礼でぶどう酒に変わった水を宴会場に運ぶ給仕係かも知れません。祭壇に供えられた最上の食べ物を、修道者、信徒に給仕する。その忠実な僕が司祭と言えましょう。

ここまで、祭壇上の食卓のことを話しましたが、朗読台で読み上げられている「みことばの食卓」についても同じです。この朗読台で用意される食卓に並ぶ食べ物も、「神のことば」です。特徴的なのが司祭が福音朗読後に唱える言葉「主のみことば」です。皆さんはそれに対して「キリストに賛美」と答えます。

みことばの食卓の中心はあくまで「神のことば」、司祭は神のことばを何とかして会衆に届けるのが務めです。司祭それぞれの工夫をして、

神のことばが配られ、修道者、信徒を通してすべての人に届けられるようにと、日夜努力しているわけです。

ある叙階式ミサの講話で印象深い話を聞きました。司祭のミサは地上で行われる最高の活動であり、一度だけのミサであっても、そのミサがもたらす恩恵は計り知れない。もし、叙階されたばかりの新司祭が初ミサを終えてそのまま天に召されたとしても、地上での最高の活動を終えて天に召されたと言える、そういう内容でした。

振り返って私は、そこまでの意識が司祭になった当時あったのかと問うと、残念ながらそこまでの自覚はありませんでした。今は、祭壇でささげられるイエス・キリストの犠牲に、私を使ってもらっていることがどんなに尊い働きか、感じられるようになりました。そこで私たちがみな、どのような心構えでミサにあずかるかが問われてきます。

地上での最高の働きにあずかるために、どのような心構えが必要なのでしょう。少なくとも「聖体拝領の一時間前には、飲食を終えること」が求められています。ただし、これは最低限の教会の掟です。たとえば皆さんが、日本最高のシェフが直々に振る舞う料理に招待されたなら、一時間前に飲食を終えるだけで準備は事足りるのでしょうか？

私なら、どんなシェフなのか、予備知識を持って食事に備えます。また、サンダルにジャージで行ったりはしないでしょ。お財布も、仮にご招待券を持っていたとしても、持っていくと思います。これらをミサに当てはめるなら、聖堂内にある「聖書と典礼」に目を通して、今日のミサの予備知識を入れてミサに備えましょう。

服装は短パンとTシャツよりも、たとえば自分が聖書朗読をお願いされたらどんな服装で出席するだろうかと考えてみると良いでしょう。そして、お賽銭の用意です。最高のシェフが振る舞う料理のお会計は何十何円の一円単位ではないでしょう。私も一円までお賽銭を数えるのは疲れます。

十分な準備があれば、最高のもてなしの恩恵を十分に受けるでしょう。イエスが「席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準備をしておきなさい」と言ったのは、私たちがよりよい準備をして、着席することを言っているのではないのでしょうか。今日も、すべての人が食べて満足する「神の小羊の食卓」を、イエス自らが、私たちに振る舞ってくださいます。



年間第 11 主日 (マルコ 4:26-34)

イエス・キリストは身を寄せる陰、巢を作る抛り所

年間の主日に入りました。今週から「年間第 11 主日」のように単調な呼び方の主日を重ねていきます。少しでも福音朗読の学びを工夫して、記憶にとどめるようにしたいと思います。

「福音朗読の学びを工夫する」と言いましたが、韓国語で「勉強する」という単語の基本形は「공부하다」といって、日本語では「工夫する」を連想させる単語が使われています。なぜ韓国語の単語を思い出したかということ、まだ勉強を諦めていないからです。

今も NHK ハングル講座にしがみついております、韓国語でミサをささげて、皆さんが呆気にとられながらミサにあずかる。これが私の韓国語学習の最終目的であります。ミサにあずかって呆気にとられるのはあくまでも田平教会の皆さんであって、他の教会の信者ではありません。気持ちはまだ失っておりません。

さて今週のたとえば、「成長する種」のたとえでした。具体的に「からし種」のたとえば紹介されていますので、「からし種」のたとえばから学びを得ることにしましょう。

いろいろ調べてみると、「からし種」と言われている種はひょっとしたら「からし」ではない可能性があります。それはここでは取り扱いませんが、仮に「黒からし」の種だとすると、この種は成長すると2メートル半くらいまで伸びるようです。ただ、2メートル半に伸びた植物に鳥が巢を作るのかと言われると、これはこれで疑問であります。

いずれにせよ、「種の小ささ」と「成長した時の大きさ」が強調されて神の国を説明しているわけです。神の国の始まりは、あまりにも小さい。けれども、成長して陰を作るし、成長して鳥が巢を作るのです。

カンカン照りの中で、陰を作る場所がどれだけありがたいかは皆さんもよくご存知でしょう。私はボート釣りに出て、どこにも陰がない中で2時間釣りをしたりしますが、釣れなければそれはバーベキューの鉄板で焼かれているようなものです。時々通過する雲のなんとありがたいことでしょう。

鳥が巢を作ることにしても、か弱いのちである雛を安全に育てるための巢です。天敵から身を守れる場所でなければなりません。今年はツバメが教会に来ていませんが、毎年決まって、教会の南側玄関に巢を作ります。巢を作るスペースはほんの僅かですが、この場所の風を避けるためには、この聖堂のような大きなよりどころが必要なのでしょう。

さてここまで考えてきて、神の国とは何なのか。分からなくなってきました。今日皆さんに、神の国をどう示せば良いのか、頭を抱えてしまいました。ようやく出てきた答えは「神の国とは、イエス・キリストのことである」ということでした。

そう思って考えてみると、イエス・キリストはこの地上に御父から種蒔かれた神の独り子です。小さな国に過ぎないユダヤのヘロデ王から

命を狙われるほど、「土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さい」(4・31) 始まりでしたが、語られることばと一つひとつの振る舞いは、「成長してどんな野菜よりも大きくなり」(4・32)、信じる人々には陰を提供し、か弱い命を守り育てる巣を作る拠り所となったのでした。

もし、「成長する種」のたとえで言われている神の国がイエス・キリストであるなら、私たちはどう振る舞えば良いのでしょうか。一つはイエス・キリストの陰に身を置き、巣を作る拠り所とすることです。私たちが陰として身を置くのは権力や金ではないのです。巣を作る拠り所もそうです。

もう一つの振る舞いは、神の国がイエス・キリストであるなら、私たちもイエス・キリストと一緒に、まだ教えを知らない人、信仰に導かれる可能性のある人たちの身を寄せる陰、巣を作る拠り所になるということです。

田平教会は聖堂の保存修理と耐震補強に取りかかる準備を始めました。あと2年もすれば、聖堂に足場がかけられて、しばらくは聖堂が使えなくなるでしょう。しかし保存修理と耐震補強を終えれば、安全性が高まった聖堂に生まれ変わります。これまで以上に、私たちの身を寄せる陰、拠り所となるでしょう。

さらに耐震工事を終えた同じ聖堂は、すべての人にとって拠り所となるでしょう。その日はまだ来ていませんが、一つずつ段階を踏んで、生まれ変わった聖堂を祝う日が必ず来ます。これは私たちにできる証し、イエス・キリストが神の国であることを人々に知らせ、すべての人の拠り所にしてもらおう具体的な取り組みなのです。

神の国には、暑さをよける「陰」があります。弱い命が守られる「巣」を作る場所もあります。その「神の国」とはイエス・キリストそのものでもあります。イエス・キリストのもとで陰を見つけ、巣を作る場所を得ましょう。そしてイエスを知らない多くの人にも、陰を求めることが出来る、巣を作ることが出来ることを証ししていきましょう。



年間第 12 主日 (マルコ 4:35-41)

御父に信頼するイエスを現す人になろう

「その日の夕方になって、イエスは、『向こう岸に渡ろう』と弟子たちに言われた。」(4・35) 唐突とも思えるイエスの願いを掘り下げることから始めましょう。ガリラヤ湖は非常に広い湖です。南北に 21 キロ、東西に 13 キロ広がっています。日本一大きな琵琶湖と比べると面積で 4 分の 1 になります。

「夕方になって」イエスは湖の向こう岸に渡りたいと言っています。群衆を解散させるためでしょうか。しかし日が落ちてから移動することは危険を伴うでしょう。あえて危険を、信仰体験の場に選んだのでしょうか。

「向こう岸に渡ろう」と言っています。イエスはカファルナウムを活動の中心にしていたから、向こう岸はガリラヤ湖の東岸になるのでしょうか。そうすると、東西は最大で 13 キロの幅があります。13 キロがどれくらいの距離かという、平戸港から定期船が出ている的山大島港くらいの距離です。仮に、「神父さん、船外機で大島まで渡してくれ」と言われても、私でしたら「勘弁してくれ」と言うでしょうね。

なぜか？私はふだん生向港から出港しておりますが、対岸はちょうど「梅屋敷偕楽園(うめやしきかいらくえん)」です。対岸までおよそ 3 キロ、13 キロはその 4 倍以上です。3 キロの対岸でも急に雲行きが怪しくなるとか、何が起こるか分からない時があるのに、13 キロ先の対岸まで二千年前にエンジンも付いていない舟で渡るといのはかなり勇気が要ったことでしょう。

こうしたことを踏まえると、何の目的もなく「向こう岸に渡ろう」と言ったとはとても思えません。先に述べたように、危険の中で、信仰体験を積ませるためだったと考えるべきでしょう。単に危険な場面を乗り切る体験ではなく、危険な中であって、どのようにイエスへの信頼を保ち続けるか。そのために出来事が用意されていたのです。

小舟で海に出ると、自然の大きさの前に自分があまりにもか弱いと思われ知らされます。波に翻弄され、航行する何千トン、何万トンの船に怯え、時々やって来る海上保安庁の巡視船に説明責任を果たす。司祭館で大きな顔をしていても、海の上では小さな存在です。

漁師のベテランであるはずの弟子たちがうろたえるほど、湖は荒れてきました。ガリラヤ湖は周囲を山に囲まれた上に、海拔はマイナス 213 m です。300m の山から吹き下ろす風は、実際には 500m の吹き下ろす突風になり、恐ろしさで気が動転したのでしょうか。無理ありません。

弟子たちは慌てふためいているのに、イエスは艫のほうで眠っています。ここには、御父へのイエスの絶対の信頼が示されているのですが、弟子たちは自然の脅威に対処することしか頭にありませんでした。私たちが同じ場所に居合わせても、同じことになっていたでしょう。

イエスは眠っておられたとは言え、弟子たちの心配を十分ご存知だっ

たはずです。「イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、『黙れ。静まれ』と言われた。」(4・39) イエスが弟子たちの心配に寄り添ってくれたのは、弟子たちの心配をまず取り除きたかったからです。

もちろん、それだけでは終わりません。「なぜ怖がるのか。まだ信じていないのか。」(4・40) 自然の脅威に震えている弟子たちに、自然を支配しておられる方に目を向けさせ、そのお方にすべてを委ねるなら平安が得られると、身をもって示したのです。人としては、イエスも木の葉のように揺れる舟に翻弄される一人の人間ですが、神の子としては自然を支配する御父に全幅の信頼を寄せて、危険の中でも動じないのです。

一度だけ、模範を示すことが出来た場面がありました。大島崎戸が管轄だった太田尾小教区時代に、希望者を募って上五島巡礼に行きました。ところが滞在中に天気が悪化して、フェリーが欠航してしまいました。帰りの予定を延期すればよかったのですが、宿泊費がかさみます。お財布も心配だったので、瀬渡しの船を出している業者に電話したら、船を出してくれることになりました。フェリーが欠航する悪天候です。

瀬渡しの船内に入った婦人部の皆さんは、大島に帰ることが出来る喜びで浮かれていました。料理の小皿を取り出して「チャンカチャンカチャンカチャンカ」皿踊りをしています。ところが出港して湾を出た途端、船がジャンプし始めまして、頭が天井に付くくらいになりました。すると婦人部の皆さんは、手の裏を返したように「めでたし聖寵、めでたし聖寵！」と言い始めたのです。

私はと言うと、「フェリーが欠航するくらいだから、まあこんなものだろう。船長と神様に任せるしかない」そう考えて、おびえる女性部の皆さんの前で堂々とあぐらをかいて座っていたのです。慌てない私を見て、女性部はようやく落ち着きを取り戻したのです。具合が悪くならながらも、帰り着くことが出来ました。

イエスのような絶対の信頼ではなかったにせよ、イエスを知る人が誰か一人でも、周りの人の恐れや不安を取り除く「しるし」になればいいと思います。私たちは「旅する教会」であり、たくさんの人と出会い、キリスト教の信仰を知らない人にはキリストを知らせる「しるし」となることが期待されています。

イエスは御父への完全な信頼を見せて、私たちのそばで眠っておられます。ときには「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」(4・38) と言いたくなることもあるでしょう。それでも、イエスがそばにいることは間違いありません。どんな恐怖の中でも、「私はイエスが共にいてくださるから大丈夫」と言葉や態度で人々に証明できるように、勇気と力を願いましょう。

今になって考えるのですが、冬の時化の中で何年も実家と神学校を往復した五島の神学生たちは、心配そうな顔をしていた多くの乗船客にとって、安心感を覚える拠り所となっていたのだと思います。



年間第 13 主日 (マルコ 5:21-43)

イエスに出会った人になることが真の救い

B年の年間第13主日は「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」の奇跡物語です。説教の準備に苦勞する朗読箇所とは思っていませんでしたが、思いのほか苦勞させられました。もしかしたら、苦勞させられたことで、私はイエスに出会うことができたのかも知れません。

会堂長ヤイロが、幼い娘が危篤状態にあつて助けを求めに来るところから始まります。物語は途中十二年間も出血の止まらない女性のいやしがはさまれています。実は二つの出来事には関連があつて、同じ体験を積み重ねるためのものです。

十二年間出血の止まらない女性は、「この方の服にでも触れればいやしていただける」(5・28)と考えてイエスに近づき、服に触れると確かに出血は止まりました。この女性にとっての目的は十分果たされたのですが、イエスはそれでも女性を探しています。イエスにとって女性に積み重ねたい体験は、まだ終わっていないからです。

女性が勇気を出して名乗り、イエスから声をかけてもらいます。イエスを信じる人になってイエスと出会うこと。それが女性に積み重ねたい体験だったのです。イエスとの出会いが信仰に変わり、「救われた」と実感してこれから生きていく。その体験を、この女性は積んだのです。

会堂長ヤイロは、きっとその光景を目に焼き付けたでしょう。すでにイエスを信じ始めていましたが、試練を受けることになります。会堂長の家から人々がやって来て、「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」(5・35)と、人間的な希望を断ち切られてしまうのです。

会堂長にとって、娘が回復することがイエスに近づいた目的ですから、人間的にはもうイエスに期待することは何もありません。そんなヤイロにイエスは「恐れることはない。ただ信じなさい」(5・36)と言いました。イエスにとって会堂長ヤイロに積み重ねたい体験は、まだ終わっていないからです。

「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。」(5・39)これに対し周囲の人々はイエスをあざ笑います。人々の嘲笑は、会堂長ヤイロにとっても試練です。これ以上イエスを信じ続けることができるだろうかと、迷いやためらいが生じてても不思議ではありません。

しかしイエスはヤイロの娘を生き返らせ、父親に返してくださいました。「タリタ、クム」「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」(5・41)。ここでヤイロは自分が最初に持っていた目的にたどり着いたのでしょうか。

それだけではないと思います。会堂長ヤイロは、娘の回復という目的のその向こうに、たどり着いたのです。イエスとの出会いが信仰に変わり、「救われた」と実感してこれから生きていく。その体験を、ヤイロは積んだのです。ここまで、会堂長ヤイロの物語とイエスの服に触れ

る女性の話が、イエスによって同じ体験を積ませるための物語であることが理解できたと思います。

さて私たちに当てはめてみましょう。イエスはすべての人に、同じ体験を積ませようと考えておられます。イエスの服に触れるだけの出会いではなく、自分の娘を返してもらっただけの出会いでもなく、イエスとの出会いが信仰に変わり、「救われた」と実感してこれから生きていく。その体験を、すべての人に与えようとされるのです。

私の父は肺がんで亡くなりました。71歳でした。担当した医師はカトリック信者でした。「余命半年でしょう」と告知を受けて、その通り半年で旅立っていきました。最後の半年、どのような精神状態だったか知るよしもありますが、担当した医師には「自分は神様を信じているから何も怖くない」と、それだけ伝えたそうです。実際にはそれだけではなかったと思いますが、根底にある覚悟は揺らぐことはなかったのでしょう。

私なら「余命半年です」と担当医に言われたら食ってかかるでしょう。「そんなはずはない。認められない」と。しかし私の父は、自分のことだけ考えていたのではなく、司祭となった息子のためにも、最後の教えを残そうとしていたのだと思います。「私は神様に会ったから、恐れずに自分を委ねることが出来る。」もしそうだとしたら、私は父親の最後の半年を通して、イエスと出会わせてもらったのだと思います。

伊王島から月に一度、病院を見舞いました。刻々と姿が変わっていく中で、ついに一度も「父を取り上げないでください」とは祈りませんでした。「信仰の道から逸れないように、最期まで歩ませてください」その思いだけでした。5月31日の命日が来るたび、祭服を着てイエスに触れるだけではない、私を救ってくださったイエスに出会わせてくださった父に感謝しています。

イエスはすべての人に、「ご自身と出会って救われた」という体験を積ませようとしています。最終的にはそれが人々に証しすることの出来る唯一の体験です。これまでの人生を振り返って、人に証し出来る救いの体験、信仰の体験に思い当たるでしょうか。

イエスが必ず、この体験をすべての人に積ませようとしているのであれば、それは必ず見つかるはず、あるいは必ず体験するはずです。ですから私たちは、人に証しするだけの救いの体験を積んで、必ず宣教する人になれるのです。



年間第 14 主日 (マルコ 6:1-6)

イエスが示された覚悟が、マトラ神父の覚悟になった

年間第 14 主日の福音朗読、「ナザレで受け入れられない」という箇所が選ばれました。実は預言者が受け入れてもらえなかったというのは、聖書の中ではよくあるテーマです。この出来事を、すぐそばにいたはずなのに一言も発していない「弟子たち」に目を向けるきっかけとしましょう。そこから、私たちにとっての教訓を得ることにしましょう。

土曜日から、梅雨末期の本格的な雨となりました。今日 7 月 4 日に、マトラ神父様の帰天百年を記念する一連の行事が紐差教会で行われます。私たちも「マトラ年の祈り」を一年間唱えることでこの日を準備してきました。当日は午前中田崎墓地に集まってロザリオを唱え、午後からは教会聖堂で記念ミサが大司教様をお迎えして行われます。そこでマトラ神父様についても、朗読箇所に結びつけてみたいと思います。

マトラ神父様はフランス・リヨン教区のファルネイという小さな町に生まれました。司祭になってすぐに日本宣教に送られ、その後 40 年間、平戸の宣教司牧に身を捧げ、一度も帰国することなく、田崎の墓地に眠りにつきました。100 年前の話ですから、一度帰国してしまえば、二度と日本に戻ることは無かったかも知れません。そのため自ら退路を断って、日本で生涯を全うします。

私は今週の福音朗読、ほとんど表に現れない「弟子たち」に目を向けてみようと考えました。それまでのガリラヤでの活動を考えれば、イエスが郷里のナザレでも、ものすごい歓迎を受けるだろうと考えたかも知れません。もっと言うと、自分たちがいつか故郷に錦を飾る日が来る、そんなことまで想像したかも知れません。

ところが現実には完全に期待を裏切るものでした。故郷に錦を飾るところか、ナザレの人々は「生まれも育ちも取り立てるほどのものも無いのに、あなたは何様のつもりか」という反応でした。ナザレの人が判断の拠り所にしたのは、わずかな血縁関係の知識と、生い立ちだけでした。

弟子たちは、この時点で自分たちが描いた淡い期待を捨てなければなりません。 「ひょっとしたら故郷で偉い人扱いされる」そんな夢は、完全に打ち砕かれました。それだけでなく、「このままイエスに付いて行くべきだろうか」という不安も生じたかも知れません。

イエスは表に現れていない弟子たちのこうした不安を、十分承知していたことでしょう。そこであえて退路を断ち、ご自身がこれから歩む道を示そうとされます。「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」(6・4)。中田神父は「ここまで言う必要があるのかな」と思ったりしますが、これは弟子たちにも向けたイエスの決意表明だったのでしょう。この後イエスは各地を回って宣教します。

イエスは、ナザレの人々をあえて突き放す形で、退路を断ちました。マトラ神父は、二度と戻らないことで、退路を断ちました。「不退転の決意」という言葉がありますが、イエスに従う弟子たちも、マトラ神父

の宣教司牧で導かれた平戸の神の民も、この不退転の決意に背中を押され、「いただいた信仰の恵みに恥じない生き方をしよう」と心に決めたのではないのでしょうか。

実際、イエスの弟子たちは今週の朗読箇所直前、つまり先週の福音朗読で、治る見込みのない出血症の女性のいやしと、死の宣告を受けた会堂長ヤイロの娘のよみがえりを目撃し、「ただひたすら、イエスを信じる」という心の準備をさせてもらったのでした。

そして今週、イエスが故郷のナザレで受け入れられない現実を突きつけられ、「ただひたすらに信じる」その決意をいっそう固めます。その上で来週の朗読箇所では、二人ずつ組みにして宣教に派遣されていくのです。「ただひたすら、イエスを信じる」この態度に少しでも狂いがあれば、弟子たちの派遣は不可能だったでしょう。

非常によく練られた段階を経て、弟子たちは宣教する者へと準備されていたのです。あえて弟子たちの様子が場面の背後に回されていたのは、「ただひたすら信じる」という準備の様子を暗示していたのかも知れません。

マトラ神父に育てられた平戸の神の民はどうだったのでしょうか。いくつかの例を紹介します。今回マトラ神父帰天百年に合わせて用意された記念誌に、紐差修道院のシスターの手記が載っています。その最後に、マトラ神父様が晩年、「自分は40年間身を捧げてきた紐差に骨を埋めるから、愛苦会の会員達が世の終わりまで祈り続けてほしい」と願ったそうです。

それに応じてシスターは、「毎日、貧しい祈りを捧げている」と書かれていました。一日も忘れることなく祈るのは、そのご恩を一日も忘れたことがないからです。退路を断って、生涯を捧げたマトラ神父様の熱意は、シスターに確実に伝わったのでした。

もう一つ、法人司教区設立80周年で記念講演をされた当時のパリ外国宣教会日本管区長の文章の中に、「マトラ神父が来た時の平戸地区の信者は3500人だったが、彼が亡くなられた1921年には8300人ほどになり、共同体は倍に増えたのです」と紹介しています。

マトラ神父様は「収穫は多いのに、働き手が少ないのです。父よ、収穫のために働き手を送ってください」（マタイ9章37節38節参照）をご自分のモットーとしていました。財産が二倍に増えるということは人生の中でそうあることではありません。マトラ神父様は、平戸の神の民を二倍に増やして、神様の財産を二倍にしたのです。皆さんはいわば、退路を断ってご自身を捧げたマトラ神父様の「宝物」なのです。

祈りを唱えていると、この祈りは私のことを念頭に用意されているのではないか、と思うことがあります。マトラ神父様がモットーにしていた祈りをここであらためて唱え、「この祈りは、他人のための祈りではなく、私のために用意された祈りなのだ」と気付かせていただきましょう。では皆さん一緒に唱えましょう。「収穫は多いのに、働き手が少ないのです。父よ、収穫のために働き手を送ってください。」



年間第 15 主日 (マルコ 6:7-13)

家族

今週の福音朗読は「十二人を派遣する」という場面が選ばれました。この派遣の箇所、しばしば私自身が派遣されてきた歩みを思い出させます。また、一週間遅れになりましたが、7月3日中田神父の聖トマスの霊名を皆さんにお祝いしていただけることに感謝します。

私は助任司祭として二つの教会に、主任司祭として四つの教会に赴任してきました。「二人ずつ組みにして」(6・7)という派遣ではありませんでしたが、「杖一本のほか何も持たず」(6・8)の通り、予備知識も持たず、変な思い込みも持たずにどの教会にも赴任しました。

朗読で言われている「杖」は、当時夜道で身を守る唯一の道具であったし、羊飼いの身分を表すしるしでもありました。するとイエスが持つのを許可した「杖」は、「他は手放せても、これだけは手放せないもの」ということでしょう。そういう意味では、私の「これだけは手放せない一本の杖」は「大司教様の任命書」だったかも知れません。

他のもの、書物や乗り物や身の回りの品は、どんなに高価な物でも手放そうと思えば手放せる品物でした。いちばん感じたのは、釣り道具は土地が変われば以前のものはほとんど役に立たないということです。

「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。」(6・10)一度だけ、この戒めに背きました。伊王島の馬込小教区に赴任してすぐ、司祭館を建て替えてしまったのです。大島崎戸の太田尾小教区を出るときに馬込小教区の辞令を受けましたが、早速地区のある先輩から「あそこの司祭館は建て替えないといけないよ」と聞かされました。

しかもその先輩は(すでに亡くなっていますが)口だけでなく、帯封のついた建設資金も渡してくださいました。馬込教会司祭館は今思うと「建て替えありき」で住み始めたのでした。司祭館は建て替えましたが、もちろん旅立ちのその日までとどまったことには間違いありません。

「十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。」(6・12-13) 私はと言うと、悪霊を追い出せたかは分かりませんが、「あの病院に入院したら退院は難しい」と言われた入院患者を長年見舞って、退院の日を見ることが出来たケースもありました。もう一方の「油を塗って多くの病人をいやした」これは確かです。イエスに権能を授けられて働いたこの三十年で、何度も実感しました。

何かしらの結果を出したとは思いますが、しかしそれは、いつかは司祭の手を離れていくものです。なぜなら、司祭はいつも「その土地から旅立つときまで」を全力で働いているからです。もし何らかの結果が出たとしたら、それは権能を授けてくださったイエスのおかげであるし、働きの報いは信徒皆さんのものです。

百周年の報いも信徒の皆さんのものだし、新型コロナで幸いにして

感染者を出さずにここまで来たのも役員を始め信徒の皆さんが覚悟を決めて協力してくれたからです。そして許されることなら、耐震補強工事も見届けたいと思っています。幸い田平教会の役員は、これまで赴任してきたどの小教区よりもすぐに動き、よく働く方々です。平戸地区でも自慢できますし、教区でも指折りの役員たちだと思っています。

ところで、「派遣される司祭と、教会共同体の関係」について最後に考えてみましょう。修道者の派遣も、同じように当てはめながら考えてほしいと思います。派遣される司祭は、さらに大きな器に支えられて派遣されていきます。その器とは、教会共同体です。

中田神父は小学校を卒業して神学校に入りました。それから14年間、「鯛ノ浦教会」という教会共同体に支えられてきました。大神学校に入ってから、私一人の選んだ道ではなくなってきました。小教区報で神学校の様子をお願いされて書くと、時折信徒の人から「神学生さんの書いた記事を読みました。応援しているので頑張ってください」と言われることがありました。

さらに上級生になってスータンを着る頃になると、巡回教会で子供の黙想会のお手伝いをして、巡回教会の信徒から「お祈りしているので頑張ってください」と言われることもありました。本当は休暇を終えて神学校に戻るとき、「帰りたくないなあ」と思うこともありました。そんな時に思い出していたのは、鯛ノ浦教会、また巡回教会で声かけをしてくれた「あの人この人」のことでした。以前話した「タクシー代」を手渡してくれた人もその中に含まれています。

この「鯛ノ浦教会の共同体」が、神学校への「派遣」に背中を押してくれた、「器」でした。そして司祭となって、初めての場所に赴任するときの「支えとなった器」でした。この支えとなってくれる器は、派遣を繰り返し受けていく中で、さらに大きな器になっていきました。二度目の助任司祭の時は鯛ノ浦教会と浦上教会という器に支えられて滑石教会に派遣され、初めての主任司祭の時は故郷の鯛ノ浦教会と、助任としてお世話になった浦上教会、滑石教会の支えのもとに、主任司祭の第一歩を踏み出したのです。

田平の神の家族も、これまでたくさんの司祭と修道者を日本の教会に送り出してきました。田平の神の家族は、出身司祭修道者たちが新しい派遣を受ける度に、支えとなっている大きな器、その原点なのです。

私は、派遣を受けるたびに、これまでお世話になった教会共同体の支えを思い出します。個別の信徒の名前は思い出せなくなるかも知れませんが、大きな支えを背中に受けて今があることを知っています。皆さんも、弟子を派遣する福音朗読を目にするとき、田平教会が支えている人が今も元気で、神の国のために働いてくださいと、お祈りをしてほしいと思います。派遣の後ろには、教会家族の支えが必ずあるのです。



年間第 16 主日 (マルコ 6:30-34)

「イエスの教え」を通して人々に注がれる神の憐れみ

「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」(6・34) 弟子たちが、初めての宣教活動できっと疲れて帰ってくると思い、イエスは戻ってきた弟子たちに「人里離れたところへ行って、しばらく休むがよい」(6・31) とねぎらいます。

しかしご自身は休むこともせず、ひっきりなしにやって来る群衆のお世話をし続けました。「いろいろと教え始められた」(6・34) というのがイエスのなされたことだったのですが、なぜ「教えること」を選ばれたのでしょうか。

集まってくる群衆は、もしかしたら何か奇跡をしてもらえんと思っ
て集まっていたかも知れません。そんな群衆にあえて「いろいろと教える」というのは遠回りのようにも思えます。

「あなたがたの中に、魚を欲しがる子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。また、卵を欲しがるのに、さそりを与える父親がいるだろうか。」(ルカ 11・11-12) 魚を欲しがっているなら、魚を与えるのが手っ取り早いと言えるかも知れません。

しかしこのようにも言われています。「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」(同 11・13) 今回の朗読で「いろいろと教え始められた」というのは、目の前のものも大事ですが、もっと大切な物を与えようとしておられるのだと考えることもできます。

「教える」「教育する」ということが大切なのはだれもが理解できることです。以前ある映像を見たとき、教育が人間だけでなく動物でもおこなわれているのには驚きました。神様は、教えることで「目の前のもものよりも大切な物を与える」という本能を、動物にも与えておられるのだと、映像を見て思いました。

その映像とはこういうものです。大人の象が、水飲み場からなかなか上がれないでいる子どもの象に陸への上がり方を教えている映像でした。本当は長い鼻を使ったりして子どもの象に力を貸せば、簡単に水の中から引き上げられるのに、大人の象たちがわざわざ、足の着き方、体重のかけ方を何度も何度も実演して、その子ども象が自力で上がれるように教えていたのでした。

私も、その映像を見ながら「そうだよな」と理解しました。水飲み場からなかなか陸に上がれない。そういう場面は今後何度も経験するかも知れません。そのたびに大人が助けてあげるわけにはいかないのです。今、自力で陸に上がれるようになっていなければ、将来溺れて死んでしまうかも知れないのです。

本能で生きている彼らには、「教えることが救うこと」「陸上への

上がり方を教えることが本当の意味で助けること、救うこと」だったのです。それを大人の象たちは痛いほど知っているのです、決して甘やかさず、自力で這い上がる方法を、何度も実演して教えていたのです。

イエスも、目の前のことだけにとらわれて群衆に深い憐れみを示したのではありませんでした。「深い憐れみ」は、目の前のことで終わらず、羊飼いの声を聞き分ける羊になるように導く憐れみです。この場面でも、父なる神は決して群衆を見捨てたりはしない、そんなことを教えておられたのかも知れません。

「なぜあの時こうしてくれなかったのか」そう言って相手を責める人がいますが、その人が自分を本当に心にかけている人なら、先を見据えて手を貸してくれるでしょう。神のなさり方も同じです。人の心に深く刻まれる教えを通して、その人の生涯にわたって羊飼いであるイエスの導きを感じられる。そのためにいろいろと教えてくださるのです。

7月4日、マトラ神父様の帰天百年祭行事が行われました。今年の小中学生の黙想会で、「マトラ神父様の働き」を材料にして黙想会を開こうと思っています。マトラ神父様がその時手がけた取り組みが、百年後の今も受け継がれています。マトラ神父様も、当時の平戸の神の民が「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」のです。

黙想会は、特定のことをテーマにして学ぶとても良い機会です。マトラ神父様の、平戸のクリシタンたちに対する深い愛が今の子どもたちにも理解されて、将来、神の国のために良い働きができる人に育ててほしいと願っています。いつか、「小学生のときにマトラ神父様のことを学んだなあ」と思い出してくれて、その時あらためて神父様の働きを振り返ってくれたら幸いです。



年間第 17 主日 (ヨハネ 6:1-15)

(再掲) 大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年

(本日、「祖父母と高齢者のための世界祈願日」が設けられていて、教皇フランシスコのメッセージを抜粋して読み上げました。そのため、2015年浜串小教区での説教を再掲して、今週のメルマガ・ブログ記事と致します。ご了承ください。)

年間第 17 主日 B 年の福音朗読はヨハネ福音記者が描く「五千人に食べ物を与える」場面が選ばれました。出来事そのものは共観福音書と呼ばれる「マタイ・マルコ・ルカ福音書」にも記されています。ヨハネは共観福音書とは異なる捉え方を持っています。出来事を「しるし」として捉え、イエスへの信仰を増し加えるように招くのです。

さて子供たちのドッジボール大会は本当に残念でした。対戦相手が青砂ヶ浦と桐だったのでわたし自身は最初から戦意喪失だったのですが、子供たちはむしろやる気満々だったようです。練習の成果を発揮させてあげたかったのですが、台風ではどうにもなりません。

中止になったので話しますがわたしの心の中では、福音朗読に登場する弟子と似たような言葉が響いていたのです。「ここに大会に参加できる子供が 8 人います。けれども、8 人ではどうにもならないでしょう。」10 人いて本来のチーム、8 人では歯が立たないと思っていたのです。

福音朗読の場面は、もっと深刻な場面だったと思います。男の人が五千人いて全体ではそれ以上ですから、「大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年」を弟子たちが見つけたとしても、それは焼け石に水、何の足しにもならないと考えるのは無理もありません。

ところがイエスは、「足りない状況」「何の役にも立たない状況」を確認してから動き出します。イエスが望めば、フィリポに「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだらうか」(6・5)と尋ねなくとも動くことはできたはずですが、弟子たちから希望の持てる返事が返ってくるはずがないからです。

それでも、イエスは弟子たちの返事を確認してから動き出しました。なぜそうなさったのだろうかと考えます。わたしはこう考えました。「大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年」とは、イエスのことだったのでないでしょうか。

物語としては少年という形になっていますが、イエスが少年に「そのパンと魚を貸してくれ」と言った様子もありませんし、弟子たちに「その少年をこちらに来させなさい」と指示した形跡もありません。いつの間にか少年のことは物語から消えていますから、少年がいたかどうかはさほど重要ではないのでしょうか。

大事なものは、少年という姿が何を意味しているかということかもしれません。大人に対しての少年ですから、力の足りない存在、未成熟・未完成の存在、無力な存在を意味していると思います。そして、わたしが考えたように、イエスは無力な存在であるかのように地上での最期を遂げられましたから、物語に登場する少年の可能性もあるわけです。

イエスが動き出し、弟子たちがイエスの働きに協力して、五千人の群衆は食べ物を得ることができました。そしてこのことを、ヨハネ福音

記者は「しるし」と見えています。どんなしるしでしょうか。それは、イエスが天からのまことのパンであるというしるしです。

しかし、イエスが天からのまことのパンであるということを示すだけでしたら、「大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年」を物語に登場させる必要はなかったように思います。フィリポの「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」(6・7)という判断だけで、切迫した状況は十分理解できるからです。

あえて少年を登場させているのは、パンの奇跡に留まらない、神の救いのわざの「しるし」という意味があるからではないでしょうか。イエスは五千人に食べ物を与える天からのまことのパンという存在にとどまらず、全人類のまことのパンとなられるお方である。しかも少年という無力な存在となつて、救いを成し遂げようとしておられるのです。

実際、イエスの救いのわざは、全人類に対しての「大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年」という意味合いがあると思います。神の独り子が、全人類を救うために十字架にはりつけにされます。何千年何万年という歴史の、約三十数年の働きで全人類を救います。

ユダヤの国のごく限られた場所での三十数年の働きで、全人類に天からのいのちのパンを与えてくださるのです。この壮大な救いの計画の「しるし」として、「大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年」さらにその少年で暗示されている無力な姿で死んでいく神の独り子イエスが物語に登場しているのではないかと思います。

弟子たちは、この少年を無力な存在と考えました。しかしイエスは、その無力な存在を使って、神の驚くべきわざを行います。「人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった」(6・13)のです。イエスご自身、無力な存在として地上の最期を迎えましたが、全人類に天国の門を開いてくださったのです。

注意すべき点があります。群衆は「自分を王にするために連れて行こう」としました。イエスを利用しようとしたのです。無力な存在を使って五千人に食べ物を与えたイエスを、手放したくなかったのです。

わたしたちもこの点は十分注意しなければなりません。と言うのは、教会を人々にパンを食べさせる道具として利用しようとする見えない力は今でも働いているからです。わたしたちが人々の心を満たしたわけでもないのに、教会は観光の目玉になるとか教会でいやしをいただきましようと言ってすり寄って来る大勢の人々がいるのです。

教会に来ていやされるのは、その人がイエスと出会ったからです。教会に引きつけられるのは、隠れておられるイエスに気付いたからです。「イエスは、(中略)ひとりでまた山に退かれた。」(6・15)だれかを教会で案内するとき、隠れておられるイエスに導いてあげて、隠れておられるイエスの声に耳を傾けさせる必要があります。

そこにいやしと慰めがあるからです。そのためには、わたしたちも常に、この聖堂の中に隠れておられるイエスの声に耳を傾ける努力が必要です。蝉の鳴き声中でも心を沈め、心に語りかけるイエスの言葉に耳を澄ます。そのための心の静けさを、このミサの中で願い求めましょう。



年間第 18 主日 (ヨハネ 6:24-35)

家族

3年前の説教を引っ張り出して、もう一度取り上げることにしました。福音朗読で群衆がイエスに問いかけ、イエスが群衆に答えるやり取りが出てきます。「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」(6・34)「わたしが命のパンである」(6・35)。群衆とイエスの、しりとりのような言葉のやり取りはまったく噛み合っていません。この噛み合わないやり取りから今年も学びを得ましょう。

小教区報「瀬戸山の風」に書きましたが、墓地写真台帳を作成することにしました。これからのことを考えると、子や孫の世代が皆、墓地の場所を正確に記憶し続けているとは限りません。お墓の場所を調べてもらって墓参りをする。そんな事態が近いうちにやって来るかも知れません。

そこで、お墓に無事たどり着けるように台帳を作成することにしました。「瀬戸山の風」には来月も墓地写真台帳のことを書くつもりですが、150基ほど取りかかった時点で、すでにいくつか問題点が生じております。

たとえば、昔の墓のことです。石材店に建ててもらった墓ではなくて、レンガくらいの大きさの石をいくつも寄せて作った墓があります。これが誰の墓なのか、写真を撮影しただけでは全く分かりません。他にも、こけが生えてしまって名前が読めなくなっている墓もあり、これは困難な作業になるな、と感じながら進めております。

さて群衆とイエスの噛み合わない対話の最後はこうでした。「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」「わたしが命のパンである」これは、イエスが招く場所にたどり着けない人間の、変わらない姿なのかもしれません。

多くの人がいろいろな時代、いろいろな場面で「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と問いかけるのですが、考えの及ばない私たちは、命のパンであるイエスにたどり着けないのです。

ミサの始めにお知らせしましたが、京都教区の名誉司教であったライムンド田中健一司教様が93歳でお亡くなりになりました。私は全く面識がありませんが、愛媛県宇和島市で生まれ、高松教区の司祭となりまして、司祭生活銀祝のときに京都教区の司教に選ばれ、以来21年間司教職を全うしました。

私がすぐに考えるのは、愛媛県で生まれ育った人にとって、京都教区の司教を務めるというのは相当困難な職務ではなかったか、ということです。同じことは、大阪の前田枢機卿様、広島の白浜司教様にも当てはまります。全く畑違いの教区で、どのように職務を全うしたのでしょうか。

イエスに近づくすべての人が、イエスからのパンを得ようとします。真剣に探し求めている人もいますし、見当違いなその場限りのパンを求

める人もいます。司教としての召し出しを受けるような人は特に、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と、日々真剣に願い求めていることでしょう。

それに答えてイエスが、「わたしが命のパンである」と司教職という答えを示した時、きっと驚いたに違いありません。なぜ私が司教職なのですか。なぜ、自分の教区ではなく畑違いの教区なのですか。誰でも自分の理解を超えることは怪しく思うものです。そもそも受け入れられる内容のものしか、私たちは想像し得ないからです。

もしも、予期せぬ別の答えだとしたら、それを受け入れることができるでしょうか。私たちはか弱い人間なので、イエスの示す答えと噛み合わないことがあります。得るわけです。「自分はそういう答えを考えていませんでした」と。

では「予想と違う」と言っている私たちと「わたしが命のパンである」と言われるイエスと、どちらに合わせるべきでしょうか。私たちがイエスの答えを驚き怪しまないために、次のような心構えが必要です。「イエスが与えてくださるものなら何でも受け取ります。」パンをくださいと願う私たちにどんな答えが示されたとしても、私たちは受け入れる。そんな心構えが必要だと思います。

イエスの示すパンが「本当の意味でパンとなる」そのためには、受け取る人間のほうが変わる必要があります。イエスが示すものを、「パン」として受け入れなければ、それは「命のパン」にはなり得ないからです。これがイエスの示された答えなのだと、謙虚に受けとめなければ、「パン」は人間の命に変わることができないのです。

イエスは集まった群衆にご自身をパンとして示しましたが、群衆はイエスを「命のパン」として受け入れることが出来ませんでした。群衆は、命のパンを受け取るために自分自身が変わる必要がありましたが、最後まで変わることができなかったのです。

イエスは命のパンとしてご自身を私たちに与えてくださいます。それが癒やしの奇跡を与えている姿であるか、十字架上で命をささげている姿であるか、私たちは選べません。「イエスが与えてくださるものなら何でも受け取ります。」そう心に決めましょう。どの場面のイエスであっても、それは私たちに必要なものを与えてくれる命のパンなのです。



年間第 19 主日 (ヨハネ 6:41-51)

イエスのもとに来る→信じる→肉を食べ血を飲む(1)

年間第 19 主日、来週の聖母の被昇天、再来週の年間第 21 主日を、繋がりのあるテーマで説教してみたいと思います。その繋がりとは、「イエスのもとに来る」「イエスを信じる」「イエスの肉を食べ、イエスの血を飲む」この流れで考えるということです。

先週初金曜日に、病人訪問に回りまして、暑さ対策に飲み物をちゃんと用意しなければと、冷蔵庫を開けました。運転中にペットボトルのキャップを回すのは至難の業なので、飲み口にストローが付いた別売りのキャップをはめて用意しました。

冷蔵庫を開けると、「しそジュース」と炭酸水が入っています。「おー、シュワシュワーっとしておいしそうだなあ」と思い、ペットボトルに「しそジュース」と炭酸水を詰め、出発しました。「炭酸入りのしそジュースはさぞうまかろう。」そんな想像を膨らませて出かけたのです。

病人訪問はいつも軽トラックで回っています。一軒目は県道沿いの個人宅です。二軒目は山の中のぼつんと一軒家です。二軒目に向かう頃にはさすがに喉が渇きまして、楽しみにしていた「しそ炭酸ジュース」のキャップに手をかけました。キャップは「パチッ」と音がして開いて、ストローが飛び出すので、運転中でもラクに水分補給ができます。いつも通りに「パチッ」とキャップの音がしました。

すると、何ということでしょう！それまで軽トラックがガタゴト揺れていたためにペットボトルは炭酸が膨張していました。飛び出したストローから勢いよく「しそ炭酸ジュース」が車の中であふれ出し、私は海外の表彰台でよくあるシャンパンファイトのように、大量の「しそジュース」を浴びたのです。飲み口が狭いストロー形状だったために想定外のことが起きたのでした。楽しみにしていた「しそ炭酸ジュース」は、結局一口しか飲めませんでした。

福音朗読に戻りましょう。三週連続で見渡す最初の一週目は、「イエスのもとに来る」というテーマです。イエスのもとに来ることくらい、朝飯前ではないか。皆さんはそう思うのでしょうか？今週の朗読箇所ではイエスはこう言います。「つぶやき合うのはやめなさい。わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。」(6・43-44)

自分の力で、自分の理解力で、イエスのもとまで来ることができるはず。多くの人がそう考えています。しかし実際は、「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない」のです。

田平教会には毎年数え切れないほどの観光客が訪ねてきます。ステンドグラスがきれいだ、レンガ造りの聖堂が見事だ、いろんな驚きと感嘆の声を上げて帰りますが、その中の誰も、信仰に導かれる人はいません。ただの一人もいないのかと言われれば分かりませんが、時々そうい

う人が現れるのであれば、今ごろは洗礼の勉強会で大忙しのはずです。観光客が肉眼で見るものは私たちが見るものと同じはずですが、私たちのように祭壇に近づき、聖書のみことばに近づくことはないのです。

私が先ほど引用したみことばは、ある場面で頻繁に唱えたり耳にしたりしていますが、何の場面か思い出せるでしょうか？「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。」

ここまで言えばたいいてい人は思い出すでしょう。これは、葬儀ミサの告別式の中で繰り返し唱えている言葉です。亡くなった人は、自分の意思でイエスのもとに来ることはできません。御父が引き寄せてくださって初めて、イエスのもとに行くことが可能なのです。

私たちは自分の足でミサに来たと考えています。自分の意思で教会に来たと考えています。教会に来るか来ないかを決めたのは自分だと考えています。果たして本当にそれだけでしょうか？自分の意思でミサに行きたいと思っている人すべてが、ここに集まることができたのでしょうか。あるいは、ミサに行きたくないと思っている人はすべて、ここには来ていないのでしょうか。

そうではないと思います。私たちは何らかの形で、御父に引き寄せられて、御子イエスが祭壇上でささげるミサに与れているのです。私たちがみことばと御聖体まで近づくことができているのは、恵みによるものなのです。恵みは、私たちの努力の対価ではありません。完全に無償で与えられているものです。私はその恵みに感謝しているのでしょうか。

ミサに参加したいのに参加できない人がいる中で、私はこのミサに参加しています。これが恵みでなくてなんでしょうか？当たり前のように思っていること、朝起きて夜眠りにつくこと、そばにいる人が今日もそばにいてくれていること。あらためて感謝の気持ちを表してください。今週のテーマである「イエスのもとに来る」とは、ここまで踏み込んで近づくことです。

「行こうと思えば行ける」「しようと思えばできる」それは何の言い訳なのでしょう。私には、捨てられない何かがあるのと言い訳しているようにしか見えません。これまで捨てきれなかった何かを自ら捨てなければ、イエスのもとに来ることはできないのです。

今オリンピックが開催中ですが、一つのもので得るために、参加している選手達はどれだけ多くのもを捨ててきたことでしょうか。3年後、4年後には過去の栄光となるかも知れないのに、ただ一つのものためすべてを犠牲にして準備します。

「イエスのもとに来ること」は、私の力、意思だけではたどり着けません。この祭壇に、このみことばの食卓に触れる人は、父なる神の恵みによって引き寄せられた幸いな人たちなのです。心から感謝しましょう。恵みに気付いて感謝できる人こそが、次の週に取り上げる「イエスを信じる」人へと導かれるのです。



聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

イエスのもとに来る→信じる→肉を食べ血を飲む(2)

聖母の被昇天、この日は終戦記念日、そしてカトリック平和旬間の最後にあたります。一人ひとり、世界平和・社会の平和・家庭の平和のために祈りましょう。今日お祝いしている聖母マリアは神によって天に上げられた最初の人物と言えます。私たちはマリアに与えられた榮譽に目を留め、母マリアを鏡として生きることにはしましょう。

先週から、三週連続で共通のテーマを取り上げることにしていました。「イエスのもとに来る」「イエスを信じる」「イエスの肉を食べ血を飲む」という一連の流れです。先週は「イエスのもとに来る」ということに注目しました。今週は「イエスを信じる」ということを中心に考えてみたいと思います。

聖母マリアは、生涯をイエスへの信頼の中で過ごされた方です。先週は「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。」(ヨハネ 6・44) このいえすのみことばを強調しましたが、マリアは常にイエスを信頼していましたので、いつもイエスのもとに来るお方でもありました。私たちは御父に引き寄せられてイエスのもとに来るのですが、マリアはいつもイエスのそばにいる、そういう方でした。

聖書の箇所を読む限り、マリアのイエスへの信頼は一瞬も揺らぐことはありませんでした。イエスのもとを片時も離れたことがないので、イエスを信じる心も決して変わることはありませんでした。神殿礼拝の際にイエスを見失い、三日後に見いだした時にも、母マリアのイエスを信じる心は変わることなく、出来事の意味が示されるまで、心の中で思い巡らしたのでした。

もっと言えば、母マリアは十字架上でのイエスの出来事を最後まで見届けましたから、十字架による救いに最初にあずかった人の一人だったのです。私たちはミサの形で、十字架によるイエスの救いの働きに預かりますが、母マリアはそれよりも早く、救いの恵みにあずかったのではないのでしょうか。

すると、「イエスのもとに来る」「イエスを信じる」「イエスの肉を食べ血を飲む」この三つの出来事は聖母マリアの生涯の中で実現していた、と言えるでしょう。聖母マリアは幼子イエスを神殿に奉獻する時から、「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」(ルカ 2・35)と預言を受けていました。ですからマリアの中では、私たちが取り扱う三つは同時に存在し、三つを生涯を通して実現していたのです。

私たちは聖母マリアのように三つが同時に存在することはできません。それでもマリアを模範とし、イエスのもとに来るたびにイエスへの信仰を呼び起こし、感謝してイエスの御体と御血に近づきます。イエスを遠くから信じるという道は存在しません。日々、イエス・キリストをより近くに感じる生活を心がけましょう。マリアを模範とする生き方が、イエスに近くいてイエスを信じるための最も近道となるはずで



年間第 21 主日 (ヨハネ 6:60-69)

イエスのもとに来る→信じる→肉を食べ血を飲む(3)

三週連続で共通のテーマを掘り下げてきました。「イエスのもとに来る」「イエスを信じる」「イエスの肉を食べ血を飲む」このテーマも今週で完成します。イエスのもとに来て、イエスを信じたなら、私たちはミサの中でイエスの御体と御血にあずかることができます。

ミサの中でイエスの御体と御血（ほとんどの場合御血の拝領は司祭だけですが）をいただくのは、私たちがふさわしかったからではなく、イエス様からの溢れる愛のおかげです。神が私たちにくださる溢れる愛を、私自身の体験と重ね合わせて考えてから、もう一度聖体の恵みに戻りたいと思います。

私はおよそ 30 年前に司祭に叙階していただいたのですが、この恵みが人間の努力や才能で手に入れたものだとはとても思えません。努力や才能で決まるのであれば、足りなかったと思います。私は中学 1 年生の時から成績は神学校の同級生の中で 3 番目、4 番目でした。最も優れた人が選ばれるのであれば、いつも少し足りなかったのです。

また、聖歌隊にも選ばれることはありませんでした。中学 3 年生の時、高校を卒業して福岡の大神学院に入学してから、さらに上級生になってスータンを着るようになってからも追加の聖歌隊選抜試験がありましたが、ことごとく不合格でした。

努力と才能で司祭に選ばれるのであれば、最も優秀な人が選ばれるべきです。けれども神様は、その溢れる愛で「少し足りない」私を選んでくださったのです。いざ司祭になってみると、社交性、リーダーとしての適性、将来を見通す計画性、どれも少し足りなかったのです。そんな私を神様は辛抱強く使い続けてくださいました。

しかし溢れる才能を持っていても、神様が選んでくれるかは分かりません。人によっては、才能を生かして立派な資格を手に入れたりするでしょう。その資格があれば、当然置いてもらえる地位や役割があるはずです。けれども神様が、その資格を手に入れた人を必ずそれにふさわしい地位や役割を与えとは言えないのではないのでしょうか。

もし神様が、期待できるはずのものを与えなかった時、私たちはどう反応するのでしょうか。神様は不公平だと、怒りを表すのでしょうか。私たちは神様の溢れる愛を知っています。しかし私たちには、神様と同じ溢れる愛は備わっていないので、神様のなさり方が理解できない時に、苦しむのです。その時私たちには謙虚さが必要です。謙虚さが少し足りないので、待たされているのかもしれない。

日曜日から日曜日まで、一週間ありました。ここに集まっている（緊急事態で集まっていないかも知れませんが）私たちは、イエスを信じ、イエスを知り、愛しているからここにいるのですが、それでも一週間の間には「報われて当然のことが報われなかった」「理解されるはずのことが理解してもらえなかった」いろいろなことで怒りを覚えたり不信感を

持ったりしたでしょう。

それは、本来であれば祭壇の食卓に近づくにはふさわしくない心の状態です。ふさわしくないのに、イエス様は溢れる愛で私たちを招き、その愛の形見を分け与えてくださるのです。それで十分なのではないでしょうか。人には知られていない怒りや憎しみを持って、祭壇に近づいている。それでもイエスは赦してくださって愛の記念を与えてくださる。この世のことが思い通りにいかなくても、イエス様の愛の記念をいただいたのですから、この世のことは赦してあげてはいかがでしょうか。

私たちは今、災害に見舞われているような苦しい日々を送っています。それでも、イエスが祭壇上で御体と御血を私たちに分けてくださっています。これ以上の慰めが、私たちに必要でしょうか？イエスのもとに来てイエスを信じる者にとって、御聖体以上に、変わらない愛を見つけることができるでしょうか。できないと思います。

多くの人が、「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか」(6・60) そう言ってイエスから心と身体が離れようとしています。「あの人を離れていくのですか？」「あのような召し出しをいただいた人が離れていくのですか？」そんな出来事も起こるかも知れません。けれどもイエスの溢れる愛は、信頼に値するものなのです。

私の判断ではなく、神様の溢れる愛に、愛の記念である御聖体に、判断を委ねましょう。私が正しい判断をし、正しく愛することができる年齢に達するはるか昔から、イエスは私を呼んで、愛して下さっていたのですから。



年間第 22 主日 (マルコ 7:1-8,14-15,21-23)

いつでもどこでも、清い手を挙げて神を賛美したい

今週の説教は、2018年版をもとにしています。全国的に猛烈な感染拡大の中、中田神父は五島の母親の顔もなかなか見に行くことができずにいます。2年くらい見てないかも知れません。もう3年前になるでしょうか、侍者・先唱者の子供達と福江に巡礼に行きました。水ノ浦教会の敷地内に、野外の十字架の道行が設置されていました。私はこれを見てすぐに、「あー、これが田平教会にあったらいいなあ」と思いました。

野外の十字架の道行は魅力的です。歩きながら、キリストの十字架の道をお供する。もちろん聖堂内でも十分な恩恵を受けることができますが、これが田平教会の野外でできたらどんなに素晴らしいだろうと思いました。場所は信徒会館の裏手になりますが、土地の所有者の寛大な協力の結果、目処が立ちつつあります。あわせて樹脂製の十字架の道行のレリーフを譲り受けたので、第一流を刻むのももうすぐそこまで来ていると感じています。

今週の福音朗読に「昔の人の言い伝え」をなぜ守らないのかとイエスの弟子たちにファリサイ派の人々が詰め寄る場面があります。「昔の人の言い伝え」を大事にするファリサイ派の人たちは必ずしも言い伝えに凝り固まった人たちではなく、もともとは聖書の教えを実生活に生かそうと努力した人たちでした。

ところが彼らの向かった先は、実際には神の思いを実生活に活かすところまでたどり着いてなかったのです。「清い手で食事をする事」はたしかに神の望みですが、家のもの一切合切洗い清めて食事をしなさいとは望んでおられないのです。細かな規則を作りすぎたあまり、「清い手で食事をする」ことから遠く離れ、「家財道具一切を洗い清める事」に終始してしまっていました。

冒頭で話した十字架の道行ですが、みなさんが十字架の道行で思い出すことはどんなことでしょうか。「イエスの十字架への道のりを偲び、黙想する」ことはもちろんですが、もしかしたら「十字架の道行は四旬節にするもの」「条件を整えば免償を得られる」そういった事かもしれません。

今並べた2つのこと「十字架の道行は四旬節にするもの」「条件を整えば免償を得られる」が、もし十字架の道行の信心に取り組むのを難しくしているとしたらどうでしょうか。「十字架の道行きは四旬節にするもの」という考えがこの信心業を私たちから遠ざけているなら、私たちもファリサイ派の人たちと同じ過ち、「伝統や習慣に縛られている」という過ちに陥っているのではないのでしょうか。

十字架の道行は、イエスの受難・復活までの場面を思い起こす信心業のはずです。もっと頻繁に、この信心に加わって、イエスのご受難・ご死去・ご復活を黙想できたらと思うのです。十字架の道行を終えて疲れたと感じるのではなく、喜びを感じて帰ることができれば。十字架の

道行をしながら実際に歩く。ルルドでロザリオをして時間を過ごすことに負けず劣らず、充実した時間を過ごせるでしょう。この教会に野外で十字架の道行を設置したいと思っている私の狙いです。

十字架の道行のような伝統的な典礼のわざ、またロザリオや連祷といった信心業に興味を失っている人は多いと思います。こんな流れだからこそ、神への忠実を呼び覚ます典礼のわざや信心業を次の世代に伝える工夫が必要だと思います。個人的な信心業は、神の思いを実生活に活かす助けとなります。私の在任中に、たとえば十字架の道行のできる「祈りの園」を設けて、親から子に、重荷ではなく喜びと感じられるような伝え方を学ぶ一助ができればと願っています。

「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。」(7・14) イエスは神の思いが何であることを確実に教えてくださる唯一のお方です。私たちが神の望みをどのように実生活に活かすことができるのか、常に教え導いてくださいます。私も、この教会と平戸地区のために熱望している「祈りの園」の計画が本当に神の思いを学ぶ場所になりうるのか、イエスの照らし、導きに心を開いて教えを請いたいと思います。

実現に向けて、まだ課題があることも事実です。田平教会聖堂は、耐震工事を必ず施さなければなりません。ひょっとしたら、信徒会館の裏手の土地は、耐震保修工事関連の土地使用が先に来るかも知れません。ただ、聖堂が使用できなくなるのが間近に迫っているのに、十字架の道行ができないのは教会の典礼活動にとって多大な損失です。どうかご理解いただき、皆さんの声で、計画を前に進めていただきたいと思います。



年間第 23 主日 (マルコ 7:31-37)

イエスは深い息をついた

少なくとも、今週までは長崎大司教教区は「公式ミサの中止」を設定していると思います。この説教は8月20日に作成していますが、人間の知恵では3週間後がどうなっているのかさえ見通せないのです。イエス様のようなお考えに沿ってではないですが、中田神父も「天を仰いで深く息をつき、『エッフアタ』」と言いたいところです。

新型コロナウイルスの猛威に苦しむ全人類は、解放を求めてうめいています。人間はしばしば人間的な解決策を求めようとするので、「早くワクチンが全世界の人に行き渡って欲しい」「できればワクチンでなく、治療薬が開発されて欲しい」「過去の病気のいくつかのように、新型コロナウイルスを撲滅して欲しい」さまざまな欲求が噴出していています。

しかし現実には予想よりも残酷な場合があります。ウイルスは少しずつ変化して生き残ろうとします。より良いワクチンや治療薬が見つかっても、それを無力化してしまうような強いウイルスが現れるかも知れません。人間は医学や科学技術の進歩に希望を置きますが、現実はその希望を絶望に突き落とすことがあるのです。

何度も無力感に襲われている人類を救ってくれるのはいったい誰でしょうか？新しい人類でしょうか。私は、今週の福音朗読がその答えなのだと思います。イエスは耳をふさがれ、舌がしばられた人の苦痛を自分の身に引き受け、そこからの解放を求めて深い息をつき、「エッフアタ」と叫びます。人類の苦しみを解放できない人類に寄り添って、深い息をついてくださるイエスが、私たちの救いなのです。

確かに、科学技術や医学の進歩は、私たちに希望をもたらします。それを否定はしませんが、皆がその恩恵に与っているわけではありません。新型コロナのワクチン接種でも、先進国と途上国では格差があります。ワクチンが途上国まで行き渡るのか、誰も見通しを持っていません。

しかし苦しみを一緒に担い、共に深い息をついてくださるイエス・キリストには格差はありません。イエスは小さくされた人々のそばにいつもおられるからです。ため息をついている人のそばに、先進国の人々が期待することからこぼれている人々のそばにいつもおられるからです。

イエス・キリストを世界中の多くの人が救いの源にしてくれたらどんなにすばらしいでしょう。弱い人々の友であるイエス・キリストの思いを理解して、先進国がイエス・キリストの思いを途上国の中で、さまざまな恩恵から漏れてしまっている社会の中で実現しようとするなら、どんなにすばらしいことでしょう。

私たちにもできることがあります。「イエス・キリストは私たちの希望です」と証しすることです。「イエスは私たちの為に深く息をついてくださるお方です」と知らせることです。ぜひ今週、希望を失いかけている人のために力になってあげてください。このコロナ禍にあって、あなたが「深く息をついて」そばにいてください。ミサに参加できなくても、私たちはちゃんとイエス様を喜ばせる方法を持っているのです。



年間第 24 主日 (マルコ 8:27-35)

人はイエスを正しく言い当てることができない

今週は教区が設定した「公式ミサ中止期間」を終えているかも知れませんが、ただ、中田神父が 11 日（土）に 2 回目のワクチン接種を受け、寝込んでいる可能性があるため、田平小教区は本日まで公式ミサの中止期間になっています。ちなみにこの説教は、8 月 20 日に作られています。

今週の福音朗読箇所は、「ペトロ、信仰を言い表す」という箇所です。これまで中田神父は、「ペトロは立派な信仰を言い表してすごいなあ」と考えて読み始めていましたが、あらためて読み返すとマルコ福音記者はそう考えて書いたわけではなさそうだ、と考え直しました。

冷静に考えると、人間に過ぎない私たちが、イエス様が誰であるかを見事に言い当てる、ということは考えられないからです。私たちは幼なじみや長い付き合いのある友達のことでも、「その人のことをすべて言い当てる」ということはできないのです。どんなに付き合いが長くても、知らないことがあり、分かってもらえないところがあるのです。

神の子イエス・キリストについてはますますです。3 年間共に寝起きして生活してきたと言っても、それですべてを言い当てることは決してできないはずですが、それなのに中田神父は「ペトロの信仰は立派だなあ」と感心して、人間の不完全さを忘れていたのです。もしかしたら、中田神父も自分が不完全でイエス様のことを全て言い当てることはできないことを、忘れていたのかも知れません。

もしそうだとしたら、つまり「どんな人も、イエス様のことを全て言い当てることはできない」としたら、イエス様が言葉を付け加えた時に、どんな態度を取れば良いのでしょうか。もしその言葉が「まさかそんなことは起こらないでしょう」という内容だったら、どんな態度を取れば良いのでしょうか。

「それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。」(8・31) 思いもかけないことをイエス様は言いました。「イエス様どうしたのですか。頭がおかしくなったのですか」と、頭ごなしに言いますか？

ペトロはイエス様を遮るような言葉を言いました。イエス様が誰か、すべてを言い当てることができない者なのに、イエス様が付け加えたこれから起こる出来事を、頭から否定したのです。本当は、すべてを理解しているイエス様に信頼して、後をついていく必要があったのでした。

私たちの誰も、イエス様が誰であるかを全て言い当てることはできません。だから、自分の身の回りの出来事は完全に理解できて「私がいつも正しい」と言うのはやめましょう。誰かに言い返そうとする時、特にそれが責任ある人に言い返そうとする時、イエス様に言い返しているのではないかと考えてみましょう。考え直すことが、あなたを成長させる時もあるはずですが、ペトロは叱られて、イエスを遮る態度をしなくなりました。ペトロは信仰を言い表す体験の中で、大きく成長したのです。



年間第 25 主日 (マルコ 9:30-37)

「仕える者」になるために、「使い物になる者」に

ようやく、皆さんとのミサを再開することができました。修道院のシスターの葬儀を別にすれば、これだけの人の前でミサをするのは一ヶ月ぶりです。えらく緊張します。おそらく小教区に入っている司祭たちも同じ気持ちなのでしょう。

一ヶ月前に、小教区報といっしょに中田神父からの説教案が配られたと思います。おかげで私はこの一ヶ月、説教を準備せずに寝て暮らしておりました。すると反動が来て、ミサ説教を準備するのにずいぶん苦労しました。「こんなに大変だったかな～」と思うくらいでした。公式ミサの中止は、司祭の生活にも悪影響です。

与えられた福音朗読箇所を読み返していて、今まで疑問にすら思わなかったことに疑問を持ちました。9章 33 節から「一行はカファルナウムに來た。家に着いてから・・・」と続いていくのですが、途中でだれがいちばん偉いかを議論していた弟子たちを呼び寄せて言われます。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」(34 節)

ただ、この状況でイエスが「そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた」(36 節)とあるわけですね。ここに登場する一人の子供は、「どこの子」なのか「誰の子」なのか、疑問に思いませんか？音程が外れるので歌いませんが、かつてのアイドル歌手の「赤い風船」という歌を思い出しました。

それはともかく、イエスが示された生き方を私たちはよく理解しなければなりません。「すべての人に仕える者になりなさい。」しかもイエスは、一人の子供を真ん中に立たせて考えさせようとしています。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」(37 節)素直に受け取るなら、目の前にいる「か弱い存在」を受け入れることが、すべての人に仕える者の出発点ということなのです。

誰かに仕える、奉仕するという場合、たいていは納得できる理由があるから相手にお仕えするものです。自分の上司だから、お仕えする。自分を雇ってくれている人だから、お仕えする。これからたくさんのことを学ぶ人だからお仕えする。何か納得できる理由があるからお仕えするものです。

しかし「子供」は、どう考えてもお仕えする相手には見えません。子供はか弱い存在なので、いつ病気するかも分かりません。もう少し我慢できるところを我慢しなかったり、小さなことにも怯えたりします。そんな子供を受け入れ、前に進んでいくのはたやすいことではありません。

それでも、イエスが「すべての人に仕える者になる」その出発点として示したのはどこにでもいる子供の一人だったのです。か弱い存在で

ある子供を受け入れることができるなら、納得できる理由を見いだせない相手にもお仕えすることが可能かも知れません。

上司と認めたくない相手。雇われているわけでもない相手。何も学ぶところがないように見える相手。これらの人にお仕えしなければならなくなった。本心では、「やってられるか」と思うかも知れません。けれども神の前で真に偉大な人は、納得できる理由が見当たらない人にもお仕えし、その中で偉大さを発揮するのです。

福岡の大神学校で長年事務として働いた深堀さんという人がいました。ご健在であることを願いますが、この方は歴代の大神学院院長にお仕えしました。私の在学時代、「この院長は反面教師なのだ」と思った院長がいました。学生はあまり関わらないで過ごすことは可能ですが、事務の深堀さんはそうはいきません。

どんな院長にも忠実にお仕えしたことで、彼はすべての大神学生から尊敬されました。私たちが卒業して教区に戻り、「こんな人と働けない」と少しでも思ったときに思い出したのは深堀さんのことでした。大神学院という限られた空間で、どこにも逃げ場がない中で、深堀さんは忠実な事務方として、私たちにしなければならぬことを思い出させてくれたのでした。

「すべての人に仕える者になりなさい。」イエス様が言う「仕える者」になるために、私は「使い物になる者」にならなければならないと思います。まずは使い物にならなければ、お仕えすることもままなりません。

しかもすべての人に仕える者になるのですから、もっと自分に向き合い、伸ばせる部分を探求し続け、欠けたところを埋め合わせるようにしたいものです。大神学院時代にすばらしいお手本を頂いたことに感謝し、「すべての人に仕える生き方」を探求し続けたいものです。



年間第 26 主日 (マルコ 9:38-43,45,47-48)

「わたしたちの家」からこぼれる人が出ないように

「世界難民移住移動者の日」を迎えた年間第 26 主日です。「難民」「移住者」「移動者」のことを意識しながら今週の福音を読むと、どのようなメッセージが見えてくるのでしょうか。

本日、境内内外清掃です。今回、「田平工務店」という業者に入ってもらったことにしました。先週「すべての命を守る月間」にちなんで実施した海岸清掃に参加した方々は何を言っているかお分かりでしょう。もし誰かから尋ねられても「いや～、主任司祭が個人的に依頼したことは把握しておりません」ととぼけておいてください。9時ミサの後、作業前の全体説明をする時に「田平工務店」がどこの業者か、ひと目で分かるとおもいます。どうぞお楽しみに。

さて田平小教区は中田神父の発案で3年前から「移住記念碑」を設置している地区に行き、記念ミサをしております。今年も実施できることに感謝します。私たち田平の神の民の始まりは、ド・ロ神父様とラゲ神父様の手引きで外海地方と黒島からやって来た「移住者」でした。この歴史は、私たちにとって忘れてはいけない大事な出来事です。

ですから「世界難民移住移動者の日」は田平教会にとって身近な問題と言えるでしょう。移住者として扱われた私たちの先祖たちと、すでに生活しておられた人々の両方に関心を持つことは、互いが互いを受け入れ、よい関係を保つために必要なことです。

苦労したことは容易に想像できます。生計を立てる当てがあって移住してきたのではありませんでした。宣教師が前もって購入してくれていた山野があっただけで、そこを開拓し、生活の糧を得て、定着するだけでも大変だったでしょう。その上さらに、地域との良好な関係を築くのは並大抵ではなかったはずで

なぜそれらを中田神父が容易に想像できるかと言うと、何より私自身、難民移住者の子孫だからです。中田神父の先祖も、外海地方から海を渡って五島列島に移住してきたわけです。外海地方は多くがカトリックであったため人口が目に見えて増えていきました。

統治者は人口の急激な増加を恐れて人口抑制に舵を切ります。それは生まれたばかりの子に危害を加えるという悲しい出来事にも繋がる政策でした。キリシタンは当時の政策に協力できなかったため、新月の夜に小舟に乗り、海の藻屑となる危険も顧みずに五島へと逃げたのでした。

私の知る限り、上五島では平らな土地や漁港周辺に住み着いているのはカトリックでない人たちです。カトリックの人たちは概ね、急な山の斜面に張り付くようにして家を建て、住み着きました。道路も整備されず、畑も切り立った「猫の額」のような場所を開墾して段々畑を整備し、サツマイモを植えていたのです。

幼い頃私は、どうしてカトリックの人たちはサツマイモが主食でカトリックでない人たちはお米が主食なのだろうと不満に思っていたもの

です。私自身は経験がありませんが、学校の運動会の時、カトリックの子供の中には、みんなの前で弁当を開きたがらなかった子がいたのです。カトリックでない子供と差があったからです。それは山間部にしか居場所を見つけられなかったというかつての事情があったからでした。

また、これもさすがに中田神父の時代にはなかったことですが、先祖達は「耶蘇」とか、「アーメンソーメン」と呼ばれて嫌われていました。キリシタンであったがゆえの「難民」「移住者」のレッテルは、長い間生活を脅かしていたわけです。3年前の2018年に田平教会聖堂献堂百周年を祝うにあたり、「移住者」の苦労を資料で読む中で、起こった一つひとつの出来事が私には他人事には聞こえませんでした。

私たち田平教会の神の民は、多少なりとも難民移住移動者の気持ちに寄り添うことができる体験を通じてきています。これから私たちが目を向けるべきことがあります。それは「私たちが、かつて味わった体験を味わわせてはいけない」ということです。

教会が建てられて百年以上経てば、すでに私たちは地元の人になっています。これから、新しく入ってくる人たちや工場労働者で入ってくる諸外国の人たちに、疎外感を感じさせてはいけないということです。

「あの人はよそから来た人よ」とか「あの人は外国人よ」など、あなたの言葉は「目」から入った情報が言わせています。イエスはこう言っているではありませんか。「もし片方の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出さない。」(9・47)

今日はより実感を込めて伝えるためにおもちゃのハサミを小道具として用意しています。難民移住移動者だという理由で「あの人には手を貸さない」と言うのですか？イエスはこう言っているではありませんか。「もし片方の手があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。」(9・43) イエスはこんな大きなハサミでああなたの腕を切り捨てても、片方の手を差し伸べるように促しているのです。

私たちは、かつて先祖が難民や移住移動者であったことを忘れてはいけません。それは今後私たちが接する人に同じ思いを味わわせないためです。何よりもまず、ベツレヘムを追われ、エジプトに避難して難民となった幼子イエスのことを思い出すべきです。

私たちが接する人に過ちを犯すなら、その人を幼子イエスと同じ目に遭わせたことになります。過去に学び、未来に活かす。そうすればきっと、私たちは出会う人すべてと望ましい関係を築く道筋を開くことができるでしょう。



年間第 27 主日 (マルコ 10:2-16)

わたしのところに来させなさい

年間第 27 主日、「聖書と典礼」では福音朗読の後半になる「子供を祝福する」この場面は一段下げて印刷しています。司式司祭の中には朗読を省略することもあるでしょう。その場合おそらく、説教でも触れないのだと思います。中田神父は今回、この「少数派になるであろう」箇所を取り上げたいと思います。

県道脇の三角コーンと柵を取り外しました。早速観光客が来て、正面玄関で撮影会です。「ほらほら、集まって」「見て見て。献堂百周年だって」「なかは入れないんだって」その声を聞きながら、説教を考えたり、けいこの準備をしたりする日々が再開します。久しく観光客の声を聞かなかったので、大声で話していないとは思いますが気になります。

今から 40 年前、のちに列聖されたヨハネ・パウロ二世が長崎にやってきました。公式のスケジュールの合間を縫って、聖マキシミアノ・マリア・コルベ司祭ゆかりの聖母の騎士修道院を訪問したり、純心聖母会が運営している三ツ山の原爆ホームを訪ねたりしました。聖母の騎士を訪問された時、一組の若い夫婦が教皇様の目に留まりました。お母さんの腕には幼子が抱かれていました。

記憶に新しい教皇フランシスコの長崎訪問の折、野外ミサで教皇様が会場内を専用車で回る時、何度か車を止めさせました。そこには幼子を抱いた家族がいて、教皇様が幼子に目を留め、抱き上げてくださったのでした。教皇様が真っ先に目に留めるその先には、幼い子供がいました。

教皇フランシスコも、聖ヨハネ・パウロ二世教皇も、イエス様の姿を模範に生きておられます。一国の元首ですから、警備は相当厳しいでしょう。それはまるで、イエス様の周りを取り囲む弟子たちのようです。群衆が押し寄せて、何かが起こっては大変だという気持ちは理解できます。

ところがイエスは無防備な子供をありのまま受け入れてくださいました。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」(10・14) しかも子供たちを連れてきた人々を叱った弟子たちに対し、「イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた」(同上)とあるのです。

「憤った」とありますが、「子供を祝福する」場面はマタイ福音書とルカ福音書にもあります。ただマルコのような「イエスはこれを見て憤り」という記述は見られません。「イエスが憤られる場面は考えにくい」と思って削除したのか、ひょっとするとマタイは人々を叱った側にいたために、ばつが悪くて削除したのかも知れません。

イエスはこれ以前にご自分の死と復活について二度予告をしています。弟子たちには理解できませんでした。その直後には「弟子たちの中

でだれがいちばん偉いだろうか」と議論していました。自分たちが師と仰ぐイエスがどんな人なのか、どのようについて行けば良いのか、理解が足りませんでした。

この弟子たちの理解不足が、子供たちへの接し方で頂点に達したのです。「あなたがたは何も分かっていない。」残念な気持ちが爆発して、イエスが憤られたという表現になったのでしょうか。理解不足が伝わる態度を見せられ、ストレスが積もり積もって雷が落ちる。私もいたく共感します。

「神の国はこのような者たちのものである。」(10・14) イエスは単に目の前の子供だけを指して言ったわけではないはずです。「このような者たち」、イエスのそばに置いてもらうことを素直に喜ぶ人たち。イエスの言葉一つ、しぐさ一つでも喜んで受け入れる人たち。このような者たちの居場所を妨げる行動は、イエスの思いを妨げる行動になってしまいます。十分気をつけなければなりません。

「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。」私たち一人ひとりにも、イエスのこの言葉は向けられていると思います。イエスのもとにどんな人でも置いてもらえる環境を、私たちは真剣に考えなければなりません。

「あなたは足手まといになる。イエスから遠く離れてください」と、言葉や態度で誰かに接していないだろうか。「すべての人のいのちを守る」この目標にも関わってきます。振り返りの一週間といたしましょう。



年間第 28 主日 (マルコ 10:17-30)

「何かを捨てること」と「何もかも捨てること」

今週年間の第 28 主日の中で、「何かを捨てること」と、「何もかも捨てること」この二つを考えるきっかけにしたいと思います。福音朗読を集中して聞いておられた方は、ペトロが「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」(10・28)と言い出した場面を思い出したでしょう。ペトロは「何かを捨てた」のではなく、「何もかも捨てた」という自覚がありました。

テレビの解説者やコメンテーターを見ていると、「元」何々、という肩書きの人が出演していたりします。元プロ野球選手とか、元国会議員とか、そういう人たちです。彼らは何らかの理由で「元の仕事」を離れています。野球選手であれば引退した人だったり、国会議員であれば任期満了、それから転身した人だったりします。

この前民放のニュース番組で顔ぶれが一新しているなあとと思って顔を見てビックリです。メインキャスターは元 NHK のアナウンサーではありませんか。時間帯は違うけれども、ライバル局で堂々と働くのだなあと思ったのです。

こうした方々はきっと「何かを捨てて」現在に至っているのでしょう。才能に溢れているので、何かを捨てても何かが残るのでしょう。公共放送から民放に迎え入れられて、もしも用意された仕事が終わったとしても、何か仕事を見つけるか、新しい身分で迎えてもらえるのでしょうか。

ところで、ペトロがイエス様に念押しするかのよう言い出したのは、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」ということでした。何もかも捨てたのですから、もしもイエスに従ったという選択が失敗だった場合、何も残らないのです。何かの約束が欲しかった、ということかも知れません。

「何かを捨てる」という選択と、「何もかも捨てる」という選択肢とでは、「何もかも捨てる」ほうがより厳しい選択だと言えます。福音朗読に戻って、「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」(10・17)とひざまずいて尋ねた人は、イエスから「行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」(10・21)と言われます。彼はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去ったとあります(10・22 参照)。「何かを捨てること」には同意できても、「何もかも捨てること」には同意できなかったのでしょうか。

「たくさんの財産を持っていた」とされる男は、きっと「何かを捨てなさい」と言われても応じる覚悟があったのだと思います。そうでなければ、どうしてイエスの足もとにひざまずいたりできるのでしょうか。相当厳しい命令を突きつけられても、やり遂げる自信があったはずです。それは「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」(10・20)からもうかがえます。

ひょっとしたら、名の知れた資産家だったかも知れない。そうであれば、大勢の人の前で「それはちょっとできません」とは言えないでしょう。人々から「さすが」と言われたい気持ちも少なからずあったはずです。イエスはそんな金持ちの心に一石を投じるのです。

「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。『あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。』」(10・21)

「何かを捨てる」というのは、まだ自分のうちに何かを残しています。「これだけは捨てられない」というものを持っています。目に見えるものばかりではなく、目に見えないもの、「評判」とか「プライド」とか、そういうものも含めて、捨てられないものを抱えているわけです。

イエスは一石を投じます。「火」を投じたと言うべきかも知れません。永遠の命を受け継ぐため、イエスに従うためには、「何かを捨てる」生き方ではなく、「何もかも捨てる」生き方が必要なのです。

年間第 26 主日の福音朗読を思い起こしましょう。「もし片方の手があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。」(マルコ 9・43) ここでも、違う生き方をしなければ、命にあずかれないと説いているのです。

「何もかも捨てること」にあまり縛られる必要はありません。「何かは捨てるが、これは捨てられない」この生き方を捨てることがむしろ必要です。「評判」「プライド」これらは捨てられないという考えをこそ捨てた時、私たちは永遠の命を受け継ぎ、イエスに従う人生を送ることができるのです。

年間第 29 主日(マルコ 10:35-45)



年間第 29 主日 (マルコ 10:35-45)

「そのまま」で価値を持っているもの

年間第 29 主日の朗読箇所が登場するヤコブとヨハネは、イエスが栄光を受けた時、自分たちをその右と左に座らせてくださいと願いました。先週ペトロが、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」(10・28)と念を押した場面と重なります。

実に人間くさい願望ですが、将来の安心に繋がる言葉を、弟子たちは欲しがっているのです。世に言う「論功行賞」みたいなものですが、見方によっては弟子たちがイエスに取引を持ちかけているようにも見えます。

「これだけのことをしたのだから、これくらいはもらえるだろう。」すでに今週の出来事までに、イエスは三度もご自分の死と復活を予告しておられますから、弟子たちの置かれている状況はより切迫しているわけです。「私たちも死ななければならないのではないか。」それでなおさら、ヤコブとヨハネは約束を取り付けたかったのでしょう。

イエスに危険が迫る中、弟子たちが考えていたことをもう一度確かめましょう。何を欲しがったのでしょうか。私はこう思います。「そのまま価値を持っているもの」これが欲しかったのではないか。そしてヤコブとヨハネが考えついたのは、「イエスの右と左に座らせてもらうこと」だったのです。

ところで、「イエスの右と左に座らせてもらうこと」は、そのまま価値を持っていると言えるでしょうか？例えば中田神父が、大司教様のミサで、右に座れるとしましょう。「私の右にどうぞ」と言われてミサの間右に付いた。大司教様の右と左は、確かにずっと注目してもらえますが、そのことだけで価値があると、言えるでしょうか？

もし大司教様の右に付いていても、他の司祭たちから、「ちょっとどいてもらえますか」と言われるならば、何の価値もありません。右に付いているということは、例えば祭壇ではカリスやパテナを大司教様にお渡しするはずですが、それもしないでただ突っ立っているなら、明らかに迷惑なだけです。

もっとそのまま価値を持っているものを人は求めるべきです。イエスはそのことを戒めようとして、弟子たちに全く違うものを示したのです。「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」(10・43-45)

これこそが、イエスの眼に、「そのまま価値ある行い」「価値ある存在」です。理解してくれる人や身内にだけ仕えるのではなく「皆に仕える者」です。感謝してくれる人にだけ僕となるのではなく「すべての人の僕」となることです。これはこの世の物差しで測ることのできる「仕える者」「僕」を超えなければ、到底たどり着けないかも知れませ

ん。

参考のために、この世の物差しで測れない生き方をした人を紹介します。10月はロザリオの月ですが、1日の聖人は「幼きイエスの聖テレジア」でした。この聖女はカルメル会の厳しい生活の中に身を置きましたが健康に恵まれなかったために通常求められる「祈り、かつ働く」という生活ができませんでした。そこで修道院長から命じられたのは「雑用係」と「日記を付けること」でした。

彼女が果たした務めはささやかなものでしたが、「小さなことを、大きな愛を込めて」果たしていました。彼女が亡くなった時、一緒に暮らしていたどの姉妹も、彼女の偉大さに気付かなかったそうです。見た目には小さな務めしか果たせなかったからです。しかし後に日記が印刷され、一般の人の目に留まり、読んだ人から修道院に一日何百通もの手紙が届くようになったのです。

9年間という短い修道生活でした。身体の健康も含め、生きている間に何ももらえませんでした。神は彼女が果たした「皆に仕える者」「すべての人の僕になる生き方」を見過ごしはしなかったのです。これは、「皆に仕える者」「すべての人の僕になること」この生き方がそれだけでそのまま価値があることの証明ではないでしょうか。

世の中に、「皆に仕える者」「すべての人の僕」はたくさんいるでしょう。しかしカトリック信者は、その中でさらに「イエスが示した物差しをわきまえている人」であるはず。わたしたちはカトリック信者として、この世の物差しに適合した「皆に仕える者」「すべての人の僕」を超える生き方を示すことが可能です。可能なら、実行しましょう。そして本当に偉大なことは何かを、世に示すことにしましょう。

「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。」（10・42-45）



年間第 30 主日 (マルコ 10:46-52)

私たちは最後の抛り所としてイエスを信じた

年間第 30 主日まで年間主日が進んできました。小学 5・6 年生には、年間は第 33 主日まであって、そのあと「王であるキリスト」の祭日がやって来て年間の主日は終わることをお勉強しました。年間の主日もあと一ヶ月です。

今週の「盲人バルティマイをいやす」物語の鍵となるのは、「バルティマイの声は、イエスを立ち止まらせた」ということだと思います。「イエスは立ち止まって、『あの男を呼んで来なさい』と言われた。」(10・49) では叫び声が、イエスを立ち止まらせたのでしょうか。

叫び声そのものが、イエスを立ち止まらせたのではないと思います。群衆はバルティマイが「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫ぶのを聞いていますが、「多くの人々が叱りつけて黙らせようとした」(10・48) とあり、立ち止まって彼の望みに耳を傾けようとしていません。バルティマイの声は、人々によって黙殺されようとしていました。

しかしバルティマイは叫び続けます。叫び声だからイエスの足を止めることができると考えていたのかは分かりません。ただ、バルティマイにはほかに方法がありませんでした。そしてこの機会を逃せば、二度とチャンスは回ってこないと考えていたはずです。

イエスは立ち止まってくださり、バルティマイを呼びます。彼の声はイエスの心に響いたのです。彼の声はイエスの足を止める力があつたのです。大声ではない何かがイエスの心に響いて、イエスに呼ばれました。その何かとは、何でしょうか。

中田神父は今年の初め頃から、ミサの様子を収録して、動画を公開し始めました。一定程度の人が、このミサの動画を視聴してくださっています。人数はそれほど気にはしておりませんが、飛び抜けて視聴数の多かったミサ動画があります。それは今年の 5 月 22 日、聖霊降臨のミサ動画で、148 回視聴してもらっています。

どのミサ動画も、ほとんど 45 分くらいで、特別なことをしているつもりはありません。むしろ最近のミサ動画のほうが、手の込んだ動画のつもりです。しかし今に至るまで、三桁の視聴にたどり着いたことはなく、後にも先にも、これが一度だけでした。

YouTube の動画も、この世に溢れるほど流れています。たぶんミサの動画だけでも、目移りするくらい見かけるようになってきました。そんな中で中田神父が用意したミサ動画が人々の目に留まっているだけでもありがたいことですが、なぜか聖霊降臨のミサだけが、148 回も視聴されたのです。何かが心に訴えかけたのでしょうか。何が、人々の足を止めたのでしょうか。

「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」(10・52) イエスは、バルティマイの信仰が、ご自分の心に響いて足を止めたことを公

言しました。イエスの足を止めるのは、大声ではなく、彼の信仰だったのです。「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」(10・47) この言葉しか、彼の信仰を伺わせる言葉はありませんので、ここから読み解くしかありません。バルティマイの信仰はどのようなものだったのでしょうか。

そこであらためて朗読箇所を読み返すと、彼はイエスに呼ばれると「上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た」(10・50)とあります。バルティマイは道端に座って、物乞いをして今日まで生きてきました。上着は彼の最後の拠り所だったでしょう。雨風をしのぎ、暑さ寒さから身を守り、もらったお金を保管しておくために必要な、たった一つの持ち物でした。

バルティマイはそのたった一つの持ち物を捨てて、イエスに近づいたのです。最後の拠り所を捨てた。それを言い表したのがあの「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」だったのです。

ついでになりますが、イエスにいやしてもらったあと、上着がどうなったのか何も書かれていません。私個人の推測ですが、もはや上着は、彼の最後の拠り所ではなくなりました。そういうことでしょう。

「盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。」(10・52)これは、直接的には視力の回復を指しているでしょうが、視力に問題のない人でも「見えるようになった」という体験をすることがありますから、心の目が開かれたことも指しているでしょう。

ここにバルティマイの決定的な変化が見て取れます。「上着」というこの世のものを最後の拠り所としていた生活から、「イエスへの信仰」という、目に見えないものを最後の拠り所とする人へ変わったということです。バルティマイは、決して失うことのないものを、これからの最後の拠り所として生きることにしたのです。

この世界では、まさかと思えるものまで失うことがあります。事件に巻き込まれて、家族を失うことさえあります。まさかと思えるような喪失感を味わった人々は、見えているのに何も見えなくなった感覚を味わっているかも知れません。イエスはそんな人々の心の叫びに、今も足を止めておられるのです。

「何をしてほしいのか」(10・51)。他の誰も、その人に希望を示してあげることができない中で、イエスは決して失われることのない希望を示してくださるのです。そして私たちは、その場面を今週の福音朗読の中で学んだ者たちです。

どうか、力を落としている人のために足を止めてあげてください。その人に寄り添って、あなたが信じているイエス・キリストを最後の拠り所として示してあげてください。私たちはそのために、今日集まってミサを祝っているのですから。



年間第 31 主日 (マルコ 12:28b-34)

「遠くない」という評価で満足できますか？

今週の福音朗読は「最も重要な掟」という小見出しが付けられている箇所、律法学者が適切な答えをしたとして、イエスから「あなたは、神の国から遠くない」(12・34)と称賛される場面です。

福音書の中で律法学者はほとんど敵対する勢力として描かれていますが、この律法学者は偏見なしに、謙虚にイエスに耳を傾け、掟に込められた神の愛を正しく理解し、神に応える道も理解します。ただ、「あなたは、神の国から遠くない」というイエスの答えは、やや引っかけります。

説教の途中ですが、ミサの始めにお知らせしたとおり、福岡教区のドミニコ田川清美神父様が10月17日に亡くなり、司祭のみで18日通夜、19日葬儀ミサが福岡教区の司教座聖堂カトリック大名町教会で行われました。

中田神父がFAXの通知に気付くのが遅れ、通夜葬儀に参列できなかったばかりか、弔電も香典も届けることができなかったのは痛恨の極みです。代わって、本日と11月3日の墓地ミサと、来週のミサ、合計3回、ミサをささげたいと思います。申し訳ありませんでした。

田川神父様の経歴を見ると、隠退生活23年を除く現役の司祭生活44年のうち、いくつかの教会の助任として9年間務めたのち、あとの35年間は馬渡島教会と呼子教会の主任だけを務めておられます。珍しい経歴です。馬渡島教会と呼子教会に交互に2回ずつ赴任です。考えさせられるものがあります。

福音に戻りましょう。登場する律法学者は、「あらゆる掟の根本となる掟」をイエスから示され、それを十分に理解しました。彼は「先生、おっしゃるとおりです」(12・32)と言っていますから、手放しでイエスの答えに同意したのでしょうか。ただ、「遠くない」という評価にとどまりました。

十字架にはりつけにされた犯罪人の一人は、「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(ルカ23・43)と約束してもらいました。ある百人隊長には、その部下のいやしを願う中で「イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」(マタイ8・10)と宣言します。

それからするとイエスの「遠くない」という表現は、やや評価が低いような気がします。何がその原因なのでしょう。あえて、その「差」を考えるなら、律法学者は十分な理解ができていたのにイエスに自分を委ねるための一步を踏み出せなかった、ということかも知れません。

そう思って読み返すと、律法学者は「これからイエスの答えに添えるよう生きていきます」とは言いません。「『すべてに超えて神を愛し、隣人を自分のように愛する生き方』を十字架上の死に至るまで貫くイエスに従ってまいります」そんな態度表明もありません。それでイエスも、「あなたは、神の国から遠くない」という称賛にとどまったのかも知れません。

高校生の時の体験を思い出しました。高校には物理という授業があり

まして、名前は思い出せませんが風変わりな先生がこの授業を担当していました。授業中に、「女の子を完璧に口説く方法を教えてあげよう。」そんな、授業とはおよそ関係のない話を大真面目にしていました。物理の授業は全く役に立ちませんでした。が、「女の子の口説き方」はその後、人を説得する時に大いに役に立ちました。

学期末試験の時のことです。勉強した内容がズバリ的中し、手応えのある答案を出すことができました。答案を返してもらう際、みんなの前で「100点」と呼ばれたのでやったねと思っていたら、別の生徒が「P」と呼ばれたのです。

先生から「P」と発表された生徒は、私が逆立ちしても成績を上回れない神学生仲間でした。「100点ではなく、『P』とは何だ？」としばらく考えて分かりました。「P」とは「パーフェクト」という意味で、私は一カ所、教科書のとおりを書いてなかったのです。私の答案は100点ではあるけれどもパーフェクトではなかった、ということのようでした。

あの体験は「あなたは、遠くない」という意味をのちに理解する出来事だったと思います。最後まで私は、その先生の科目で「P」を取ることはありませんでした。思い出すたびに今も「あなたは、遠くない」という言葉の意味を考えるのです。私は自分の務めに、あと一步踏み込めていないのではないかと。

仮に50年、司祭職を務めさせてもらうとすると、あと20年ほど残っています。イエスは「第一の掟は、これである」「第二の掟は、これである」と示されました。司祭職の中で、神を力を尽くして愛する20年を生きる。司祭職の中で、隣人を自分のように愛する20年を生きる。どちらも表裏一体なのだと思います。言い換えれば、司祭職を愛し抜く。これが、第一の掟と第二の掟を同時に果たす生き方なのだと思います。

お一人お一人、「この二つにまさる掟はほかにない」とイエスが示された掟を自分に当てはめて考えましょう。「掟」としてだけ当てはめるのではなく、「生き方」として当てはめる時、この二つの掟は神をより深く愛するためにイエスによって示されたのだと理解できるでしょう。

神をより深く愛するための掟であるから、一步踏み出すのは自然なことです。一步を踏み出さず、「あなたは、神の国から遠くない」で終わる人生にすべきではありません。



年間第 32 主日 (マルコ 12:38-44)

あなたのおささげは何を表していますか

今週年間第 32 主日の福音朗読は、神が私たち人間に何を求めておられるのかを考えさせている内容となっています。神は私たちに特別なことを求めているのではなく、ごく日常的な振る舞いを、神の望みに叶うように整えなさいと求めているのです。

今週は二つのことが取り上げられていて、一つは律法学者の振るまいが非難され、もう一つはやもめの献金が称賛されています。最初に前置きしたことを踏まえて考えるならば、律法学者は神の望みをないがしろにしていたことになり、やもめは神の望みを誰よりも実行していた、ということです。

ところで、律法学者の振る舞いは特殊なものだったのでしょうか。

「長い衣を着る」「広場で挨拶される」「上席、上座に座る」というのは、特別な振る舞いとまでは言えなかったようです。それらが非難を受けたのは、彼らの傲慢さのためでした。

長い衣を着るのも良いでしょう。会堂に用意されている上席に座るのも良いでしょう。しかし座る人の心に、「私はあなたたちとは違う」とか「ここに座って当然である」こうした鼻につく態度があるなら、神の望みを踏みにじることになるのです。

次にやもめの献金ですが、神殿の献金箱に献金するのはだれもがすることであり、金持ちが 10 円玉を 500 枚ジャラジャラ入れて、5 千円の献金を大げさにするのも日常見られることでした。だれもがすることであっても、特別な心がけで実行することが大切です。やもめの女性は、言ってみれば 20 円しか入れませんでした。1 円も粗末にできない生活の中で、「神にすべてを委ねて生きる」その心がけも同時にささげたのです。

ちなみに郵便局は来年 1 月から、51 枚以上 100 枚までの硬貨を窓口で預けると 550 円の手数料をもらい受けるそうです。皆さん、ここから先が大事です。理由もなく 100 円の献金をするのに 10 円を 10 枚入れるようなことはしないで下さい。あなたの 10 枚の 10 円で、郵便局から 550 円取られる可能性があるのです。

もちろん、日頃から数円のお釣りを貯めて、それを献金する人もいるでしょう。それはそれで、「お釣りを神様のためにすっかり手放す」という心がけですから、謹んでお預かりします。これからはもう少し頻繁に、窓口に出向かないといけなくなりそうです。

やもめの献金をイエスが称賛したのは、もっと深い理由からです。もう一度イエスの説明を読み返しましょう。「この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」(12・44) 彼女の献金は、すべてを神に委ねきって生きるという態度の表れです。これは誰かのことを指しているのではないのでしょうか。

すでにお気づきかと思いますが、「すべてを父なる神に委ねきって

生きる」これを忠実に実行されたのはイエス・キリストです。イエスは生活費を全部入れただけに終わらず、最後は命そのものまで父なる神に差し出したのです。活動の初めから、常にこの覚悟があったので、傲慢な人をはばかりることなく非難し、自分をすっかり神に委ねる人を称賛できたのです。

私たちに当てはめてみましょう。私たちが施すものは、父なる神に自分を委ねるしるしになっているのでしょうか。ミサの前に献金箱に献金を入れています。ミサの献金は、今週一週間を父なる神に委ねるしるしになっているのでしょうか。

実はすでに、ミサに来ている時点で、私たちは「時間」を父なる神に委ねています。日常忙しく働いて過ごす中で、すべての時間は神から与えられたもののはずです。「すべての時間はあなたからのものですから、感謝するためにここに来ました。」ミサに参加するまでの時間、ミサに参加している間の時間、その両方をこのような心でお委ねしたいものです。

中には、生きていることのすべてを神様に委ねている人もいます。前回の葬式で少し話した例えですが、私は小学生の体育の時間に、走り高跳びでバーを越える際、先生から指導もされていないのに背面跳びをしてしまい、思いっきり背中を砂場に打ち付けて息ができなくなり、景色が真っ暗になったことがありました。

初めて「このまま死ぬのかな」とちょっと思った瞬間でした。けれども幸いに何事もなく今まで生かされています。あの時も含め、私が今あるのは神様が生かしてくださったおかげだから、大切に生きようと自覚した出来事でした。

同じような体験をした人はきっといるでしょう。生死の境から帰ってきた人は、命の大切さを誰よりも知っています。その人は自然と神様にすべてを委ねて生きる道を選ぶはず。身近にそのような人と出会ったなら、ぜひ生き方に耳を傾けましょう。きっとその人から、「やもめの献金」のたとえの意味を、頭ではなく肌で感じ、学ぶことができると思います。



年間第 33 主日 (マルコ 13:24-32)

人の子が戸口に近づいていると悟りなさい

今週、「年間第〇〇主日」を聖書と典礼に印刷する最後の週です。そして来週は「王であるキリストの祭日」を迎えます。ただ年間としての来週は第 34 週です。王であるキリストの祭日をいよいよ迎えるに当たり、イエスの言葉はこれまでの信仰の歩みの総決算が近づいていると知らせています。

「あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。」(13・29) イエスの言葉に何を感じるか、あなたが感じた印象は大丈夫なのか、考えてみることにしましょう。心に感じたことが正しければ安心できます。心に感じるものが正しくなければ、王であるキリストの祭日までに急いで修正しなければなりません。

土曜日に、お告げのマリア修道会のシスターが 9 人、まとめて訪ねてきました。いろいろ役職に就いていたのではないかというような人たちがずらっと玄関に挨拶に来たので何事かと思いましたが、「私たちはお告げのマリア 29 回生です。昨年奉献生活 50 周年を迎え、一年遅れですが教会巡礼をしている途中です」と話しておりました。

「おー、50 歳になりましたか」と、ひとまず「よいしょ」したら会話が弾みました。驚いたのは、入院している 1 人を含め、同期で入会した 10 人全員が奉献生活 50 周年を迎え、1 人も欠けていない、と言うのです。不摂生極まりない私たち司祭だとそうはいかないと思います。50 周年を迎えられず、欠けてしまうことは大いにあり得ます。さすが、「清貧」の誓いを立てているだけのことはあるなど感心しました。

もう一つ私は声をかけました。「責任者とか役職とか、いろいろ重たい荷物はもう降ろしたのですか？」すると何人かが「いえ、まだ背負子に背負っております」と言ってお互いに笑いました。この境地に達すると、「あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。」(13・29) この言葉は自分たちの救いが近いと知らせているのだと心躍らせるのではないかと思います。

「人の子が戸口に立っていると悟りなさい。」私はまだこの言葉に心が躍る、そういう境地に達していません。例えば玄関のチャイムが鳴ると、「人の子が戸口に立っている」など頭の隅にもなくて、「誰かい？もう忙しいのに・・・」なんて思うことすらあります。

司祭館のチャイムが鳴る時はそれ相当の用事のはずです。しかし喜びながら玄関に行くことはまずない・・・かなあ。玄関越しに見えるシルエットで、誰なのか、どんな用事なのかをおおよそ見当付けて顔を整えて「おまたせしました」と応対しているのが正直なところでは。

しかし人によっては、すばらしい心構えの人もいます。病人訪問で訪ねている人たちなど、前の日から、入念に準備をして待ってくださっています。聖体を運ぶ司祭を心待ちにして、ときには赦しの秘跡の準備

をして、その日に備えています。こうした人にとって、戸口に近づいてくるその人は、イエス・キリストの喜びを届けに来る人なので、心躍らせるわけです。

私たち一人一人に当てはめてみましょう。私たちのもとにも、イエス・キリストは戸口に立つことになります。私たちの生活が、しばしばイエス・キリストに背を向ける日々であったなら、戸口に立つ人はまるで逮捕令状を持ってやって来た人のように思えるでしょう。私たちが何を言おうと、すでに逮捕令状が出ていれば逮捕されます。逮捕され、起訴されて、裁判を受ける。イエスキリストに背を向けた日々を送る人にとって戸口に立つイエス・キリストは審判者です。

私たちの生活が、イエス・キリストを家に迎え入れる生活の積み重ねであったなら、家の戸口に立つ人はきっと私たちに幸せをもたらす人です。「それらの日には、このような苦難の後、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。」(13・24-25) 信仰が無駄に思えるようなことを体験しても、気を落とさずイエス・キリストはそばにいてくれると信じて日々を送る。そうすれば、最後に戸口に立ってくれるのはイエス・キリストなのですから、心躍る人が戸口に立っているはずです。

来週は王であるキリストの祭日です。この日にミサに参加する人は、いわば王であるキリストの前に立つ人です。イエス・キリストが審判者に見えるか心躍る人に見えるか。それは私のこれまでの生活にかかっています。

少なくともあと一週間あります。もちろん、来週のミサに背を向けることもできるでしょう。田平教会の家族はそんなことはしないと信じています。六年間、ミサに集まる皆さんに説教し続けてきたことは無駄ではないはずです。来週、心躍る人の前に立つ。そのつもりでこの一週間で過ごしましょう。

王であるキリスト(ヨハネ 18:33b-37)



王であるキリスト (ヨハネ 18:33b-37)

どんな試練の中でも、キリストは私たちの王です

王であるキリストの祭日、年間最後の主日を迎えました。ピラトが「それでは、やはり王なのか」(18・37)とイエスに問い返した部分が印象に残りました。私たちが、「それでは、イエスはやはり王なのか」とこの世の権力者から問われている、そんな受けとめかたをして学びを得ることにしましょう。

今月は急死された方の葬式をいくつも引き受けました。ご遺族にとってはもちろん一期一会の葬儀なのですが、主任司祭は急死された方への言葉が二度三度、続くことになります。司祭も人間ですから、だんだん話すとっかかりを見つかるのが難しくなります。

それでも、何かを話さなければなりません。そのたびに、もがき苦しんで言葉を絞り出しています。そんな時に今週の「王であるキリストの祭日」が巡ってきました。

朗読される福音は典礼がA年であるかB年であるかC年であるかで違いがあると思いますが、私の中では「主よ、あなたは世々にわたって私たちの王です」という信仰を表す日曜日だと考えています。

では今置かれている中で、私はどのようにこの信仰を表すかという、「どんなに似たような状況の葬儀が続いても、誠実にミサをささげ、説教をする」これが司祭である私にとって「あなたは私たちの王です」という信仰表明です。

王であるキリストが私にこう命じているのです。「似たような状況の葬儀が続いているが、それでも誠実さを示してくれるか？」それに対して「はい」と答えることで、今の時代に「王であるキリスト」を証しすることができるのだと思います。

どの時代にも、「王であるキリスト」への忠実が求められてきました。そしてその求めに「はい」と答えてくれる人がいました。イエスのすぐそばにいたペトロは「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と問われます。それに対しペトロは「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と答えました(ヨハネ 21・15)

ある人は殉教によって、ある人は誠実な人生によって、ある人は生き方を回心することで、王であるキリストへの忠実を表してくれたのです。私たちにも、自分にできる形で「キリストは私たちの王である」この信仰を表すことを求められているのだと思います。

福音朗読のピラトは、「それでは、やはり王なのか」とイエスに問いかけました。嘲りと嘲笑を受け、みすぼらしい姿をしていたイエスに、ピラトは興味も関心も無かったはずですが、それでも王なのか？と確認したのです。

イエスはいよいよ十字架のほかに残るものがない状況になって、王であると宣言します。すべての人の救いのために、十字架を選び取る王

であると、公言するのです。ここでは、イエスに敵対する人々も救うために十字架を選ぶ姿を想像しますが、イエスが十字架上で命をささげる相手は、敵対する人ばかりではありません。

福音書の中には、さまざまな苦しみを背負った人々のいやしが描かれています。会堂長ヤイロは、目に入れても痛くない娘を失いましたが、イエスによって生き返らせていただきました。一人息子を失ったやもめも、その一人息子をイエスによって返していただきました。

「どうしてこんなに苦しまなければならないのですか？」誰にも説明できないような重荷を背負った人の王となるために、イエスは十字架を担われ、命をささげてくださったのです。

この方に、「あなたは世々にわたって私たちの王です」と信仰を言い表します。イエスを信じて生きる人、イエスを信じて旅立つ人、すべての人が王であるキリストを証しする時、キリストは世々にわたって私たちの王であるのです。

私たちが信仰を表明するイエス・キリストは、すべての人に命をかけたお方です。王として、すべての人の生命財産に責任を持ってくださいます。「それでは、やはり王なのか」このピラトの質問に、「それでも、イエス・キリストは私たちの王です」と答えることができるように、準備を整えましょう。

この世の権力者、世俗的なすべてのものが、「それでは、やはり王なのか」と挑発しています。どんな挑発も、私たちから真理を奪い取ることはできません。私たちにとっての真理、それは「イエス・キリストは私たちの王です」この言葉の中に込められています。

待降節第1主日(ルカ 21:25-28,34-36)



待降節第 1 主日 (ルカ 21:25-28,34-36)

身を起こして、いつも目を覚まして

待降節第 1 主日、典礼暦が C 年に移行しました。これから一年、おもにルカ福音書が主日の典礼に朗読されます。ルカ福音書はたとえば「放蕩息子のたとえ」など、特色ある朗読が多く、きっと楽しく過ごせると思います。

[白くまくん]説教の切り出しに使った日常の出来事にも現れていますが、中田神父もついに、司祭になって最初にお仕えした川添神父様のような日々を過ごすようになってきました。この神父様は日常生活を常に話題に取り上げる神父様でした。出会う人、耳にしたこと目にしたこと、すべてが日曜日のミサ説教の呼び水になったり、「神の家族」という教会新聞の原稿になったりしていました。

私がお仕えするようになってから三、四年もすると、「主任神父様のそばでめったなことは言ったらいかんよ。すぐ説教にされたり『神の家族』に書かれたりするからね」と噂されていたものです。川添神父様もそこは承知していて、「最近はずいぶん用心するようになってきて、話のネタが転がってないなあ」とぼやいていました。

福音朗読に移りましょう。終末について語られています。終末は「消滅」とか「滅亡」なのではなく、「完成の時」なのだから、身を起こして頭を上げなさい、人の子の前に立つことができるようにいつも目を覚まして祈りなさい。この姿勢が大事なのだと強調しています。

何かの最終盤になった時、人は二つの反応を示すものです。一つは、適度に力を抜く態度。もう一つは、さらに速度を上げたり、もっと力を入れたりする態度です。第一の例としてオリンピック選手を挙げましょう。金メダルが確定した選手が、あと一回「世界記録に挑戦する試技をする」としましょう。走り幅跳びとか、棒高跳びとか、そういう競技を私は想定しています。そこで全力で跳躍すると、それはものすごい世界記録が出るかも知れません。

しかし、まだ余力があって、今回世界記録に認定されてもう一度跳べば塗り替えるだけの自信があるならどうでしょう？これ以上は絶対跳べない。そんな跳躍をするでしょうか？適度に力を抜いて、さらにその次の世界記録を出す余地を残すのではないのでしょうか。私だったらそうします。

第二の例を挙げましょう。長らく法廷で争いをして、最高裁判所まで持ち越してきた。その際新しい証拠を提出してこちらに有利な判決を勝ち取ろうとしているとしましょう。本当はあっと驚く証拠を提出できるけれども、一步手前の証拠でも十分だからと、その人は取っておきの証拠を提出しないでおくのでしょうか？最高裁判所は最終判決の場なので、ここで力を抜くということは考えられません。提出できるものはすべて出すはずで

このように、物事の最終盤で一方は余力を残し、一方はすべてを出

し尽くす。そういう場面はあると思います。ではイエスがおっしゃる「身を起こして頭を上げる時」「人の子の前に立つ時」は、やや力を抜いて備えておく時でしょうか、すべてを出し尽くすべき時でしょうか。私は、「すべてを出し尽くすべき時」ではないかと思います。

この「すべてを出し尽くす態度」を学ぶ季節が、待降節なのではないでしょうか。日本で言われている待降節はラテン語で「アドヴェントゥス」英語では「アドヴェント」と呼ばれますが、こうした諸外国の単語にあえて近づけるなら、「降誕準備節」が待降節です。ただ待つのではなく、「よく準備して待つ」のです。

「よく準備して待つ」とはどういうことでしょうか。だまって寝て待っても、クリスマスはやって来ますが、積極的な準備をしてクリスマスを迎えなさいということです。もっと言えば、全力を尽くして主の降誕を待つ。そのためにこれからの日々を使いましょうということです。

福音朗読の結びは、二通りの招きかも知れません。「人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい」(21・36)一つは終末の時であり、もう一つは主の降誕の時です。いずれにしても、「いつも目を覚まして祈る」ことが必要です。

ここで手を抜くことなど考えてはいけません。「もう少し祈りをサボっても、救い主を迎えることができたかも知れない。」誰がその「もう少しサボっても」の程度を知っているのでしょうか。主を喜び迎えるために、生活を整え、祈りにさらに心を込め、救い主の到来を知らずに過ごしている人にも呼びかける。これらすべてが、「いつも目を覚まして祈りなさい」ということです。ただ単に手を合わせているだけではないのです。

心が鈍くなるような誘惑はあちこちにあります。以前の人たちが、私ほど準備をして過ごしたでしょうか。将来の人たちが、私ほど準備をすると言えるでしょうか？ そうした思いはすべて「畏」なのです。誰とも比べたりせず、すべてやり切って、主の降誕のその時を迎えましょう。全力で準備して迎えるなら、その喜びはひとしおだと思います。



待降節第 2 主日 (ルカ 3:1-6)

心を開いて「神の言葉」の前に身を置く

待降節第 2 主日は洗礼者ヨハネとの関連の深い主日です。毎年洗礼者ヨハネの話をしている気がします。その中にあっても、何か少しでも、皆さんのために、新しい気づきを分け合いたいと思います。

先週は、人生で二度目の「私はもう死んでもいい」という言葉を聞きました。願いが叶えられ、これ以上望むことはない。そういう感情を言葉にしたものだと思います。

人生で二度目と言っているのですから一度目がありまして、一度目は出津の老人ホームでのことです。いつか私と再会したい。そう願い続けていた人と久しぶりに会うことができました。そこで「私はもう死んでもいい」と再会を喜んでくださったのです。

二度目はこの聖堂の中で起こりました。コロナ禍で面会が叶わず、長く秘跡を受けられなかった高齢者です。聖体拝領を受け、クリスマス前の赦しの秘跡を受け、体調の不安もあって病者の塗油も受けました。考えられるすべての秘跡を受けたことで、「私はもう死んでもいい」と喜びを表したのです。

幼子イエスを神殿で見いだした預言者シメオンを思い出しました。「シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。『主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。』」(ルカ 2・28-30) 二人ともその目で、神の言葉を大切にする人には願いが叶えられることを見たのだと思います。

その場面に立ち会った中田神父は、「こんなすばらしい場面に遭遇したのはこれで二度目だから、もう死んでもいい」と思ったのでしょうか。まだその境地にはたどり着けません。その境地を極めるのはいつでしょうか。何を見ても何を成し遂げても、そこまで到達できる気がしない。現状はそんなレベルであります。

今年の待降節第 2 主日、私の心に響いた言葉は「神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った」(3・2) という箇所です。ヨハネは「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」(3・4) という預言者イザヤの言葉を活動で形にしていくわけですが、「神の言葉」が「人間」に降った瞬間から、神の計画が始まる。この部分に惹きつけられました。

「神の言葉」はそのままで力強いものですが、歴史の中で「人間」に降ってから具体的な働きが始まっている、と感じます。かつての預言者たちがそうでしたし、洗礼者ヨハネも、神の言葉が降って、神の言葉に自分を開いて、それから彼の活動が始まりました。仮に、洗礼者ヨハネに「何かを成し遂げそうな雰囲気」が備わっていたとしても、「神の言葉」を抜きにしては何も始まらなかったわけです。

さて洗礼者ヨハネが「罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた」(3・3) とき、招きを受け入れて悔い改めの洗礼を受けた

人々もいましたが、彼を受け入れなかった人もいます。そのことを伺わせるのがイエスの宣教活動の終盤、「権威についての問答」の場面です。

祭司長たちや律法学者たちが神殿で教えるイエスに「何の権威でこのようなことをするのか」と詰問したときに、イエスのほうから問い返しました。「ヨハネの洗礼は、天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。」（ルカ 20・4）

質問に答えるために彼らは相談します。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。『人からのものだ』と言えば、民衆はこぞって我々を石で殺すだろう。ヨハネを預言者だと信じ込んでいるのだから。」（同 20・5-6）このように、宗教指導者たちはヨハネを信じませんでした。

民衆や、その中でも罪人扱いされていた人々はヨハネを信じ、宗教指導者は信じませんでした。その違いは何でしょうか。それは、ヨハネの活動を「神の言葉が降って活動している」と受けとめたかどうかだったのだと思います。神の言葉が、ヨハネを動かしている。そう理解した人たちはヨハネのもとに集まり、悔い改めの洗礼を受けたのです。

神の言葉は、人間に降って歴史の中で働きます。洗礼者ヨハネに降って救い主への準備が始まり、ヨハネを信じた民衆たちも、神の言葉によって悔い改めました。人を救う神の働きが形になるためには、神の言葉が降って、それを受け入れる人がどうしても必要なのです。

教会の中で何かを始めようとするとき、いちばんやっかいだと私が思うことは、「あいつに何ができるのか」という態度や言葉です。はなから計画や人物を「不足」と決めてかかっています。もちろん分かんなくもないです。その人の客観的な能力が不足していれば、そう言われても仕方が無いでしょう。

しかし教会の中で求められている働きぶりは、個人の能力とは別に、神の言葉に心を開いてくれる人かどうかということにもかかっています。神の言葉に信頼を置いて取りかかる人には、神の言葉が降って、計画が実現するように力が与えられるのではないのでしょうか。

そもそも「あいつに何ができるのか」と言われたら、ふさわしい人などどこにもいないでしょう。神の言葉が降って実を結ぶ場所は、「この仕事は私しかいないでしょ」と言っている人のいる場所ではなく、「私は取るに足りませんが、神の言葉に信頼して取りかかります」と言っている人のいる場所なのです。

神の言葉が降って、神の言葉を受け入れ、信頼して物事に取りかかる。この一連の出来事が、神の計画を前に進める力です。ここに集まる皆が、「心を開いて神の言葉を受け入れます。神の言葉が実を結びますように」と願う共同体になりますように。そうなった時、どんなに難しい計画でも、たとえそれが耐震補強工事でも、実現可能なのです。



待降節第 3 主日 (ルカ 3:10-18)

救い主を迎えるため、「半分を分け合える人」になる

待降節第 3 主日の福音朗読で、洗礼者ヨハネの活動が朗読されました。ヨハネの活動はすべて、あとから来られる「わたしよりも優れた方」(3・16)に群衆を向けさせることでした。ヨハネの勧めはヨハネ自身が求めている勧めではなく、あとから来られる方が求めている勧めと言えます。

皆さんは会費を払っているものがあるでしょうか。私は3年このかた、会員になりたいのになれずにいたものがありました。ようやく抽選を突破しました。それは2022年のカープファンクラブです。当選したのでもう死んでもいいです。いや、今のは取り下げます。私が当選したカープファンクラブは単年会員なので、毎年出直して抽選に応募しなければならぬのでした。死ぬわけにはいきません。

長い道のりでした。2015年くらいからカープが強くなりだして、セリーグで3連覇をしました。それと同時にカープファンががぜん増え、通常の継続会員枠に何年も空きがなくて申し込めませんでした。一時期は年間シートを買おうかとまで思い詰めていました。それから「単年会員」という枠が用意されたので抽選に応募し続け、4年目に抽選を突破しました。ようやく手に入れた枠です。大切に使いたいと思います。

さて福音朗読、ヨハネの最初の勧めを取り上げましょう。ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」(3・11)と答えました。「分けてあげること」が勧められています。この勧めを実行することが、救い主を迎える立派な準備になるのです。

「下着を分け合う」の部分ですが、下着を持っていない人がいるのだろうかと思いつつも、下着すら持たない貧しい人がいたのでしょうか。二枚のうち一枚を分けるのですから、大きく言えば持ち物を半分与えるということです。

「持ち物を半分与える」と聞いて、何かを思い出さないでしょうか？これはザアカイの物語に通じます。ザアカイはイエスに声をかけられ、心を開いて答えました。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」(ルカ 19・8)

「半分与える」ということは、とても重い決断です。物の大小もあるかも知れませんが、それでも、半分ということは、自分と分け与える相手を同じ重さで見ているのです。「施してあげる側」と「施しをもらう側」という見方ではなく、「私は、あなたを自分のように思っています」というしるしが、半分与えるということではないでしょうか。

そうすると、イエスが命じた「愛の掟」にも繋がります。「隣人を自分のように愛しなさい」(マルコ 12・31)。ヨハネの勧めに耳を傾ける人は、イエスが高く評価したザアカイの回心にも、またイエスが求め

た「愛の掟」にも心を開くことになるのです。

私たちも、洗礼者ヨハネの勧めに耳を傾けるべきです。洗礼者ヨハネに耳を傾けずにあとから来られる救い主イエスに耳を傾けることはできません。実際、洗礼者ヨハネに耳を傾けなかった律法学者とファリサイ派の人々は、イエスにも耳を傾けることができなかったのです。

「そんなことをしたら生活が破綻するではないか」そう考えるかも知れませんが、考えてみましょう。半分を与える場面は、いろいろな時にやって来ます。「三笠山」というお菓子があるでしょう。小さな子供がいるとして、その子はあまりにも小さい子だから、一口だけ分け与えるでしょうか。

もし小さな子が「三笠山」を手にしていたらどうでしょう？その子はあなたに、そのお菓子を半分に割って差し出してくれるのではないのでしょうか？「相手に適した分量」で分け合うのではなく、「あなたは私と同じ大切な人」と考えているなら、半分与えるのではないのでしょうか。

ご降誕も、あと二週間です。父なる神は、私たちにその独り子を分け与えてくださいました。「あなたは私と同じ大切な人」と考えて半分与えてくださったのでしょうか？いいえ違います。「持っているものすべて」を与えてくださったのです。

この二週間、父なる神が、私たちを愛してくださったその愛の大きさを考えましょう。その愛の大きさに感謝して、私たちが、さまざまな場面で半分に分け合える勇気を願いましょう。「私と同じように大切な人」が自分にいるというのは、とても素晴らしいことです。

待降節第4主日(ルカ 1:39-45)



待降節第 4 主日 (ルカ 1:39-45)

「挨拶」に神の祝福を込めて

待降節最後の週は、マリアがエリサベトを訪問する場面が取り上げられました。イスラエル巡礼に行くと、エルサレムの西「エンカレム」という土地に「エリサベト訪問の教会」と呼ばれる教会があります。そして谷を挟んで、谷の向こう側には「洗礼者ヨハネ生誕の教会」があります。

エリサベト訪問の教会には、出来事をあしらった壁画だったか、タイルでこしらえた絵だったかがありました。そして世界中の言葉で書かれた「アヴェ・マリアの祈り」のレリーフが飾られています。もちろん日本語もあって、日本からの巡礼者は必ず探し出して喜び合います。

さて今週の「マリア、エリサベトを訪ねる」の朗読箇所から、「挨拶」ということを取り上げて話したいと思います。エリサベトが身ごもったと聞くとマリアは出かけて、ザカリアの家に入ってエリサベトに「挨拶」します。マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどります。そしてエリサベトは聖霊に満たされて声高らかに言った(賛美した)のでした。

ここに何回か「挨拶」が取り上げられていますが、この「挨拶」は、日本人が考える「挨拶」と全く同じなのでしょうか？このことを今週考えて、救い主を待ち望む最後の準備に当てたいのです。日本人が考える「挨拶」、たとえば「おはようございます」「今日は寒いですね」「雨になりましたね」「それではさようなら」通常私たちが交わす挨拶と、福音朗読で紹介されているマリアの挨拶は、全く同じものなのでしょうか。

そう言われると、皆さんきっと「同じではないのかな？」と感じたと思います。福音書の中での「挨拶」でもう一つ取り上げると、天使ガブリエルが、救い主誕生の予告をマリアにする場面です。これに対してマリアは「この言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」(ルカ 1・29)という反応を見せました。この「挨拶」も、どうやら「おはようございます」や「お天気いいですね」の類いの挨拶とは違うなあとお感じになるでしょう。

では聖書の中の「挨拶」を理解するために、何を参考にすればよいのでしょうか。私たちにも理解の助けになる挨拶があります。それは「ミサの中での挨拶」です。祈祷書を開いたら、ちょうど良い参考がありました。「入祭のあいさつ」です。

ミサの始め、十字架のしるしのあとに「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに」と司式者が挨拶します。皆さんは「また司祭とともに」と答えます。この挨拶が、マリアの挨拶や、天使ガブリエルの挨拶を知るのにピッタリなのです。

この「入祭のあいさつ」には、儀礼としての意味合いを超えたものが含まれています。それは「祝福」です。司式者は「恵み、愛、交わり」

が三位一体の神から届きますようにと挨拶しているのです。「祝福を届ける言葉」という表現が、聖書の中の挨拶にはピッタリなのです。単なる儀礼ではなく、人が間に入って、神の祝福を届ける。そしてそれを受け取り、感謝・賛美する。これが、聖書の中で言われている「挨拶」なのです。

ここでちょっと余談ですが、ミサの中で「主は皆さんとともに」という挨拶が聞こえたら皆さんは何と答えますか？「また司祭とともに」と答えますよね。これ、よくよく考えると、「また司祭とともに」が厳密には当てはまらないときがあるのです。

三年前に、献堂百周年が行われて大司教様がミサの主司式をされました。大司教様が「主は皆さんとともに」と挨拶しているのに、「また司祭とともに」と答えるのは、厳密に言うとき当てはまらないかも知れませんね。ほかにも、福音朗読を助祭の方が務めたとします。助祭は、司祭ではありませんが、「主は皆さんとともに」と招きますね？皆さんの答えは、「また司祭とともに」。これって、よくよく考えると適当ではないわけです。

「そう言われれば、そうだなあ。」気付くことはとても大切です。あと一年待ってください。今日は、「そう言えばそうだ」で止めておきますが、この問題を日本の司教様始め、全国から集まった典礼委員会の代表がうまいこと解決してくれました。

来年の待降節からは、入祭のあいさつで大司教様が「平和が皆さんとともに」と言った場合も、主任司祭が「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに」と言った場合も、どちらにも当てはまる返事を皆さんもできるようになります。ミサの典礼が少し変わったとしても、「どうして大司教様の招きに『また司祭とともに』と答えるのだろうか？」と疑問を感じるよりは、ずっと良いと思います。

マリア様の挨拶を、ここまで考えてきました。儀礼的な挨拶を超えた、祝福を届ける働きが聖書の中の挨拶にはあります。まずは、ミサの中の挨拶では祝福を届けてもらっているのだなと意識しながら返事をしましょう。そしていつか、ミサの中の平和の挨拶「主の平和」を、キリストを知らない人にも届けられる人になりましょう。神の祝福は、私たちの挨拶次第で、すべての人に届けることができます。

主の降誕(夜半)(ルカ 2:1-14)



主の降誕(夜半)(ルカ 2:1-14)

心を開いて「私たち」となられた主を迎える

主の降誕おめでとうございます。「マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。」世界中のキリスト者が、ひとりの幼子を待ち望んで与えられた答えです。私たちは今日与えられたひとりの幼子を、唯一の希望として持ち帰りましょう。

「初めての子」「布にくるんで飼い葉桶に寝かせた」この姿は貧しい環境であれば同じ姿の子がいるかも知れません。それでも、私たちが目にしている幼子イエスは、同じ姿をしていても唯一のお方なのです。

貧しい姿で生まれると、それだけで命の危険が伴います。「生きていけるだろうか」という不安がつきまといます。神は同じその弱く貧しい命を受け取られました。イエスの誕生は、初めから人間につきまとう「死の恐怖」が打ち負かされるためだったのです。

誕生そのものは手放しで喜ぶことができますが、人間は誕生と同時に「死」と隣り合わせなのです。極端に貧困であればより早く近づいてくるかも知れません。しかしイエスは、人間に忍びよる恐怖を打ち負かすために、人となってくださったのです。次の通りです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ 3・16)

すべての人が、初めて見る希望を腕に抱くためにここに集まりました。イエスを信じて生きるなら、逃れられない恐怖を乗り越えることができます。イエスを腕に抱き、イエスを信じて生きるなら、すべての人が希望にあふれて生きることができるのです。

それぞれ、置かれた生き方があります。当てはめて考えてみましょう。幼い子どもたちは、おもちゃとか、大切にしている持ち物があるでしょう。おもちゃはいつか手放すのですが、イエス様を覚えて帰るなら、これからずっとそばにいて、喜びと楽しみを与えてくださいます。

中学生高校生にとって、イエス様をそばに感じて生きていくことは、誰も頼れなくなったときの助け主を持っていることになります。本当に追い込まれたときは、誰もそばで助けることができません。

学校での試験で、試験問題と答案用紙を前にして、誰がそばにいてくれるのでしょうか？誰もそばにいないはずですが、高校受験大学受験、「問題を開けてください」と言われた瞬間、誰もそばにいないときでも、イエス・キリストはそばにいて力づけてくださるのです。

あなたが社会人であれば、困難はより高い壁となってくるでしょう。それを乗り越えようとするとき、あなたのためだけにそばにいてくれる人がいるのでしょうか？皆、自分のことで精一杯なのです。それでもいつも、あなたのためにそばにいてくれる。それがイエス・キリストです。

それぞれの必要を叶えてくれる幼子イエスを、腕に抱き、心に納めて帰りましょう。中田神父も、羊飼いの仕事をそばで導いてくれる方として、幼子イエスを心に納めて帰ろうと思います。「わたしの羊の世話をしなさい」との仰せに、いつも忠実を尽くすことができるように、ミサの中で祈ります。各自、幼子イエスを受け取って、置かれた場所での人生を完成できるように、ミサの中で祈っていきましょう。



主の降誕(日中)(ヨハネ 1:1-18)

言がわたしたちの間に宿られ、生き続ける

あらためて、主の降誕おめでとうございます。夜半のミサで、人となられた御子は、人が避けて通れない死の苦しみ、恐怖に打ち勝つためにおいでになったと話しました。私たちのそばにいてくださるために、神の独り子は人となってくださいました。神が人となってくださったことを、違う見方で思い巡らすために、日中のミサではヨハネによる福音書が選ばれています。

私たちは驚くべき能力を備えています。それは「言葉を記憶する」能力です。幼い頃に習い覚えたことはずっと忘れないものですが、記憶に残っているのは「言葉」ではないでしょうか。

実際には、その当時の様子を覚えているのだと思いますが、長い時間を経ていくうちに、当時の場面が書き換えられることもあります。しかしそれでも思い出せているのは、当時の様子を「言葉」が組み立て直してくれるからです。形ではない「言葉」は、どんなに時間が経過しても記憶に残っているのです。

本日の「主の降誕(日中)」のミサは、「言(ことば)が肉となった」というテーマです。これも、実際の出来事がきつとあったでしょう。その意味では歴史の中で一度だけ起こったその様子だけが、ご降誕の出来事だと言えます。

けれども、クリスマスの飾り付けはたった一つではありません。とても豪華な飾り付けの馬小屋があったり、飾りを少なくして人それぞれが想像を膨らませるような工夫をしたり、いろいろあると思います。

もし、歴史の中で一度だけ起こったその様子だけが正しいと言うのであれば、教会ごとに違う飾り付けはどれも間違っていることになります。そうではなく、「言葉」がそれぞれの馬小屋に現されていれば良いと思うのです。例えば、「言は、自分の民のところへ来た」(1・11)この言葉が形になっていれば、それで十分だと思うのです。

馬小屋から得られる学びは大切です。私たちの中に残る「主の降誕」は、本当はどんな記憶なのでしょう。幼い頃の馬小屋の記憶かも知れませんが、よくよく考えるとその記憶は曖昧です。私は、馬小屋ははっきりしなくても構わないと思っています。「言は、自分の民のところへ来た」この言葉が形になっていれば、それで十分だと思うのです。

私たちの中には、ご降誕の出来事が「言葉」として記憶されています。次の通りです。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」

(1・14) 私たちの中で、景色は書き換えられることがあります。残り続けるのは「言葉」だと思います。景色は書き換えられているかも知れませんが言葉が変わらないので、同じ記憶として留まっているわけです。

いつまでも変わらないで、私たちの間に宿ってくださるために、神の言葉が人となってくださいました。感謝しましょう。そして、神の言葉にまだ触れていない人にも、神の言葉が宿り、神の言葉に生かされる人になるように、働きかけましょう。



聖家族 (ルカ 2:41-52)

神の望みがどこにあるかをよく考える家族

ご降誕の翌日が聖家族、とても珍しい巡りになりました。ご降誕の飾りのことを考えると、「主の公現はいつかなあ」と考えると思います。何と御公現も、神の母聖マリアの翌日なので、1月2日ということになります。さすがに、1月2日に馬小屋飾りを片付けるのは寂しいので、翌週「主の洗礼」まで飾りたいです。

これはついでになりますが、赴任したことがある教会の中で、「主の洗礼」まで馬小屋飾りを生かすために、洗礼者ヨハネがイエスに洗礼を授けている御像をオリジナルで作ってもらい、馬小屋飾りを背景に活かすようにした教会がありました。80万くらいしましたか。あれは今、どうなっているのでしょうか。

さて、今週の聖家族の主日を「イエスが絆になっている家族を目指そう」という形でまとめたいと思います。イエスが12歳になったときのエルサレム巡礼で、ヨセフとマリア、少年イエスの家族に最初の危機が訪れました。

ヨセフとマリアはエルサレム巡礼を終えて帰路に帰りましたが、イエスはそのままとどまったのです。初めて、両親が当然そう考えるだろうと思ったことと、イエスが当然だと思ったことが、食い違ったのでした。

両親の考えと子供の考えが食い違ったとき、家族に危機が訪れます。この危機はたいていの場合、両親の考えを子供が理解して回避されます。両親が下す判断は慎重に考えた結果が多く、子供が下す判断はそこまで考えていないことが多いからです。「いろいろ考え合わせると、両親の判断が正しい。」こうして家族の危機は去って行きます。

しかし、今回は違っていました。両親ヨセフとマリアは、イエスが出した結論に自分たちを委ねました。巡礼が終わったのだから当然故郷に帰るべきだと思っていましたが、「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」(2・49)イエスの言葉の意味が、分からなかったからです。

私は子育てについて聞かれると、決まって一つのことを伝えます。それは、「神様が子供に描いている時間割と、両親が子供に描いている時間割はしばしば違うことがあり、その場合神様の描く時間割に合わせるべきだ」ということです。

どういうことかと言うと、「いついつまでにはここまで辿り着かせたい。それなのにどうしてその年齢になってもたどり着けないのか。」ほとんどの両親が、このようなことを思い描いているでしょう。考えている時間割に到達してくれないとき、両親は子供に疑問を持ったり、悩んだり、怒りを覚えたりするのです。

果たして両親の描いている時間割だけがすべてなののでしょうか。も

し神様が、この子供に思い描いている時間割が別にあって、時がまだ来ていないのだとしたらどうでしょうか？両親は神様に、「あなたの時間割は間違っている」と言うのでしょうか。むしろ「私たちは神様がこの子供に思い描いている時間割を信じて委ねます」と、信頼の心を呼び起こすべきではないでしょうか。

いつも、中田神父は子育て中の両親にこの言葉を贈っています。「子供がいないからそんなことが言えるのだ」と思うかも知れませんが、私の兄弟の一人は自閉症で、両親がもがき苦しみ、最後に神様に委ねることができるようになるまでのすべてを見てきたので、子育ての苦しみを少しは知っているつもりです。

さてヨセフとマリアの態度をもう一度追いかけてみましょう。ヨセフもマリアも大変心配し、どう理解すれば良いのかを探していました。少年イエスは、父なる神が考えておられることを、少年の言葉で言い表します。そこでようやく、父なる神の思いに、人は合わせるべきなのだと思います。その場ですべてを理解することはできなくても、「母はこれらのことをすべて心に納めていた」(2・51)のです。

私たちに当てはめましょう。聖家族は私たち家族のお手本です。私たちは何を見倣えば良いのでしょうか。それは、家族に危機が訪れたとき、「親の言うことを聞きなさい」とか、「親の言うことがなぜ聞けない？」と押し付けるのではなく、「この危機を、父なる神の思いがどこにあるか考えながら乗り越えよう」こんなふうに受けとめて欲しいのです。

それは両親だけではなく、子供達も、家族がピンチになっている。神様の願いは何かを考えながら、神様の喜ぶ方に向かおう」そう考えて欲しいです。親と子が、ともに「家族の危機を乗り越えるために、父である神様の願いがどこにあるか考えよう」そんな協力ができる親子になってほしいと思います。

家族の危機は、イエス・キリストを通して初めて、間違いのない乗り越え方が示されました。幼子イエスを迎えたばかりです。私たちの家族にも、神様の時間割が関わっています。神の望んでいる家族に成長できるよう、聖家族の取り次ぎを願いましょう。

神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)